
魔界八犬伝《光に導かれし八玉の犬士》

如月政樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界八犬伝《光に導かれし八玉の犬士》

【Nコード】

N0499C

【作者名】

如月政樹

【あらすじ】

今から六百年以上も昔の事、この世を騒がせていた闇の一族の首領・玉梓が百年の眠りから目覚めてしまった。それを阻止する為、雷帝龍王に導かれた八人の犬士達。犬山導節、犬江新兵衛、犬塚信乃、犬飼現八、犬田小文吾、犬坂毛野、犬川莊助、犬村大角。この八人が光の宝玉に因って集結し、闇の一族との戦いを繰り広げる。今此処に、光と闇との戦いが今始まるうとしていた…。

第巻話 悪霊・玉梓（たまずさ）、復活

時は今を去る事600年以上も昔、戦国時代中期に起こった怪奇な事件を追う光の玉に導かれた八犬士の活躍の物語である。

その内の一人、犬山いぬやまごうせつ導節は山奥深くの岩場で修験道の修行を行っていた。

若干26歳にして全ての修験術を修得し、その後全国各地を行脚しながら日々精進していたのである。

そんなある日の事、導節がいつもの様に旅をしていると、突然無数の妖怪が導節の廻りを取り囲み、いきなり導節に襲い掛かって来たのである。

「おのれ、化け物め……。」
導節は得意の修験術を施し、妖怪達を一斉にやつつけていくのだった。

「ふう、毎回毎回こう妖怪が現れては、埒が空かないな。」

暫くして、導節は近くの古寺で野宿をしていると、導節の枕元に金色に輝く仏像が現れ、導節に話し掛けていったのである。

『導節よ、我が名は雷帝龍王らいていりゅうおう。天界を司る天帝なり。』

「雷帝龍王……。」

『導節よ、我はかつて悪の化身である暗黒の魔術師と名乗る魔者を封じたのだが、何者かに依って暗黒の魔術師が復活してしまった。』

「いったい何者なのですか、暗黒の魔術師とは……。」

『暗黒の魔術師とは、悪しき魔力を持った恐ろしい妖怪。だが、その正体は謎に包まれたままだ。導節よ、何としてでも暗黒の魔術師を捜し出し、再び奴を封じてくれないか。』

「しかし、どうやって暗黒の魔術師を……。」

すると、雷帝龍王は導節に一つの宝玉を手渡したのであった。

「この宝玉は……。」

『これは「八大童子の宝玉」と言って、大昔に役行者えんのぎやうじやと言つ修験

者が、龍の珠から作り上げたとされる伝説の宝玉だ。』

導節が宝玉を受けとると、いきなり宝玉が光を放ち、《忠》の文字が浮かび上がってきたのである。

「こ、これは……。」

『どうやら、お主は八犬士の一人に選ばれた様だな。』

「私が、八犬士の一人……。」

『そうだ、その宝玉がお主を選んだのだ。そして、お主はその宝玉を持って、残りの同志を捜さなければならぬのだ。』

「同じ宝玉を持つ仲間を捜す……。」

『よいか、これは天より与えられし宿命だ。一刻も早く、同じ宝玉を持つ仲間を捜し出し、暗黒の魔術師の野望を討ち砕いてくれぬか。』

「……承知しました、この犬山導節命に代えても、必ず私と同じ宝玉を持つ同志を捜して参ります。」

『そうか、よくぞ承知してくれた。それでは、お主に巻物授ける。受け取ってくれ。』

そう言つて、雷帝龍王は導節に、「天地滅殺破」の巻物を手渡した。

「この巻物は……。」

『導節よ、もし万が一危機に曝された時になったら、この巻物を使うがよからう。』

「解りました、雷帝龍王様。」

翌朝、導節は雷帝龍王から《忠》の玉と、天地滅殺破の巻物を持ち、再び旅を続けたのである。

古寺を出発してから三日目の事、導節が旅を続けていると、前方に白い霧が立ち込め始め、すかさず導節は錫杖を構えていった。

「……何だか恐ろしい妖気を感じるな。」

と、その時だ。白い霧の中から真っ赤な鎧を身に纏った死霊の軍団が現れ、導節は錫杖を構えながら修験術を唱えていった。

「オンバサラ・ナウマク・サマ ندا・ボダナン・インドラ・ソワカ

！
導師の放った修験術が死霊の軍団を撃破していったのである。

「くっ、次から次へと出て来やがって……。」
だが、幾ら死霊の軍団を倒しても再び復活し、導師は一旦その場から離れ、屋根の上に高く飛び移った後、再び修験術を唱えて行くのだった。

「オンバサラ・ナウマク・サマンド・ボダナン・インドラ・ソワカ
！」
何とかその場を凌いだ導師だが、かなりの体力を消耗してしまい、
ぱったりと倒れ込んでしまうのであった。

数日後、気を失っていた導師は、七日間眠ったまま目が覚めず、翌
日にはやっと目が覚めたのである。

「……ん、此処はいつたい何処なんだ。」

「あっ、気が付きましたね。」

「あなたはいつたい……。」

「私は、この宿屋の主人で、霞かすみと申します。」

「そうですね、でも私はいつたいどうして此処に……。」

「貴方様が近くの地藏堂の前で倒れていたところを、私の息子が此
処まで運んで来たのです。」

と、そこへまだ幼い少年が大量の薪を背負って帰って来たのである。

「ただいまあ。」

「お帰り、賢太。」

「息子さんですか。」

「ええ、一人息子の賢太です。まだ七歳ですけど、家の手伝いをし
てくれているので助かっています。」

「そうでしたか……。」

「おじちゃん、もう大丈夫なの？」

「ああ、君のお陰で助かったよ。」

「ところで、おじちゃんは何処から来たの？」

「ずっと遠いところから来たんだよ。」
「ふうん、じゃおじちゃんはいろんなところを旅しているんだ。」
「そうだよ。」
「いいなあ、おいらも大きくなったら旅をしてみたいなあ。」
「これ賢太……。」
「いいんですよ、男の子はでっかい夢を持つ事はいい事なんだよ。」
「うん。」
「本当にこの子は……。」
「まあ、いいじゃないですか。」
「ところで、名前を聞いていませんでしたが……。」
「申し遅れましたが、私の名は犬山導節と申す旅の修験者でございます。」
「導節様とおっしゃいますの。」
「ええ……。」
「導節様はどうしてこの様なところへ参ったのですか。」
すると導節は、今までに起こった事を全て話していった。
「そうだったのですか。でも、最近この近くで何だか怪しい出来事が頻繁に起きています。」
「その、怪しい出来事とはいったい……。」
霞は、導節にこれまでに起こった出来事を語り始めていったのである。
「そうだったのですか、それでその妖怪はいつたい何処に現れたのです。」
「この近くに養源寺と言うお寺があり、その養源寺の隣にある「無限回廊」と呼ばれる、まるで迷路の様な場所があります。」
「無限回廊……。」
「無限回廊は、恐ろしい魔物の巣窟。誰一人近寄る者はいません。」
「解りました、明日にでも無限回廊を探ってみましょう。もしかしたら、全ての謎が解けるのかも知れません。」

翌朝、導節は養源寺近くの無限回廊に向かつていった。

そこで導節が目にした物は、まるであの世とこの世を繋ぐ地獄の入口の様な洞窟が導節の度肝を抜いたのだった。

「此処か、最近魔物が出没する無限回廊と言うのは……。」

導節は早速無限回廊の中へと入っていき、松明を片手に奥の方へと進んでいったのであった。

「思った以上に恐ろしい場所だな。」

更に奥へ進んで行くと、壁に道標が貼られており、【この先、迷宮の間への入口。】と書かれていた看板が目飛び込んで来たのである。

「迷宮の間……か。」

導節は意を決して迷宮の間に足を踏み入れていくと、そこはまさしく迷路の様な場所だった。

「いったいどんな罠が仕掛けられているのか……。」
暫くすると、迷路の奥から何やらヒソヒソ声が聞こえて来たのである。

『へっへっへっ……、どうやら例の物を手に入れたらしいな。』

『ああ、全ては螳螂鬼様のお陰だからな。』

「何っ、螳螂鬼だと……。」

導節がその場から離れようとしたその時、不覚にも足を踏み外し、敵の罠に掛かってしまうのであった。

「しまった。」

それに気付いた魔物達が急いで罠に掛かった導節を見つけ、攻撃を仕掛けようとしたが、導節は術を施して罠を解除しつつ、魔物達を退治していくのだった。

「もう少しで螳螂鬼とか言う妖怪に見つかるところだったな。」

しかし、そんな事もつかの間、導節は再び迷路の奥へ進んでいったが、暫くして奥の部屋に辿り着き、大きな岩の扉を見つけたのであった。

「こんなところに、扉があるなんて……。」

早速導節は、岩の扉を開けてみると、そこにあつたのは無数の墓標が並んでおり、青白い火の玉がゆらゆりと浮遊していたのだった。

「何々だいたい……、こんなところに墓標があるなんて。」

導節が墓標を調べてみると、墓標の後ろに何やら文字が刻まれているた。

【悪霊・玉梓たますさ、此处に眠る。】

「悪霊・玉梓……、たしか百年前に封じられた悪霊が、こんなところに封じられていたなんて……。」

導節が玉梓の封じられていたお札を見ていると、突然悪霊封じのお札が突風で吹き飛ばされてしまい、玉梓が封じられていた墓が大爆発を起こし、その墓の中から悪霊・玉梓が復活してしまうのであった。

「うう、わらわを封じた者は何処じゃ。わらわをこの様な場所に閉じ込めた者は何処じゃ。」

その姿は、怨念を満ちており、邪気を漂わせていたのである。

と、そこへ一匹の妖魔が悪霊・玉梓の元へ駆け付けた。

「お目覚めになりましたか、玉梓様。」

「そなたは何者じゃ。」

「申し遅れました、拙僧は闇の僧侶・幻斎坊と申す者でございます。」

「その幻斎坊が、何故わらわの元へ来たのじゃ。」

「はい、最近我等の邪魔をする輩共ちゅうかいが、どうやら現れた様なのでございます。」

「その輩共とは何者じゃ。」

「光の八犬士とか申す輩共でございます。」

「何じゃと……、光の八犬士が現れたと申すのか。」

「御意、どうやらその内の一人が、どうやらこの近くにいる様でございます。」

それを聞いた導節は、急いでその場から離れ、一旦退却を講じるの

であった。

『棄てておけ、奴一人でわらわを倒すなど不可能じゃ。』

『しかし玉梓様、もし光の八犬士が全員揃ったら、我等闇の一族は滅ぼされてしまいます。』

『その心配は無い、わらわには秘策がある。』

『玉梓様、その秘策とはいったい……。』

『まず手始めに、妖魔・螳螂鬼を呼び寄せ、奴の息の根を止めてやるのじゃ。』

すると玉梓は、妖魔・螳螂鬼を呼び寄せ、導節の後を追わせ、息の根を止める様命じた。

『妖魔・螳螂鬼よ、分かっておろうな。』

『御意、必ずや光の八犬士の息の根を止めて御覧に入れましょうぞ。』

一方、無限回廊から脱出した導節は、玉梓復活を期に、光の玉を持つ同志を捜す旅を決意するのであった。

「悪霊・玉梓が復活した今、一日も早く残りの同志を捜さなければ……。」

遂に復活を遂げた悪霊・玉梓。果たして、導節は無事残りの同志を見つける事が出来るのか……。

第弐話 導師、謎の怪事件に挑む

悪霊・玉梓が復活してから二日目の朝、導師は残りの同じ光の玉を持つ同志を捜す旅をしていた。

「それにしても、悪霊・玉梓と暗黒の魔術師の関係には、何かありそうだな。」

導師が暫く歩いていると、遠くの方で黒山の人だかりで溢れ反っており、導師が人だかりを掻き分けると、何とそこには一人の少年が大道芸を披露していた。

「さあ、お立会い。これより御覧に入れる大道芸は、南蛮より伝わる世にも珍しい奇妙奇天烈な技をとくとご覧じろ。」

そう言つて、少年は次から次へと妙技を披露し、歓声が湧き挙がっていたのである。

「あの少年、なかなかの妙技を見せてくれるな。」

導師が少年の妙技に感心していると、突然空が真つ暗闇に包み込まれ、その暗闇の中から妖魔の軍団が姿を現して来たのである。

「またしても、妖魔が現れやがったな。」

すぐ様導師は、得意の修験術で妖魔の軍団を蹴散らし撃退していくが、あまりの多さに苦戦を強いられていた。

「これじゃ伐りが無いな。」

と、突然大道芸の少年が果敢に魔物の軍団を見事な技でやつつけていったのである。

「あの少年、ただ者では無いな。」

暫くして、導師は少年の元へ駆け付けていき、話しをしたのだった。

「お主、見事な攻撃技だが、何処で習ったんだ。」

「天狗山に住んでいる仙岳道人せんかくとうじんに習ったんだ。」

「天狗山の・・・仙岳道人。」

「ああ、そうだよ。」

「そうだったのか・・・。ところで、お主の名前は何と言うのだ。」

「私の名前は、犬江親兵衛いぬえしんべえと言います。」

「申し遅れたが、私の名前は犬山導節と言う旅の修験者だ。」

「導節様は、どうしてこの様な場所へ……。」すると導節は、親兵衛に今迄に起こった出来事を話していった。

「そんな事があったなんて全く知りませんでした。」

「親兵衛、今の魔物の軍団は、恐らく悪霊・玉梓の手下に違いない。」

「導節様、悪霊・玉梓とはいったいどんな魔物なのですか。」

「悪霊・玉梓は、かつてこの世を闇に変えた諸悪の根源。その玉梓が、百年の眠りから目覚めてしまったのだ。」

「本当ですか、悪霊・玉梓が復活したと言うのは……。」

「ああ、百年前の悪夢が甦ろうしている。何としてでも、悪霊・玉梓を再び封じなければ……。」

「導節様、どうやって悪霊・玉梓を封じようと言うのですか。」

「悪霊・玉梓を封じるには、私が持っている八大童子の宝玉が必要だ。」

すると親兵衛は、懐から大事そうに麻の袋から《仁》の文字が施されたた宝玉を導節に見せたのである。

「親兵衛、その宝玉を何処で手に入れたのだ。」

「この宝玉は、死んだお爺さんの形見なんです。死ぬ間際、お爺さんは幼かった私を呼び、『よいか親兵衛、この宝玉をお前に授ける。いずれこの宝玉が役に立つ時が来るだろう。』そう言い残し、ずっと肌身離さず身につけていたのです。」

「……そうだったのか。とりあえず、親兵衛は二人目の選ばれし光の犬士に選ばれた訳だ。」

「私が、選ばれし光の犬士……。」

「そうだ、親兵衛の持っている光の玉がお主を光の犬士として認めただんだ。」

「……導節様、私は光の玉に誓って、悪霊・玉梓を討伐します。」

「よくぞ申した、親兵衛。一緒に戦おう。」

「はい。」
こうして、犬江親兵衛を仲間に加えた犬山導節は、新たなる同志を見つめるべく、旅を続けるのであった。

翌日、導節と親兵衛は近くの宿に泊まり、身体を休めていた。

「導節様、最近やたらと怪奇現象が頻繁に起きていますが、もしかしたら悪霊・玉梓に関係があるのでしょうか。」

「恐らくな、だが油断は禁物だ。いつ何時奴等が現れるか分からないからな。」

その日の夜、辺りは静寂に包まれ、近くの木の上では一羽の梟ふくろうがホー、ホーと響かせながら鳴いていたのである。

そんな静寂な夜を脅かす怪奇事件が発生した。

一人の男が、酔っ払いながら道を歩いていると、遠くの方から全身緑色をした化け物が、いきなり襲い掛かり、その後酔っ払いの男は無惨にも殺されてしまったのだった。

翌朝、柳の木の下で男の変死体が発見され、奉行所の役人数名が現場へ駆け付け、立証見分が始まったのである。

「うわっ、こいつは酷いな。」

「笹野様、昨日の晩に現場を目撃したと言う者を連れて参りました。」

すると一人の役人が、目撃したと言う男を南町奉行所筆頭同心・笹野新三郎に引き合わせた。

「一つ聞くが、昨日の晩の事を詳しく聞かせてくれぬか。」

「へえ、あの晩あつしがふらりと飲み屋から帰る途中、丁度この柳の木の下辺りから悲鳴が聞こえたんです。あつしが駆け付けた時には、既に殺されていたんでございます。」

「・・・そうか、お前が駆け付けた時には、既に無惨な姿で殺されていたんだな。」

「へい。」

「城崎、こいつは唯の殺しじやなさそうだな。」

「笹野様、いったいどう言う事ですか。」

「・・・、私の感が正しければ、恐らく化け物の仕業に違いないと推測しているんだ。」

「笹野様、幾ら何でもそれは有り得ないでしょう。第一、それが化け物の仕業だとしても、証拠が無いじゃありませんか。」

「城崎、よく考えて見る。此処最近化け物に因る怪奇事件が六件起きているのだぞ。それに、死体の首筋を見てみる。こいつは刀傷でやられた物では無い。鋭い牙の様な歯型がくつきり残っている。

これはどう見ても化け物の仕業としか思えん。」

「・・・そうだ、笹野様。」

「どうした、城崎。」

「確かこの近くの宿に、旅の修験者が泊まっていると言っているのですが・・・。」

「何っ、旅の修験者。」

「はい、何でもその修験者は、妖怪退治を生業としているそうですけど・・・。」

「本当か、早速案内してくれぬか。」

笹野と城崎の両役人は、導節と新兵衛が泊まっている宿に向かい、早速笹野は、事件の概要を話していった。

「・・・と言う訳なのですが。」

「なるほど、そう言う事があったとは・・・。」

「導節様、もしかしたら・・・。」

「間違いない、闇の一族の仕業に違いない。」

「導節殿、闇の一族とは何者でございますか。」

「笹野様、闇の一族は悪霊・玉梓を中心とする妖怪軍団の事にござります。」

「何ですって。」

「導節殿、その悪霊・玉梓とは何者なんですか。」

「悪霊・玉梓は、今から百年前に封じられた大妖怪。その悪霊・玉

梓が百年の眠りから甦ったのです。」

「既に悪霊・玉梓は、この世を闇に変えようとしているのです。」

「俄信じ難い話^{にわか}のだが、いったいあの化け物をどうやってやっつけると言うのですか。」

すると導節と新兵衛は、懐から光の玉を笹野と城崎に見せた。

「そ、その光の玉は……。」

「まさか、八大童子の宝玉。」

「左様、我々は雷帝龍王より授かりし八大童子の宝玉を受け取ったのでございます。」

「それではお主達は、噂に聞く光の八犬士。」

「ええ、私達は悪霊・玉梓を倒す同志を捜しながら旅を続けているのです。」

「そうだったのですか……。」

「知らなかった……。はっ、それはそうと導節殿。」

「何か……。」

「今度の事件の下手人はいったい誰なんです。」

「それは分かりません。でも、一つだけ言えるのは今夜奴が再び現れるのを待つのです。そうすれば、全てが明らかになるでしょう。」

「分かりました、今夜手の者を引き連れ、警戒に当たらせましょう。」

「それは危険です。相手はとてつもない恐ろしい妖怪。笹野様でも手に追えない輩^{やから}です。全てはこの犬山導節と大江新兵衛にお任せ頂

けませんか。」

「分かりました、導節殿と新兵衛殿にお任せ致しますよう。」

「忝ない、笹野殿、城崎殿。」

その日の夜、導節と新兵衛は柳の木の近くの物陰に身を潜め、妖怪が姿を現れるのを待っていたのだった。

「導節様、本当に奴は現れるのでしょうか。」

「ああ、奴は必ず来る。」

と、その時だ。突然白い霧が辺りを包み込み、その白い霧の中から全身緑色をした妖怪が姿を現し、再び人間を襲い掛かって来たのだ。「うわゝ、助けてくれえ。」

物陰に隠れていた導節と新兵衛が男の悲鳴を聞きつけ、急いで現場に駆け付けていった。

「待ちやがれつ。」

導節が妖怪に術を放ち、怯んだ隙に男を助け出す事に成功したのである。

「さあ、早くにげるんだ。」

「は、はい……。」

男は脱兎の如くその場から逃げていき、導節と新兵衛は妖怪の前に立ちほだかつていった。

「とうとう現れやがったな、妖怪め。」

『貴様等は何者だ。』

「我が名は、修験者・犬山導節。」

「同じく、犬江新兵衛。」

『まさか、貴様等は光の犬士なのか……。』

「いかにも、我等は雷帝龍王様より命を下されし光の犬士。」

「この世を乱す悪の妖怪め、これまでに犯した罪を償うがいい。」

『黙れつ、我は闇の一族の一番手、妖怪・螳螂鬼。玉梓様の命により、貴様等光の犬士を滅ぼせとの御命令だ。』

「やはり悪霊・玉梓の差し金か。」

『我等闇の一族に逆らう者は、容赦無く抹殺するから覚悟しろ。』

するといきなり、妖怪・螳螂鬼が鋭い鎌で導節と新兵衛に襲い掛かり、打撃を与えようとしたが、導節と新兵衛は右往左往しながら螳螂鬼の攻撃を避けながら徐々に攻めていった。

「これでも喰らいやがれつ。」

導節が修験術を放つていき、螳螂鬼に打撃を与えていくが、螳螂鬼は卑劣な技で導節を苦しめていくのであった。

『けけけ……、さすがの光の犬士も、我の強靱な鎌の攻撃を避け

る事は出来まい。』

「くっ、螳螂鬼の奴……。」

「導節様……。」

螳螂鬼の卑劣な攻撃技に、窮地に追い込まれた導節と新兵衛。果たして、二人の運命やいかに……。

第参話 妖怪・螳螂鬼の逆襲

妖怪・螳螂鬼の卑劣な攻撃技に、窮地に立たされた導節と新兵衛。もはやこれまでかと思われたその時、導節と新兵衛の懐に忍ばせた光の玉が突然まばゆい光を放ち、螳螂鬼の目を眩ませたのである。

「そ、その光は……。まさか、八大童子の宝玉……。」

「いかにも、我等は光の玉に護られし者。」

「光の玉に護られている限り、我等は決して悪に屈したりはしない。」

「ならば、貴様等纏めて地獄に墮ちるがいい。」

螳螂鬼は再び導節と新兵衛に襲い掛かろうとしたが、導節と新兵衛はすぐ様避け、反撃を開始した。

「うおおお〜っ。」

新兵衛が見事な軽業で螳螂鬼に打撃を与え、更に導節が修験術で螳螂鬼を打ち破っていった。

『おのれ、光の犬士め……。この恨み、必ずや晴らしてくれようぞ。』

そう言つて、妖怪・螳螂鬼はその場から姿を消していったのである。

「導節様……。」

「新兵衛、奴はかなりの打撃を受けている。」

「でもこのまま放つて置いたら、また犠牲者が出てしまいます。」

「……とにかく奴を追うぞ。」

導節と新兵衛は、妖怪・螳螂鬼を追うべく、西国へと急いだのである。

それから三日後、導節と新兵衛は駿河の国に辿り着いたが、此処でも怪事件が頻繁に起きていた。

「導節様、又しても死体が……。」

「螳螂鬼め、とうとう此処まで手を延ばしていたか。」

すると、突然一陣の突風が吹き荒れ始め、巨大な竜巻が導節と新兵衛に襲い掛かって来た。

「な、何だ今の竜巻は……。」

「まさか、闇の一族の妖怪が現れたと言うのか。」

と、その時だった。竜巻の中から妖怪・鎌鼬かまいたちが姿を現し、導節と新兵衛に襲い掛かっていった。

『へっへっへっ……、貴様等が光の犬士だな。』

「おのれ、何者だ。」

『我が名は、妖怪・鎌鼬。我が主、妖怪・螳螂鬼様の命によりうぬ等の命、頂戴致す。』

「そう簡単に命を盗られてたまるものか。」

「新兵衛、こうなれば仕方があるまい。一気に型を着けるぞ。」

導節と新兵衛は、鎌鼬の猛攻に挑み、戦っていくが、鎌鼬の素早い攻撃に、導節と新兵衛は苦戦を強いられていくのである。

『それでも喰らうがいい。妖術・烈風斬！』

妖怪・鎌鼬の放った烈風斬が導節と新兵衛に命中し、大打撃を受けてしまったのだった。

「ぐはっ……。」

「くっ、強すぎる……。」

『へっへっへっ……、愚か者め。たかが人間如きに我に勝てると思っただか。』

「導節様、どうしましょう。」

「慌てるな、新兵衛。こつちには秘密兵器があるんだ。」

「秘密兵器とはいったい……。」

すると導節は、懐から一枚の御札を取り出し、術を唱えながら鎌鼬に放っていった。

「オンバサラ・ナウマク・ボダナン・インダラ・ソワカ！」

導節の放った御札が真っ赤な炎に変化し、一直線に鎌鼬の方向に向かって放たれ、見事に命中したのであった。

『おのれ、このままで済むと思うなよ。』

「導師様、これからどうしましょうか。」

「先に我々と同じ仲間を捜す事が先決だ。奴等を倒すのはその後だ。」

「分かりました。」

一方その頃、導師達との戦いに敗れた妖怪・螳螂鬼は、玉梓のいる幻魔城に向かっていた。

「くそつ、あんな風にやられるなんて、全く俺様とした事が……。」

と、そこへ幻魔城の兵士の一人が螳螂鬼に声を掛けて来た。

「これは螳螂鬼様、先程から玉梓様がお待ちかねでございます。」

「玉梓様が……、いったい何の様だろう。」

螳螂鬼は、早速玉梓のいる玉座の前まで歩いていった。

「玉梓様、お呼びでございますか。」

「螳螂鬼、お主どうやら光の犬士との戦いにしくじった様じゃな。」

「申し訳ございません。しかしながら玉梓様、奴等はまだ二人しか揃っておらず、攻撃を仕掛ける機会が幾らでもございます故、今一度この螳螂鬼に光の犬士を倒す機会をお与え下さいませ。」

「分かった、全て螳螂鬼に任せるとしよう。幻斎坊、あの者と呼ぶのじゃ。」

「畏まりました、玉梓様。出でよつ、妖怪・鎌鼬。」

幻斎坊は妖怪・鎌鼬を呼び寄せ、鎌鼬は玉梓の元に膝まづいたのである。

「お呼びでございますか、幻斎坊様。」

「鎌鼬よ、玉梓様のお話を聞いたであろう。お主は螳螂鬼と一緒に

光の犬士を倒して来るのだ。」

「承知しました、幻斎坊様。」

「鎌鼬よ、共に光の犬士を倒そうぞ。」

『ああ、我等に掛ければ光の犬士なんざ蹴散らしてやるぜ。』
『では頼むぞ、螳螂鬼、鎌鼬よ。』

一方、螳螂鬼と鎌鼬を追っていた導節と新兵衛は、三人目の仲間を
捜すべく、庚申山の麓まで辿り着いたのであった。

「とうとう庚申山まで来てしまいましたね。」

「ああ、それにしても螳螂鬼と鎌鼬は何処へ消えてしまったんだ。」
二人が庚申山の麓へ差し掛かった時、向こうの方から一人の剣士が
何やら探っているのを見掛けたのである。

「導節様、あれを……。」

「ん、あの剣士は何をしているのだ。」

二人がゆっくり剣士の側へ近づくと、突然剣士がふつと宙を舞い、
いずこかへ消え去っていったのだった。

「な、何だ今のは……。」

「あいつはいったい何者だ。」

導節と新兵衛は、あまりにも突然の出来事が起きてしまったせいで、
一瞬唖然としてしまったが、暫くして正気に戻り、姿を眩ました剣
士の後を追う事にした。

「導節様、此処は庚申山の頂上ですけど、さっきの剣士は何処へ行
ったのでしょうか。」

「さあ、何処へ消えたのか見当が着かない。」

「それにしても、何だか薄気味悪いところですね。」

「確かに、かつてこの場所は化け猫が住んでいたと言う伝説がある
からな。」

「化け猫……ですか。」

「そうだ、その昔岩山大六と言う怪力自慢の男が、たった一人で化
け猫を退治したと言うのだ。」

「それで、その化け猫はどうなりました。」

「徳の高い僧侶に因って、この近くの洞窟に封印したのだ。」

と、突然天空から雷鳴が轟き、導節と新兵衛の目の前に妖怪・螳螂鬼と、妖怪・鎌鼬が姿を現したのであった。

「貴様、螳螂鬼と鎌鼬……。」

「何故一緒にいるんだ。」

「光の犬士の諸君、また逢ったな。」

「我等が手を組めば、向かう所敵無しだ。」

「まさかこんな所まで来るとはな……。」

「今度こそ逃がしはしないぜ、螳螂鬼に鎌鼬。」 『それはどうかな……。』

「何っ、どう言う事だ。」

『我等は今までとは格段に強くなっているのだ。例え光の犬士だろうと、そう簡単にくたばるものか。』

「新兵衛、こうなったら徹底的にやるしかあるまい。」

「はい、導節様の仰せとあらば、この犬江新兵衛命を掛けても貴様等を退治してくれる。」

『ふんっ、減らず口の減らない野郎だぜ。ならば容赦はせぬぞ。』

すると突然、螳螂鬼と鎌鼬が一斉に導節と新兵衛に斬り掛かり、すかさず導節と新兵衛は身を避けながら攻撃を仕掛けていった。

「必殺・爆裂飛翔剣！」 新兵衛の必殺技である爆裂飛翔剣が炸裂し、螳螂鬼は打撃を受けてしまった。

『くっ、なかなかやるな。だが、その程度では我を倒す事など出来ぬぞ。』

そう言つて螳螂鬼は、得意の妖術で新兵衛を窮地に追い込んだ。

『妖術・氷結粒波陣！』

螳螂鬼の放った妖術・氷結粒波陣が炸裂し、新兵衛は大打撃を受けてしまったのだった。

「新兵衛えっつ。」

「ど、導節様……。私は大丈夫です。それより、螳螂鬼と鎌鼬を……。」

「分かった、お前は暫く休んでいる。」

「はい。」

導節は新兵衛を暫く休ませ、たった一人で螳螂鬼と鎌鼬を戦う事になつてしまふのである。

「貴様等、断じて許さん。」

「たった一人でどうやって戦うつもりだ。」

「我等に勝てる訳がなからう。」

「・・・くそつ、奴等をどうやって倒すか・・・。」

導節が螳螂鬼と鎌鼬の前に、いかなる手で倒そうか迷っていたその時、突如先程の謎の剣士が現れ、導節達に助太刀すると言つてきたのだつた。

「お主は・・・。」

「拙者は、犬塚いぬづかしの信乃と申す者。妖怪退治の助太刀を致す。」

「忝ない、信乃殿。」

「何だ、あの剣士は・・・。」

「そんな事はどうでもいい。たかが一人増えたくらいで、我等に敵うものか。」

「それはどうかな、妖怪・螳螂鬼。我が必殺剣の威力、思い知るがよからう。」

すると信乃は、刀を構え、得意の必殺剣で螳螂鬼を攻撃していった。

「喰らえつ、飛天流奥義・雷鳴爆龍斬！」

信乃の必殺剣である雷鳴爆龍斬が決まり、妖怪・螳螂鬼は苦悶の声を上げながら消滅していくのであつた。

「残るは貴様だけだぞ、妖怪・鎌鼬。」

「小賢しい奴め、こうなつたら奥の手を使うしかないな。」

「何をするつもりだ。」すると鎌鼬は、両手を構えながら突風を起こし、信乃に目掛け放つていったが、信乃はひらりと身を避けていき、逆に信乃は必殺剣で鎌鼬に攻撃を仕掛けていった。

「飛天流奥義・雷鳴爆龍斬！」

信乃の必殺剣・雷鳴爆龍斬が決まり、遂に鎌鼬は導節達の前で消滅していくのである。

「信乃殿、そなたのお陰で助かった。礼を申さなければならぬな。」

「いえ、それよりまだ名前を聞いていませんでしたが……。」

「私の名は、犬山導節と申す者。そして、今木の影で休んでいるのが、犬江新兵衛と申す。」

「導節殿に、新兵衛殿ですか。」

「信乃殿は、どうして此処に……。」

「私は、今まで剣の修行をして参りましたが、ある日妹の浜路はまじが何者かに因って連れ去られてしまったのです。」

「信乃殿、その者の正体は分かったのですか。」

「いえ、ただその者が怪しげな術を使うと言う事が分かったのです。」

「ど、導節様……。」

「新兵衛、もう大丈夫なのか。」

「はい、何とかだいぶ良くなった様です。」

「それより新兵衛、何か心辺りでもあるのか。」

「はい、近頃若い娘ばかり狙う誘拐事件が多発していますが、その殆どが魔物の仕業である事が判明したのです。」

「では浜路も、その魔物が誘拐したと言うのか。」

「恐らく、高い確率で魔物が関係しているのかも知れません。」

「すると、闇の一族の仕業か……。」

「導節殿、闇の一族とは何者ですか。」

「導節は、これまでに起こった出来事を信乃に話しをした。」

「まさか、私の知らない間に、そんな事があつたなんて……。」

「我々は悪霊・玉梓を追って旅をしているのだ。」

「そして私達は、光の玉に導かれ、此処までやって来たのです。」
すると導節と新兵衛は、懐から《忠》と《仁》の玉を信乃に見せたのである。

「そ、それは光の玉……。実は私も、《信》の玉を持っているのです。」

そう言つて、信乃は懐から《信》の玉を取り出し、導節達に見せたのだつた。

「それはもしや、八大童子の宝玉の一つ・《信》の玉じゃないか。」

「と、言う事は・・・信乃殿が三人目の同志。」

「私が、三人目の同志・・・。」

「そう、信乃殿は我々と同じ光の八犬士の一人なのだ。」

「その光の玉は、選ばれし八犬士の証。我々は、闇の一族を倒す宿命にあるのだ。」

「・・・導節殿、新兵衛殿、どうやら私はこの光の玉に導かれたようです。分かりました、不肖犬塚信乃・・・あなた達と共に戦います。」

「そうか、ありがとう信乃殿。」

「よかったですね、導節様。」

「ああ、では新兵衛、信乃殿。次なる四人目の同志を捜すぞ。」

「はい。」

「参りましょう。」

遂に三人目の仲間として加わつた犬塚信乃は、導節等と共に、四人目の同志を捜す事となつた。

果たして、彼等に待ち受ける物とはいつたい何か・・・。
導節達の運命やいかに・・・。

第四話 魔神岩の怪異

一方、妖怪・螳螂鬼と鎌鼬を失った玉梓は、闇の僧侶・幻斎坊に何やら相談事を話していた。

『幻斎坊よ、螳螂鬼と鎌鼬を失った今、もはや我等は絶望の淵に追いやられたも同然じゃ。』

『何を仰せられます、玉梓様。 奴等を倒す機会は何らでもあります。』

『しかも奴等、遂に三人目の仲間を見つけた様なのじゃ。』

『何ですと・・・光の犬士が三人に増えたと申されるのでございませうか、玉梓様。』

『うむ、さつき使い魔が我に報告をしてきたのじゃ。光の犬士は三人に増え、今四人目の仲間を捜しているとの事じゃ。』
『・・・玉梓様、こうなったら一気に奴等を始末した方がよかるうかと思いません。』

『そうじゃな。幻斎坊よ、全てその方に任せるとしよう。』

『万事、この幻斎坊にお任せの程を・・・。』
すると幻斎坊は、闇の八卦陣の前に立ち、印を結びながら術を唱え始めていったのである。

『闇の世界より出でし魔界の住人よ、今こそ我が命令に従い、その任務を遂行せよ。出でよつ、妖怪・猿神。』

幻斎坊が術を唱え終えると、闇の八卦陣が怪しい光を放ち、その闇の八卦陣の中から妖怪・猿神が姿を現した。

『お呼びでございませうか、幻斎坊様。』

『妖怪・猿神よ、玉梓様の御前じゃ。』

『これは玉梓様、お初にお目に掛かります。』

『お主に光の犬士討伐命令を下す。既に光の犬士は三人に増えており、四人目の仲間を捜しているに違いない。』

『妖怪・猿神よ、玉梓様の仰せの通りじゃ。一刻も早く、光の犬士』

を捜し出し、何としてでも始末するのだ。」

『万事承知致しました、必ずや光の犬士共を始末してご覧にいれましょうぞ。』

『頼んだぞ、妖怪・猿神。お前だけが頼りじゃからな。』

『御意……。』

その頃、妖怪・螳螂鬼と鎌鼬を倒した導節一行は、四人目の仲間を捜すべく、東北地方の陸奥の国に向かっていた。

「どうかしましたか、信乃殿。」

「どうも、私の持っている宝玉が光を失ってしまった様なのです。」

「光を失った……。」導節は信乃が持っている《信》の宝玉を手にとると、完全に光を失い、全く反応しなかつたのである。

「もしかしたら、信乃殿が持っている《信》の宝玉は、別の犬士が捜しているのかも知れんな。」

「導節様、信乃殿の本当の宝玉は、恐らく《孝》の文字が書かれている玉では……。」

「と、言う事は《信》の玉の本当の持ち主は、別にいると言う事になるな。」

「導節様、一刻も早く《孝》の宝玉を捜しましょう。」

「ああ、早いところ《孝》の宝玉を捜さない事にはな……。」
暫く歩いていると、近くの村に辿り着き、一軒の民家を訪ねた。

「御免下さい、誰かおりませんか。」

すると奥の座敷から、一人の老婆が現れ、導節達を招き入れた。

「おや、どちら様でございますか。」

「私達は旅の者だが、一晚宿をお願いしたい。」

「こんなところで良ければ、どうぞお上がりくださいませ。」

「そうですね、では早速……。」

導節達は民家に入り込み、暫く身体を休めていくのであった。

「旅のお方、どちらから参られたのですか。」

「私達は、江戸から参りました。」

「遙々江戸から来なされたのか。」

「はい、私達は諸国を旅しております故、何かと身体が鈍ってしまったのです。」

「そうでしたか、まあゆつくり休んでいって下さいませ。」

「忝ない、御好意に甘えさせて貰います。」

「ところで、此処に住んでいるのはお婆さん一人なのですか。」

「いえ、私の孫娘が一人いるのですが……。」

「娘さんがいらっしゃるのですか。」

「ええ……。」

老婆は何やら口を濁した態度で導節達を見ていたが、導節はすぐに

『こいつは何かありそうだな』と感づいたのだった。

「お婆さん、いったい何があったのか、話して頂けませんか。」

すると老婆は、あと十日程で自分の孫娘を山神様に捧げなければならぬと話していった。

「その山神様と言うのは、いったい何者なんですか。」

「はい、今から十日程前の事でございます。突然山の向こうの方から、大きな猿の化け物が現れ、『お前のところの娘をよこせ。』と言ってきたのでございます。」

「導節様、どうやら只事ではないようですね。」

もしかしたら、闇の一族に関係しているのかも……。」

「……ところで、娘さんは今何処にいるのですか。」

「孫娘は奥の座敷におりますが、今は誰とも話しはしたくないと申しておるのです。」

「導節殿、いかがなさいますか。」

「私が直接聞いてみよう。私が行けば、何か策が浮かぶかも知れぬ。」

そう言つて、導節は娘に話しを聞く為、隣の奥座敷に向かつていった。

「あなたは誰なの。」

「驚かせてごめんなさい、私は犬山導節と申す者でございます。」

「導師様、私を助けて下さい。」

「大丈夫、私達が守ってあげますから心配しないで下さい。」

「ありがとうございます。しかし、私の兄がたった一人で山神様を倒すと言って、出掛けたまま帰って来ないので。」

「何ですって……。」

「兄は私の為に、命を掛けて護ってくれているに違いありません。」

「それで、あなたのお兄さんの名前は……。」

「犬飼現八いぬかいげんぼちと言います。」

「犬飼……現八。」

「導師様、兄の事をご存知なのですか。」

「いえ……、それより山神様の居場所を知りませんか。」

「山神様は、この山の向こうの魔神岩の洞窟に住んでいると聞いた事があります。」

「魔神岩の洞窟……、そこに山神様がいると言つのですね。」

「はい。」

「早速明日、我々が魔神岩に向かい、山神様の正体を暴いて見せませう。」

「ありがとうございます。あつ、それからもし兄に逢ったら、これを渡して頂けませんか。」

すると娘は、一对の刀剣を導師に手渡した。

「この刀剣は……。」

「私の兄、犬飼現八しか扱えない特別な刀剣・【じゅうりゅう龍虎餓狼剣】と云う物です。もし兄に逢いましたら、この刀剣を渡して下さい。」

「分かりました、必ず現八殿に渡します。」

「新兵衛、信乃殿、明日の朝魔神岩へ向かうぞ。」

「もしかして、魔神岩の山神様の正体を暴くのですね。」

「ああ、何としても化けの皮を剥いでやるんだ。」

「導師様、いったい何者が山神様の名を語っているのでしょうか。」

「とりあえず明日行ってみるしかないだろう。」

「そうですね、とりあえず今日はもう遅いですから休みましょう。」
「ああ、そうしよう。」

翌日の朝、導節一行は山神様の正体を暴くべく、魔神岩の洞窟に向かっていた。

「導節様、本当に山神様がいたのでしょいか。」

「ああ、必ずいる。」

「それにしても、現八殿が魔物退治から出掛けたまま帰って来ないと言っつのは、どうも引つ掛かるんですよ。」

「それなんだよ、もし現八殿が魔物に捕われていたとすると、こいつはただ事じゃ済まされないぞ。」

「とにかく急いで現八殿を助けに行こう。」

導節達は犬飼現八を助ける為、急いで魔神岩の洞窟へ走っていった。待てつ、急いで隠れるんだ。」

導節が何かの異変に気付き、新兵衛と信乃を岩陰に隠れる様指示した。

「導節様、洞窟の前に番人がいます。」

「今のところ、番人は二体だな。」

「これからどうなさいますか。」

「とにかく夜を待とう。現八殿を救っつのはそれからだ。」

その日の夜、導節達は洞窟の入口が手薄になったところを見計らい、潜入して行くのであった。

「洞窟の中に入ったのはいいのですが、現八殿はいったい何処にいるのでしょうか。」

「分からぬ、とにかく奥まで行ってみよう。」

「導節様、あれを……。」

新兵衛は奥の扉にある岩牢の中にいる人影を発見した。

「おい、しっかりしろ。」

「……ん、誰だ……私を呼ぶのは……。」

「お主、犬飼現八殿でございますか。」

「いかにも、私が犬飼現八ですが……。貴方達はいつたい……。」

「私は、犬山導節と申す者。」

「犬山……。おお、導節ではないか。」

「現八、久しぶりだな。」

「どうして此処へ……。」

「お主の妹君から、兄を助けて欲しいと、此処まで来たんだ。」

「そうだったのか……。導節、その刀は……。もしや龍虎餓狼剣じゃないか。」

「ああ、こいつを渡して欲しいと頼まれたんだ。」

「忝ない、導節……。ん、導節……。後ろにいる二人は誰だ。」

「現八、この二人は私の仲間だ。」

「初めまして、私は犬江新兵衛と申します。」

「同じく、犬塚信乃と言います。」

「そうだったのか……。と言う事はお主達は……。」

「そう、私達は光の八犬士なんだ。」

「やはりそうか……。実は俺も、こいつを持っているんだ。」

すると現八は、懐から麻袋から光の玉を取り出し、導節達に見せたのである。

「こ、これは……。八大童子の宝玉。」

「しかも、《孝》の文字が浮かび上がっている。」

「はっ、私の持っている《信》の玉と、現八殿が持っている《孝》の玉が共鳴している。」

信乃が持っている《信》の宝玉と、現八が持っている《孝》の宝玉が互いに共鳴し合い、それぞれの持ち主のところへ戻っていくのであった。

「導節様、私の宝玉が……。」

「おお、俺の宝玉が……。まばゆい光を放っているぞ。」

「どうやら、本来の持ち主のところへ戻った様だな。」

「《信》の宝玉さえ手に入れば、使えなかった力が使える様になる。」

「私も、《孝》の宝玉を取り戻した今、思う存分必殺技を使う事が出来ます。」

「よかつたな、信乃、現八。」

と、突然新兵衛が導節に敵が近付いて来る事を知らせていった。

「大変です、導節様。」「どうした、新兵衛。」「敵がこの近くまで来ています。」

「しまった、どうやら感づいた様だ。」

「導節様、現八殿を助けねば……。」

「ああ、急いで現八を助けよう。現八、後ろへ下がっている。」

「分かった。」

導節は、印を結んで修験術を唱え、岩牢の扉の鍵を破壊していった。

「よしっ、早く出るんだ現八。」

「よっしゃあ、これで自由の身だ。とことん暴れてやるぜ。」

「導節様、奴等が来ます。」

「よしっ、みんな行くぞ。」

『おおっつ。』

導節達四人は、闇の一族の妖怪軍団を一気に蹴散らしていき、次々と襲ってくる妖怪達をやっつけていきながら奥へと進んでいった。

「どうやら此処は、魔物の親玉がいる場所らしいですね。」

「とにかく行ってみよう。」

「だが気をつける、この先どんな罠が仕掛けられているか分からないからな。」

四人は洞窟奥の扉を開き、中へと入っていくのだったが、突然巨大な影が四人を襲っていった。

「な、何だ今の影は……。」

「おいっ、こっちに来るぞ。」

導節、新兵衛、信乃、現八の四人は、怪しく動く影が迫って来るのを警戒しながら武器を構えていくが、導節は修験術を施して怪しく

動く影に向かつて術を放つていったのである。

「気をつける、姿を現すぞ。」

すると、縦横無尽に動いていた影が姿を現し、導節達は武器を構え戦闘体制を整えていた。

『うゝ、私の邪魔をするのは何者だ。』

「こ、こいつは妖怪・猿神。」

「何だつて……、何故妖怪・猿神が……。」「知っているのか、奴の事を……。」

「奴は昔、俺が倒した妖怪だが、まさか生きていたとはな……。」

『貴様、犬飼現八……あの岩牢をどうやって……。まあ良いわ、貴様を倒し、我が闇の一族の幹部としてのし上がるんだ。』

「妖怪・猿神、お前は山神を名乗り、人々を恐怖に陥れた罪、断じて許し難し。」

「我等光の八犬士が、必ずお前を倒すつ。」

『光の八犬士……。だと。面白い、貴様達の実力を見せて貰おうか。』

「臨むところだ、妖怪・猿神。」

「我等八犬士の力を思い知るがいい。」

導節、新兵衛、信乃、現八の四人は、妖怪・猿神との決戦を迎えようとしていた。

果たして、戦いの結末やいかに……。

第五話 光の犬士、天に誓いて結束を契る

妖怪・猿神との決戦を迎えた導節一行。

あまりにも猿神の素早い攻撃に、手も足も出ない状態が続いた。

「くっ、動きが早すぎて打撃を与える事が出来やしない。」

「妖怪・猿神は、一見動きが鈍そうに見えますが、かなりの俊敏性を持つ妖怪なんです。」

「いったいどうすりゃいいんだ。」

「導節、此処は俺に任せてくれないか。」

「現八、いったいどうするつもりだ。」

「こいつで一氣に型をつけてやる。」

現八は、龍虎餓狼剣を交差させ、全神経を集中させながら妖怪・猿神に向かつて一氣に必殺技を繰り出していったのだった。

「喰らえっ、必殺・裂風真空斬り（れっふうしんくうぎり）。」

現八の必殺技・裂風真空斬りを繰り出していくが、妖怪・猿神の強靱な身体には全く通用しなかった。

「何っ、俺の必殺技が通用しない・・・。」

「こっとなったら、我々の力を奴にぶつけるんだ。」

「ああ、全神経を集中させ、猿神に打撃を与えるぞ。」

それぞれ四人の得意な術や必殺技を繰り出していくが、猿神に全く打撃を与える事すら出来なかった。

「駄目だ、全く歯が立たない。」

「どうすればいいんだよ。」

「こっとなったら、一旦退却するしかない。」

「ああ、その方が無難だからな。」

「そうはさせるかっ。」

妖怪・猿神が導節達四人を阻止しようと妖術を施すが、導節が煙玉を使ってなんとか逃げ出す事に成功したのであった。

「猿神の奴、何であんなに強いんだ。」

「俺の必殺技が通用しないなんて……、いったいどうなっているんだ。」

「恐らく、悪霊・玉梓の仕業だろう。こんな事を出来るのは、奴以外に他に無い。」

「導節殿、これからどうするんですか。」

「妖怪・猿神を倒す方法は今のところ無い。だが、必ず倒す方法がある筈だ。」

「……そうだ、確か猿神を倒す法具が龍宮神社の宝物殿にある筈だ。」

「現八様、それは本当ですか。」

「ああ、だがその法具は普通の人では扱えない特別な法具だ。」

「いつたい、どんな法具なんですか。」

「実際見た訳では無いが、何でもその法具は、いかなる強力な妖怪でも、一瞬にして滅ぼす法具なんだが、確か名前は「まふうめつよんじきょう魔封滅殺鏡」と言っらしいんだ。」

「魔封滅殺鏡……。」

「とにかく、その魔封滅殺鏡を手に入れない事には……。」

「導節様、急いで魔封滅殺鏡を捜しましょう。」

「よし、急いで龍宮神社へ行こう。現八、案内してくれ。」

「分かった。」

導節達は、妖怪・猿神を倒す法具・魔封滅殺鏡を手に入れる為、龍宮神社へと急いだ。

一方その頃、妖怪・猿神はと言うと、魔神岩の洞窟に入ったまま、一向に表に出ようとはしなかった。

実は、妖怪・猿神が滅多に表に出ないのには理由があった。

妖怪・猿神の姿は、仮の姿をしており、真の姿は世にも恐ろしい人喰い妖怪で、特に若い娘の魂を喰らえば、百年の寿命が延びるとされていた為、滅多に本当の姿を見せる事は無いのである。

『くそつ、あともう少しのところで光の犬士共を倒せたものを……』
と、そこへ闇の僧侶・幻斎坊が現れ、妖怪・猿神に話し掛けて来たのである。

『だいぶ苦戦している様だな、妖怪・猿神。』

『これは幻斎坊様……。』

『お主、光の八犬士共にてこづっている様だが……。』

『申し訳ありません、しかしながら幻斎坊様、奴等は必ず我が倒し
てご覧にいきます故、もう一度機会を与えて下さいませ。』

『分かつておる、お主の力は拙僧が認めておる。が、自信過剰にな
り過ぎて我を失う癖がある。そこが、お主の悪い癖だ。』

『はっ、幻斎坊様のおっしゃる通りでございます。』

『よいか、妖怪・猿神。この次は決して失敗するではないぞ。』

『万事承知致しました、必ずや光の八犬士共を始末してご覧にいれ
ましょうぞ。』

『期待しておるぞ、妖怪・猿神……。』

その頃、導節一行は妖怪・猿神を倒す法具を求めて、龍宮神社にや
つてきた。

「此処が、龍宮神社か……。」

「何だか、不気味な所でございますね。」

「本当に、此処の宝物殿に猿神を倒す法具があるのか。」

「ああ、此処に間違いない。此処の宝物殿の中に、猿神を倒す法具・
魔封滅殺鏡がある。」

と、そこへ龍宮神社の宮司・平賀早雲ひらがなつぐむが導節達の前に現れた。

「これは、犬飼現八様。本日はどの様な赴きで参られました。」

「早雲殿、実は大事な用があつて参つたのだ。」

「現八様、そちらのお連れ様は……。」

「こちらは、犬山導節殿。その隣りが犬江新兵衛殿。そして、犬塚
信乃殿にございます。」

「よくぞ参られました、では中へどうぞ。」

宮司・平賀早雲は、導節一行を神社の奥の部屋に案内し、現八はこれまで起きた出来事を話していった。

「なるほど、ではその化け物を退治する為に、あの法具が必要だと言うのですね。」

「ああ、頼む・・・早雲殿。」

「しかしながら、あの鏡は先代の宮司から代々受け継いできた大事な法具。例え現八殿でも、こればかりはどうにもなりません。」

「早雲殿、これはこの世を救う為なんだ。頼む、この通りだ。」

「お願いでございます、早雲殿。」

「・・・分かり申した、そこまでおっしゃるのでしたら、宝物殿に納められている魔封滅殺鏡をお渡し致します。ただし、この鏡は、善の者には陽の力が、悪の者には陰の力が発揮される鏡。もし、善の者がよこしまな事を考えれば、逆の効果を倦む事になる。気をつけて使われるがいい、現八殿。」

「忝ない、早雲殿。」

「これで、妖怪・猿神を倒す事が出来ますね、導節様。」

「ああ、この鏡さえ手に入れば、例え猿神であろう、太刀打ち出来まい。」

「導節殿、急いで魔神岩へ行きましょう。」

「妖怪・猿神への逆襲だ。気を引き締めていこうぜ。」

「ああ、目指す相手は妖怪・猿神ただ一匹。何としてでも倒すぞ。」

『おお〜っ。』

それからどれくらいの間が掛かっただろうか。

導節一行は再び魔神岩へと辿り着いたのである。

「いよいよ決戦の時が来た様ですね、導節様。」

「ああ、さつきまで奴には勝てなかったが、この次は何としてでも奴を倒す。」

「猿神の奴、今度こそ叩きのめしてやるっ。」

「導節様、魔封滅殺鏡があれば、もう怖い物はありませんね。」

「そうだな、みんな行くぞっ。」

遂に妖怪・猿神との決戦を迎えた導節一行。だが、猿神の姿は何処にも無く、再び洞窟の奥へと進んでいった。

「猿神は、洞窟の奥の部屋にいる筈だ。」

「でも、やけに静かですね。」

「まさか、何処かへ姿を眩ましたのでは……。」

「いや、そんな筈は無い。奴は必ずこの洞窟の中にいる。」

と、その時だ。突然大きな地響きが起こり、大きな岩を破壊し、その岩陰から妖怪・猿神が姿を現した。

『また来たな、光の八犬士の愚か者共。』

「妖怪・猿神、前は不覚を取ったが、今度は絶対に貴様を倒す。」

『ふんっ、貴様等の力は既に知れている。愚かな人間共に、我を倒すなど不可能な事だ。』

「それはどうかな、妖怪・猿神。」

「我等には、とっておきの秘密兵器があるんだ。」

『何っ、秘密兵器だと……。』

「ああ、貴様を倒す為の秘密兵器がな。」

「妖怪・猿神、我等光の犬士が天に代わって成敗致す故、潔く裁きを受けるがいい。」

『そう簡単に滅ぼされてたまるか、返り討ちにしてくれようぞ。』

遂に、光の犬士対妖怪・猿神の決戦の時を迎えようとしていた。

妖怪・猿神が怪力を屈指して導節達を攻撃していくが、導節達も負けじとそれぞれの得意な術や必殺技を繰り出していった。

「オン・アビリタ・ウンケン・ソワカ！」

「必殺・烈風真空斬りっ。」

「飛天流奥義・爆裂雷鳴斬。」

「秘剣・爆炎十文字斬り。」

導節達の必殺技や術を繰り出していくが、猿神には全く通用せず、逆に猿神の怪力技に因って打撃を受けてしまうのだった。

『無駄な事を……、貴様等の術や必殺技など、我には通用せぬ。』
「導師様、こうなつたらあの鏡を使うしかありません。」
「……やむを得ん、信乃殿、あの鏡を使うぞ。」
「承知致した……、妖怪・猿神。魔封滅殺鏡の力を受けてみよう。」
「
信乃は魔封滅殺鏡を妖怪・猿神に向けて呪文を唱えていった。
「魔封滅殺鏡よ、光の犬士の名の基に於いて命令を下す。邪悪なる妖怪・猿神に正義の裁きを与え給えつ。」
すると、魔封滅殺鏡がまばゆい光を放ち、妖怪・猿神は魔封滅殺鏡の力に因つて強力な打撃を受けてしまうのである。
『何つ、魔封滅殺鏡だと……。』
「よっしやっ、奴に命中したぞ。」
「これで、猿神の奴を倒す事が出来る。」
「導師様、一気に勝負を決めましょう。」
「ああ、妖怪・猿神。これで貴様もお仕舞いだ。」
『うぬぬ……。こうなつたら本当の姿を見せるしかあるまい。』
すると妖怪・猿神は、遂に本性を現し、世にも恐ろしい姿で導師達の前にその姿を現した。
「な、何だと……。』
「あれが、妖怪・猿神の本当の姿なのか……。』
「魔封滅殺鏡の光を浴びたのに……。』
「いや、あれだけ魔封滅殺鏡の光を浴びたんだ。諦めるのはまだ早い。」
「「そうだ、最後まで諦めたら駄目なんだ。」
「信乃殿の言う通りだ、最後まで諦めるな。」
「よっし、一気に決めてやるぜ。」
導師達は、最後の力を振り絞り、妖怪・猿神に戦い挑んでいった。
『妖怪・猿神、これでも喰らうがいい。』
導師達の力が一つとなり、妖怪・猿神に向かってそれぞれの必殺技を放つていき、遂に妖怪・猿神は苦悶の声を上げながら滅び去っていったのである。」

「導師殿、まずは妖怪・猿神を退治する事が出来ましたね。」
「ああ、だが何時奴等が襲つて来るか・・・、想像が付かない。」
「それよりも、一刻も早く五人目の同志を捜さなくては・・・。」
「それに、暗黒の魔術師の事も気になるし・・・。」
「・・・そうだ、早雲殿なら何か知っているのかもしれない。」
「よし、一度龍宮神社に戻つて、早雲殿に聞いてみるしかないな。」
早速導師達は、暗黒の魔術師の事を聞く為、再び龍宮神社に戻つて
いった。
「暗黒の魔術師の事で聞きたい事があると申されるのか。」
「早雲殿、何か知っている事があつたら教えてくれないか。」
「・・・そう言えば、だいぶ前に黒装束に黒覆面をした者が此処の
神社に来た事があります。」
「何ですつて。」
「早雲殿、その者はそのあと何処へ行つたのか、御存知無いですか。」
「さあ、その方は何も告げず姿を消してしまわれました。」
「・・・導師、これからどうするんだ。」
「・・・先に我々と同じ仲間を捜し、そのあと暗黒の魔術師を見つ
け出し正体を暴いてやる。」
「導師様、こうしている間にも闇の一族の奴等が我々の邪魔をしよ
うと画策しているに違いありません。」
「導師殿・・・。」
「新兵衛、信乃、現八、我々は今四人しかいない。だが、いずれ我
々が八人全員揃つた時、闇の一族の首領である悪霊・玉梓との最終
決戦を迎えるだろう。」
「・・・光の宝玉が我等を護ってくれているんだ。」
「そうだ、俺達は決して最後まで諦めない。光の宝玉に誓つて・・・。」
「ああ、光の宝玉がある限り、我等光の犬士は永遠に不滅だ。」
「よし、気合いを入れて行くぜ。」

『おっつ。』

宿敵・玉梓討伐を胸に秘め、決意を新たに誓う導節一行。果たして、この先どんな展開が待ち受けているのだろうか……。

第六話 闇の妖術使い・ドクロ法師登場！

妖怪・猿神を倒してから五日後の事、導節一行は五人目の仲間を捜しながら暗黒の魔術師の探索を始めていた。

「導節様、暗黒の魔術師はいつたい何処にいますのでしょうか。」

「奴は神出鬼没の男だ、いつ何処に現れるのか……。」

「それよりも導節様、駿河の国に来たのはいいのですが、こんなところに人が住んでいるとは思われませんが……。」

「確かに、この辺りは誰一人住んでいないと言うのは、どうも合点がいきません。」

「まさか、闇の一族に関係があるんじゃないのか。」

「とにかく、この辺りを調べる必要があるな。」

早速導節達は、民家を一軒一軒調べていくのだが、何処にも人影は見られなかった。

「導節、何処にも人なんていないぞ。」

「確かに妙だな……、こいつは徹底的に調べる必要がある様だな。」

すると新兵衛が、地面に落ちていた一枚の紙切れを見つけ、導節に手渡したのである。

「導節様、地面にこんな物が……。」

「……こ、こいつは「百鬼夜行符」じゃないか。」

「百鬼夜行符……っていったい何々ですか。」

「百鬼夜行符は、異世界から魔物を呼び寄せる禁断の札。こいつを使えるのは、あの男しかない。」

「導節殿、その者の名前は……。」

「闇の法術使い・智徳法師。」

「導節様、そいつは何者なんですか。」

「智徳法師は元々、妖怪退治を生業としていた法術使いだったが、ある日突然邪悪の心を持つ様になり、闇の法術使いに身を投じてし

まった。」

「それで、原因はいつたい何々だったんですか。」

「・・・邪悪の妖術使い・ドク口法師の「邪極裂破じやくれつぱ乃術」のせいなんだ。」

「ドク口法師・・・って、まさか、暗黒四天王の一人・・・。」

「そうだ、ドク口法師は暗黒四天王の中でも、妖術に掛けては最強の妖怪だ。」

「ドク口法師・・・、厄介な奴が現れやがったな。」
と、そこへ一人の大男がゆっくりと導節達に近づいて来た。

大男の名は犬田小文吾と名乗り、近くの山小屋に住んでいる大柄な男で、駿河の国一帯は、闇の法術使い・智徳法師が暴れ回っていると話していったのである。

「それで小文吾殿は、智徳法師の居場所を御存知なのですね。」

「ああ、奴ならこの近くの羅漢寺にいるぞ。」

「羅漢寺・・・か。」

「導節、このまま羅漢寺に乗り込むか。」

「待てっ、そう慌てるな。羅漢寺に乗り込んだところで、必ずしも智徳法師がいるとは限らないぞ。」

「しかし、ドク口法師が何時現れても可笑しくない状況の中、何故智徳法師が闇の法術使いになったのか、それを調べるのが先決なのでは・・・。」

「・・・私が羅漢寺の状況を調べてみる。新兵衛達は此処で待機しているんだ。」

「導節様、我々も一緒に連れてって下さい。」

「駄目だ、もし万が一智徳法師かドク口法師が現れたらどうするんだ。」

「・・・新兵衛、導節様の命令だ。此処は温和しく、導節様の指示に従うんだ。」

「分かりました。」

「導節、此処は俺達に任せて、羅漢寺の探索を頼むぞ。」

「ああ……。」

「導師殿、羅漢寺の前には巨大な岩が遮っている。あの岩を退かせない限り、中に入る事は出来ない。」

「小文吾殿、力を貸してくれぬか。」

「万事任せておけ、俺の手に掛ければ、どんな岩でも動かしてやる。」

「では行こう。新兵衛、信乃、現八、しっかり留守を頼むぞ。」

その頃、駿河の国の富士山の麓にある、羅漢寺と言う大きな寺院があり、その羅漢寺の前には、巨大な岩が行く手を阻むかの如く、近づく者を遮っていた。

「此処が、羅漢寺か……。」

「なんだか、物々しいところへ来てしまった様だな。」

「小文吾殿、この中に智徳法術があるのだな。」

「ああ、間違い無い。奴はこの寺の奥にいる。」

「とにかく、この岩を退かせない事には、中に入る事が出来ないからな。」

「よし、俺の自慢の怪力で、この岩を退かしてやるぜ。」

小文吾が岩を退かそうとした瞬間、岩に掲げられている結界に阻まれ、動かす事が出来なかった。「くっ、結界が張られている様だな。」

「どうするつもりだ、導師殿。」

「こうなったら、術を使って結界を打ち破るしかあるまい。」

すると導師は、修験術を施し、結界を打ち破る呪文を唱え始めた。つた。

「オン・バサラ・ナウマク・ボダナン・インダラ・ソワカ！」

導師が術を唱え終わると、天空から一筋の雷鳴が轟き、羅漢寺の巨大な岩の結界を破壊していった。

「これで中に入る事が出来るぞ。」

「導師殿、気を付けて下され。どんな罠が仕掛けられているのか・

」。

「心配するな、私はこれまでに幾多の修羅場をくぐり抜けたんだ。これくらい的事は馴れているんだ。」

「それを聞いて安心した、では参ろう。」

導節と小文吾の二人は、羅漢寺の内部に潜入し、探索を開始したのである。

「智徳法師の奴、何処にいるんだ。」

「奴は姿を消す術を使っらしいんだ。何処から姿を現すか、全く見当が着かない。」

「とにかく智徳法師を捜そう、奴は必ずこの何処かにいる筈だ。」
すると突然、爆音と共に闇の法術使い・智徳法師が導節と小文吾の前に姿を現した。

『ようこそ、地獄の一丁目へ……。』

「き、貴様智徳法師……。」

『犬山導節、まさかこんなところで逢うとはな……。』

「智徳法師、何故闇の法術使いに身を投じたんだ。」

「煩い、あの時貴様が奴を倒していたら、俺は今頃最強の修験者になっっていたんだ。」

「だが、貴様が奴にとどめを刺さなかったから、奴を倒す事が出来なかった。」

「導節殿、奴とは何者なんですか。」

「……暗黒の魔術師。我々が追っている、謎の術師だ。」

「導節よ、あの時の恨みは決して忘れてはいない。こうなったら、

この場で決着をつけようぞ。』「臨むところだ、智徳法師。どちらが最強の術師か……勝負だっ。」

導節と智徳法師の因縁の対決が遂に始まろうとしていたその時、突如現れた謎の黒装束を身に纏った男が導節達の前に現れたのである。

『無益な戦いはやめるんだ……。』

『だ、誰だ貴様は……。』

『我が名は、暗黒の魔術師。』

「何っ、暗黒の魔術師だと……。」

「遂に見つけたぞ、暗黒の魔術師。」

「貴様、我の邪魔をするな。」

「双方とも引けい……。導師よ、どうやら勘違いをしている様だ。」

「いったいどう言う事だ。」

「確かに、我はお主達の敵として追われる身ではあるが、それは敵を欺く作戦だ。」

「敵を欺く作戦だと……。」

「その通り、闇の一族の首領である玉梓を油断させる為の策略だ。」

「では何故我等を助ける。」

「これ以上犠牲者を増やしたくないからだ。」

「勝手な事を言っただんじゃねえ、何が犠牲者を増やしたくないからだと……。そんなものは俺に通用しないんだよ。」

「ならば仕方ない、荒っぽい真似はしたくなかったんだが……。やむを得ん。」

すると暗黒の魔術師は、智徳法師に向かって術を唱え始めた。

「オン・コロコロ・キリセンマング・ボダナン・ナウマク・バサラ・ソワカ！」

暗黒の魔術師が術を唱え終わると、智徳法師の身体の周りに金色の光が包み込んでいき、暫くして智徳法師は全くの別人に変貌しているのであった。

「わ、私はいつたい……。おお、導師じゃないか。」

「智徳法師、本当にあの智徳法師なのか。」

「ああ、やっと元に戻ったみたいだ。」

「導師、急いで仲間のところへ戻るんだ。」

「暗黒の魔術師、いったいどうしたと言うんだ。」

「闇の妖術使い・ドクロ法師がお主達の仲間のところへ向かっている様だ。」

「何っ……。新兵衛達が危ないっ。」

「導節殿、早く急がないと……。」

「導節、俺も連れてってくれ。全ての原因は、ドクロ法師が仕組んだ畏だ。」

「……分かった、一緒に戦おう。」

『導節、私は先を急ぐ故、ドクロ法師の事は頼んだぞ。』

「暗黒の魔術師、お主はいつたい……。」

『いずれは分かるだろう……、それまで決して死ぬではないぞ。』
そう言うと、暗黒の魔術師は、その場から姿を消していったのである。

「導節、あの者はいつたい……。」

「一言で言えば、我等の敵では無いと言う事だ。」

「導節殿、早く行かないと新兵衛達が……。」

「よし、急ぐぞつ。」

導節、小文吾、智徳法師の三人は、新兵衛達のいる麓の村へと急ぎ足で戻っていくのであった。

丁度同じ頃、導節達の帰りを待っていた新兵衛達は、あまりにも帰りが遅いので、もしや命を落としたのではと不安を感じたのである。
「導節様の帰りが遅い様ですが、何かあったのでしょうか。」

「導節に限って、その様な事は無い。第一、導節は冷静沈着な男だ。」

「しかし、万が一導節様の身に何かが起きたら……。」

「心配するな、導節なら必ず帰って来る。」

と、その時だ。新兵衛達の前に白い煙が拡がり、その煙の中から、妖怪・ドクロ法師が姿を現した。

「き、貴様は何者だ。」

『我が名は、妖怪・ドクロ法師。』

「何っ……、まさか闇の一族の刺客か。」

「こんな時に、導節がいないなんて……。」

「貴様等が、噂の光の犬士か……。玉梓様も、こんな雑魚どもを相手にせよとは……。私も落ちぶれたものよのう。」

「何を言ってるやがる……。てめえなんか俺一人でぶちのめしてやるぜつ。」

「ふはは……。貴様等にこのドクロ法師様を倒す事など出来ぬ。」
「ならば、これでも喰らいやがれつ。」

現八が得意の必殺技でドクロ法師に攻撃を仕掛けていくが、ドクロ法師は一瞬姿を眩まし、隙について現八に妖術を浴びさせていくのであった。

「ぐわつ……。」

「現八い……。」

「おのれ、ドクロ法師め。絶対に許さない……。」

新兵衛は、果敢にドクロ法師に斬り掛かっていくが、ドクロ法師は妖術を施し、新兵衛を弾き飛ばしていくのであった。

「新兵衛殿、現八殿、しっかりして下さい。」

「信乃殿、俺達に構わず奴を倒すんだ。」

「導師様が帰って来るまでに、ドクロ法師を……。」

「承知致した。」

信乃は得意の必殺技でドクロ法師に攻撃を仕掛けていった。

「飛天流奥義・爆裂雷鳴斬！」

信乃の繰り出した必殺剣・爆裂雷鳴斬がドクロ法師に命中していき、ドクロ法師は大打撃を受けてしまうのだった。

「どうだつ、さすがのドクロ法師も信乃の必殺技には敵わないだろう。」

「……。ちよつと待てつ、ドクロ法師の様子が可笑しいぞつ。」

突然ドクロ法師の姿が、まるで霧の如く拡がっていき、信乃の身体を包み込んでいくのであった。「しまった……。」

「信乃殿おお……。」

「信乃様ああ……。」

「ふはは……。引つ掛かったな。我が秘術・幽体煙離術ゆったいえんりの威力は・

「くつ、か・・・身体が動けない・・・。」

「ドクロ法師、てめえ卑怯だぞ。」

「卑怯だと・・・、ふんつ、貴様等を倒す為なら手段を選ばないのさ。」

「し、信乃殿・・・。」

「このままやられちまうのか、俺達は・・・。」

「こんな時、導師殿と小文吾殿がいてくれたら・・・。」

「こうなったら、貴様等三人纏めて始末してやる。」

ドクロ法師の卑劣な攻撃に、窮地に追い込まれた新兵衛、信乃、現八の三人。

果たして、導師と小文吾、智徳法師の三人は間に合うのだろうか・・・。
そしてこのあと、智徳法師の正体が明らかになる・・・。

第七話 廃寺に眠る秘宝

ドクロ法師の卑劣な攻撃に、窮地に追い込まれた新兵衛達。

「もはやこれまでか……。」

と、思われたその時だ。

「そこまでだつ、ドクロ法師。」

間一髪のところ導節と小文吾、智徳法師の三人がドクロ法師の前に現れたのだつた。

「き、貴様は犬山導節……。」

「ドクロ法師、貴様の悪事もこれまでだつ。」

「もはや年貢の納め時だつ……、覚悟するんだな。」

「お、お前は智徳法師。この裏切り者めつ。」

「何が裏切り者だつ、貴様のせいで、危うく仲間を殺してしまうところだったぞ。」

と、その時新兵衛と信乃と現八が横たわっているのを発見し、急いで三人の元へ駆け寄っていったのである。

「新兵衛、信乃、現八、大丈夫か……。」

「ええ、私は大丈夫です……。」

「導節、俺達に構わず、ドクロ法師の奴を……。」

「導節様、奴は怪しげな術を使います。油断召されぬ様お気をつけ下され……。」

「おのれ、邪魔が入ってしまった様だな。仕方ない、貴様等全員纏めて始末してやるつ。」

ドクロ法師がいきなり導節達に襲い掛かっていき、すかさず導節は修験術を施していった。

「オンバサラ・ナウマク・ボダナン・インダラ・ソワカ！」

導節の修験術がドクロ法師に放つていくが、ドクロ法師は印を結んで術を唱えると、一瞬で姿を眩ましていくのであった。

「何つ、姿を眩ましただと……。」

「ドクロ法師め、何処へ消えやがった。」

「まだこの辺りにいる筈だ、油断するなよ。」

導師達が辺りを見回していると、何処からかドクロ法師の声が響き渡っていった。

『ふはは・・・、何処に目をつけているんだ。我は此処におるぞ。』

「おのれ、ドクロ法師。何処にいるんだ。」

するといきなり、導師達の背後に現れ、不意打ちを喰らわせていくとしていったが、間一髪でドクロ法師の攻撃を避けていき、導師は修験術でドクロ法師を弾き飛ばしていった。

『ぐわっ・・・。』

「ドクロ法師、もはやこれまでだ。覚悟しろっ。」

『お、おのれこのままで済むと思うなよ・・・。』
そう言つて、ドクロ法師はその場から姿を消していったが、負傷した新兵衛、信乃、現八の手当てを施していくのである。

「三人とも大丈夫か・・・。」

「ええ、しかしあと少しのところまでドクロ法師を倒せたのに、とても残念でございます。」

「仕方が無い、だがいずれは奴を倒す機会がある。それまでの間、暫く身体を休めるといいだろう。」

「分かりました、導師様。」

「導師、これからどうするんだ。」

「・・・まだ分からない。」

「もはや、討つ手は無いのか。」

と、その時だった。

小文吾が突然何かを思い出したかの如く、導師達に話しをしていったのである。

「導師様、一つだけドクロ法師を倒す妙案を思い出したのでございませぬ。」

「何っ、それは本当か。」

「はい、でも多少の危険は覚悟なさったほうが宜しいかと・・・。」

「構わぬ、我等は幾多の魔物と戦ってきた経験がある。それに比べれば、どんな危険が待ち構えようと、決して悔いは無い。」

「そうですか、それなら話しは早い。実は、この近くの古い廃寺があり、その廃寺の地下室に《照魔鏡》しやうまきやうと呼ばれる法具が隠されていると云う伝説があるんだ。」

「私も聞いた事がございます。なんでも、その照魔鏡は、強力な妖力を持つ魔物を封じる鏡かがみだとか……。」

「その鏡があれば、ドクロ法師を倒せると云うのだな。」

「ええ……。」

「その鏡がある廃寺の名前は……。」

「確か、養源寺と云う名前だった記憶がございます……。」

「養源寺か……、そこへ行けば照魔鏡があるのだな。」

「ええ、間違いありません。しかし、あの鏡には恐ろしい魔物が鏡を護っているらしく、その鏡を手にしよう者があれば、必ずその魔物の餌食になってしまうと言われているのです。」

すると導師は、少し考え事をしながらこう答えたのである。

「要するに、その魔物を倒せば鏡が手に入る……。簡単な事じゃないか。」

「どう云う事だ、導師。」

現八が怪訝な顔をしながら導師に話すと、更に導師はこう答えた。

「つまりこう云う事だよ、その魔物を我等の使い魔として使役してしまえばいいんだよ。」

「おい、正気で言っているのか……。」

「ああ、正気だ。」

「現八殿、導師様は我々の為に考えておられての事だ。あまり導師様を責めるな。」

信乃は現八を諭し、なだめていったのである。

「とにかく、養源寺に行つて照魔鏡を手に入れない事には、いつまで経つてもドクロ法師を倒す事は出来ない。」

「そつだ、早いとこ照魔鏡を手に入れよう。」

「新兵衛、信乃、現八、小文吾。お前達は此処に残って鋭気を養いながら休んでいるんだ。」

「導節はどうするんだ。」

「私は智徳法師と共に、養源寺に向かう。」

「導節、今まで迷惑を掛けてしまった分を取り戻す為に、俺も導節と戦う。」

「智徳法師、ありがとう……。」

「導節様、必ず帰って来て下さいませ。」

新兵衛は導節を心配しながら声を掛けていくと、導節は、

「心配するな、私は必ず帰って来る。それまでの間、みんなの事を頼んだぞ。」

「分かりました、ではお気をつけて……。」

「うむ、では智徳法師……行こうか。」

「ああ、行こう。」

こうして、導節と智徳法師の二人は、照魔鏡を手に入れる為、急いで養源寺へと向かっていった。

その頃、幻魔城ではドクロ法師が玉梓にこれまでの経緯を報告していた。

「玉梓様に報告します、犬山導節始め光の犬士どもは、駿河の国に到着し、既に五人目の仲間を集めた模様でございます。」

「……とうとう光の犬士が五人も集まってしまったか。」

「はっ……。」

「しかしながら、奴等が束になっても、我等闇の軍団には敵わぬものか。」

すると幻斎坊は、

「玉梓様、こうなったら一気に奴等を始末なさった方が宜しいかと……。」

「待てっ、まだ奴等を始末するのはそのあとじゃ。」

「御意……。」

『ドクロ法師よ、そう言えば智徳法師の方はどうなっておるのじゃ。

』
『そ、それがいつの間にか奴は正気に戻っており、我を裏切ってしまつた様にございます。』

『なんとも不甲斐ない……。まあいい、いずれにせよ奴を始末するのはそのあとでも出来る。』

『申し訳ありません、この次は必ずや裏切り者の智徳法師めを……』

『それから、ドクロ法師にこれを授ける。』

玉梓は、ドクロ法師に一枚の黒い札を手渡していった。

『玉梓様、この黒い札は……。』

『この黒い札は、人間の心を邪悪の心に変える「邪心符」と言う札じゃ。こいつを智徳法師の身体に宿らせれば、例え犬山導節であるうと、どうにもなるまい。』

『ではこの邪心符を智徳法師に使えば……。』

『左様、奴は我等の思うがまま。一気に光の犬士どもを叩き潰す事が出来ると言う訳じゃ。』

『なるほど、そうすれば智徳法師めは我の操り人形となる訳でございますな。』

『その通りじゃ、ドクロ法師よ。さあ、行くがいい……。』

『万事承知致しました。必ずや智徳法師を我の下部として操り、光の犬士どもを始末してご覧に入れましようぞ……。』

一方、照魔鏡を手に入れる為、養源寺に向かつていた導節と智徳法師の二人は、雑草が生い茂っている小さな廃寺を見つけたのであった。

『導節、どうやら此処らしいな。』

『この寺の地下室に、照魔鏡があるのか。』

『気をつけるよ、どんな魔物が待ち構えているのか……。』

『なあに、いかなる魔物が襲つてこようと、我が修験術で退治して

やる。」

「とにかく、中へ入ろう。」

暫くして、養源寺の内部に入っていた導節と智徳法師は、荒れ果てた状態の中を歩き進み、漸く地下室に通ずる隠し階段を発見したのである。

「この地下室に、照魔鏡があるのだな。」

「ああ、間違いなく照魔鏡は地下室の奥にある。」

導節と智徳法師は、ゆっくりと地下室の階段を降りていき、薄暗い地下室を歩いていくと、両脇には十二神将像がずらりと並んでおり、今にも動き出しそうな雰囲気にも包まれていたのである。

「導節、この十二神将像はかつて天界を守護していた、いわば護衛兵だったんだ。」

「いかなる魔物の大群をも、十二神将だけで蹴散らしていったんだからな。」

「おいつ、あれをみてみるよ。」

智徳法師が、地下室の奥にある嚴重に封印されていた扉を発見した。

「此処が・・・、照魔鏡が納められている場所か・・・。」

「だが、封印のお札が貼られているみたいだぞ。」

そのお札には、まがましい絵が描かれており、近付く者を寄せ付けさせようとしなかった。

「・・・ん、気をつけろつ。」

突然扉の前に、全身毛むくじやらの魔物が導節達の前に姿を現した。

『けけけ・・・、此処から先は行かせないぜ。』「貴様、何者だつ・・・。」

『我は妖怪・土蜘蛛ちゆうぐずなり。』

「遂に現れやがったな、だが我等に逢ったのが運のツキ・・・。」

「潔く天の裁きを受けるがいい。」

『此処の宝は誰にも渡さん。どうしても宝を手に入れたくば、我を倒してみろつ。』

するといきなり、土蜘蛛が口から糸を吐き、導節と智徳法師を襲撃していくが、導節はすかさず修験術を施していった。

「オン・バサラ・ナウマク・ボダナン・インダラ・ソワカ！」

導節の放った術が妖怪・土蜘蛛に命中し、続けざまに智徳法師がとどめの一撃を喰らわしていくのであった。

「天轟雷々・怒嚇如神！」

『そ、その術は……。まさかつ、お主は術使い・尾形宗久。』

「その通り、智徳法師とは仮の姿……。実は術使い・尾形宗久。」

『やはりそなただったか……。尾形左衛門博純の息子。』

「導節、驚いただろ。俺が尾形家の長男である事を……。」

「ああ、確かお前の父親は信濃の国の豪族だったと言う話しは聞いていたが、その息子がお前だったなんて……。」

「俺の父上は、ある日突然魔物に襲われ、命を落とした。当時幼かった俺は、一人の術使いに助けられ、十年近く術の修行をした。」

「それで、お前の父親を殺した犯人は誰なんだ。」

「そいつの名は、闇の僧侶・幻斎坊。」

『何だつて……。それは本当か。』

「知っているのか、土蜘蛛よ。」

『ああ、闇の僧侶・幻斎坊は、とんでもない妖力を持つ恐ろしい術使いだ。これまでに、幻斎坊に挑んだ者はいたが、奴に敵う者は一人もいない。宗久よ、敵を取ると言うのなら、私の力を使うがいい。』

「いいのか、土蜘蛛よ。」

『ああ、我は幻斎坊の様な邪悪な力を持つ奴は許せない性質だからな。』

「忝ない、思う存分活用させて貰うぞ。」

『それから、この奥にある「照魔鏡」を持って行っていいぞ。』

「しかし……。」

『遠慮するな、今まで我は悪の限りを尽くしてきたが、今日から正義に目覚めたぞ。』

「土蜘蛛……。」

「導節、急いで照魔鏡を……。」

「ああ……。」

導節は扉の奥に進み、桐の箱に納められていた照魔鏡を手に入れたのである。

「これさえあれば、ドク口法師の術を防ぐ事が出来る。」

「それだけでなく、ドク口法師を一気に倒す事も出来る筈だ。」

『宗久殿、それが噂の照魔鏡なのか……。』

「ああ……。」

『だが気をつける、ドク口法師は稀代の妖術使いだ。』

「分かっている、俺はそんなに軟^{やわ}じゃない。」

「宗久、あまり時間がないぞ。急いで戻らないと……。」

「そうだな、なんだか嫌な予感がするんだ。」

『宗久殿、こいつを受け取ってくれ。』

すると土蜘蛛は、宗久に一本の巻物を手渡したのである。

『その巻物は、我を召喚する為の大事な巻物。万が一、危険に晒された時は、いつでも我を呼ぶがよからうぞ。』

「分かった……。導節、急ごう。」

「ああ、ドク口法師が現れる前に……。」

無事照魔鏡を手に入れ、妖怪・土蜘蛛を式神として引き入れた導節と智徳法師こと尾形宗久は、急いで新兵衛達の元へと急いだ。

果たして、導節と宗久はドク口法師が現れる前に間に合う事が出来るのだろうか……。

第八話 闇の僧侶・幻斎坊の野望

一方その頃、導節達の帰りを待っていた新兵衛達は、未だドクロ法師に受けた傷は治らず、暫くの間養生していたのである。

「導節の奴、あまりにも遅すぎる。」

現八は、導節の帰りが遅いと少し苛立ちを感じていた。

「現八様、導節様と智徳法師殿はもうすぐ帰って来ます。それまでの間に、傷を治さないと……。」

「そうですね、一日も早く傷を治して、ドクロ法師の戦いに備えないと……。」

「……皆さん、私は皆さんにお話ししなければならない事があります。」

突然小文吾が、新兵衛、現八、信乃の三人に何やら相談事があると話し掛けていったのである。

「小文吾殿、いったい我々に話しとは……。」

「実は、いずれ導節殿に話さなければいけないと思っていたのですが……。」

「いったい何なんだよ、話さなければならぬ事って……。」

「……今から十日程前、私の村に一人の僧侶が訪ねて来て、こう言ってきたんです。『お主は、いずれ聖なる獣の力を入れるだろう……。』と……。」

「聖なる獣の力……。」

「それはいったいどう言う事だ。」

「詳しい事はよく分かりませんが、とにかくそう言うふうに言われたのでございます。」

「……なんだか信じられない話したが、とにかく小文吾殿が言っている事に偽りはなさそうだ。」

「それで小文吾殿、その僧侶は何者だったんですか。」

「さあ、顔は見えていませんが、恐らく……。」

「恐らく……。」

「とにかくその話しは後にして、導節殿と智徳法師殿が帰って来るまでの間、ドク口法師が現れるの待つんだ。」

「久しぶりだな、光の犬士の諸君……。」

「てめえ、ドク口法師。また現れやがったな。」
「……ん、犬山導節と智徳法師の姿が見えない様だが……。まあいい、奴等が来る前に、貴様等を始末してやるっ。」

「そうはさせるかっ。」

新兵衛、信乃、現八、小文吾の四人は、ドク口法師の攻撃を避けながら得意の術や必殺技で応戦していった。

「これでも喰らえっ、魔封破っ。」

「飛天流奥義・爆裂雷鳴斬！」

「必殺・烈風真空斬り！」

「秘剣・封魔火炎斬！」

四人それぞれの術や必殺技を繰り出していくのだが、ドク口法師は印を結んで術を唱え、姿を消していくのであった。

「くそっ、また消えやがった。」

「ドク口法師、卑怯だぞっ。」

新兵衛達がドク口法師を捜していると、四方八方から怪光線が放たれ、間一髪のところまで避けていくのだった。

「おのれ、ドク口法師め。いい加減に姿を現せっ。」

「ふはは……。そんなに見たいのなら見せてやる。」

するとドク口法師は、新兵衛達の前に姿を現し、こう言い放っていた。

「さあ、貴様等がどう挑むと言うのだ。たかが四人だけで、このドク口法師を倒そうなんざ、所詮不可能な事だ。」

「煩い、てめえなんざ俺一人で充分だ。」

「ふんっ、なかなか威勢がいいな。まずは貴様から始末してやる。」
「臨むところだ、ドク口法師。」

「現八、お前一人で大丈夫か。」

「ああ、導節が帰って来るまでに・・・、何と少しでも持ちこたえてみせる。」

「しかし・・・。」

「此処は一つ、現八殿に任せよう。」

現八は、ドクロ法師に斬り掛かっていこうとしたが、ドクロ法師はひらりと身を避け、すかさず妖術を施していき、打撃を与えていった。

『オンバサラ・バゾロウ・ドハンバヤ・ソワカ・ノウマク・バサラ・タンカン！』

ドクロ法師の妖術が炸裂し、現八は大打撃を受けてしまうのであった。

「ぐわっ・・・。」

『愚か者め、たった一人で挑むとは馬鹿な人間よ。』

「な、なんとと言う魔力だ・・・。」

「今までのドクロ法師とは格段に強くなっているぞ。」

「くっ、いったいどうすりゃいいんだ。」

「何か手立ては無いのか・・・。」

四人が諦めかけていたその時、突如現れた謎の老人の攻撃に因り、ドクロ法師は大打撃を受けてしまうのだった。

『な、何者だっ・・・。』

「ドクロ法師、もはや年貢の納め時だ。」

そこに現れたのは、白装束を身に纏った白髪の老人で、新兵衛はその謎の老人に見覚えがあった様だった。

「ま、まさか貴方は・・・。」

「久しぶりじゃな、新兵衛。」

「天岳老師様・・・。」

『何っ、天岳老師だと・・・。』

「だいぶ苦戦している様じゃな。」

『おのれ、とんでもない邪魔者が入りおったか・・・。まあ良いわ、

こうなつたら纏めて始末してやるつ。』

ドクロ法師は、天岳老師に妖術を施して攻撃をしていくが、天岳老師はひらりと身を避けながら法力を放つていった。

「オン・コロコロ・キリセンマンド・ボダナン・オンマエシ・ソワカ！」天岳老師の法力がドクロ法師に命中し、ドクロ法師は大打撃を受けてしまった。

「ドクロ法師、もはやこれまでじゃ。」

『おのれ、老いぼれめ……。ならば、これでも喰らいやがれつ。』
ドクロ法師が強力な妖術を放たれようとしたその時、

「待ちやがれ、ドクロ法師。」

なんと、導節と宗久が養源寺から無事帰り、何とか間に合ったのである。「導節、やっと来たか。待っていたぞつ。」

「遅くなつてすまない。」

「やいつ、ドクロ法師。てめえ今度こそ逃がしはしないぜ。」

『これで、光の犬士が揃つた訳だな。だが、裏切り者である智得法師に罰を与えねばならないな。』

そう言つて、ドクロ法師は懐から【邪心符】を取り出し、宗久に近づき邪心符を宗久の背中に貼り付けた。

すると、宗久の表情が一変し邪悪な心を持つ術使いに変貌していったのである。

「宗久つ、しつかりしろ。」

『光の犬士め、我が術を受けるがいつ。』

いきなり宗久が、導節達を襲撃し、五人は戦闘体制を整えた後、宗久を攻撃していった。

「宗久、いい加減に目を覚ませつ。」

「駄目だ、宗久殿は正気に戻る気配はなさそうだ。」

「ドクロ法師、宗久殿に何をしたつ。」

『ふはは……。ちよつとした細工を施したまでだ。』

「何だどつ……。」

「やいつ、宗久殿を元に戻しやがれつ。」

『無駄だ、奴は今我の下部しもへとして仕えているだけの事だ。』
「どうする、導師。」

すると、天岳老師が突然こんな事を話し始めたのである。

「皆の者、我に考えがあるのじゃ。」

「天岳老師様、何かいい方法でもあるのですか。」

「わしがあの男の動きを封じるから、お主達はその隙に背中に貼り付けてある邪心符を剥がすのじゃ。」

「分かりました、天岳老師様。」

早速天岳老師は、宗久に法力を施し、動きを封じていった。

「オン・バゾロウ・ドハンバヤ・オンマエシ・ソワカ！」

天岳老師が施した法力に因って宗久の動きを封じていき、その隙に導師たちが宗久の背中に貼られていた邪心符を剥がす事が出来たのだった。

『しまった……。』

「ドク口法師、これで形勢逆転だつ。」

「もう、貴様の悪事もこれまでの様だな。」

『うぬぬ……。もう勘弁ならぬ。かくなる上は、奥の手を講じるしかあるまい。』

「そうはさせるかつ、ドク口法師。」

すかさず宗久は、巻物を口にくわえ、印を結びながら術を唱えはじめていった。

「天地万物・虚来成就。出でよつ、式神・土蜘蛛つ。」

宗久が術を唱え終わると、突如式神・土蜘蛛が現れ、口から無数の糸がドク口法師の動きを封じていったのである。

『な、何つ……。』

「ドク口法師よ、これでも喰らうがいい。」

続けざまに、導師が照魔鏡をドク口法師に向けると、突如照魔鏡が光を放ち、ドク口法師の妖力を完全に封じていったのだった。

『お、おのれこわっぱどもめ……。』

「ドク口法師、これでてめえもおしまいだあゝつ。」

「我等光の犬士の力、思い知るがいつ。」

導節達五人と、宗久の六人は、力を合わせてドクロ法師を一斉攻撃していくのだった。

『うわあ~~~~っ。』

遂にドクロ法師は、導節達に因って、苦悶の声を上げながら消滅していくのである。

「これでやっと、ドクロ法師は完全に倒したな。」

「ああ、完全にな・・・。」

「導節殿、これからどうするんだ。」

「さあな、まだ分からん。しかし、確実に奴等は徐々に力を増している。何としても悪霊・玉梓の野望を阻止しないと・・・。」

「そうだな、それまでに他の仲間を探さないと・・・。」

すると天岳老師は、

「光の犬士達よ、お主達が探している仲間は、山城の国における様子や。」

「本当ですか、天岳老師様。」

「左様、だが山城の国には、恐ろしい魔物が住んでいると言っ・・・。」

「天岳老師様、その魔物とはいつたい・・・。」

「大江山の怪物・酒呑童子しゅてんどうじ。恐ろしい魔力を持った、最強の妖怪じや。」

「酒呑童子・・・か。」

「しかも、酒呑童子は最強の武器を持っているらしい。」

「最強の・・・武器だとっ。」

「そいつはいつたい・・・。」

「魔断烈火剣まだんれつかげんと言っ、一撃で全ての物を破壊する、究極の魔剣じや。」

すると導節は、

「天岳老師様、魔断烈火剣は禁断の魔剣。使う者に因っては命を落とす危険な剣・・・。」

「左様、あの魔剣をまともを受けたらひとたまりも無いだろう。」
「でも、どうやって奴に勝てると言っのうだ。」
「・・・それは分からない。だが、必ず方法がある筈だ。」
「導節様、こうなったら一刻も早く、山城の国に行きましょう。」
「そうですね、今頃山城の国では、酒呑童子が暴れているのかも知れませんよ。」
「・・・行こう、山城の国へ。」
暫くして、宗久は天岳老師と共に悪霊・玉梓の居場所を捜すと導節達に告げ、導節達五人は急いで山城の国へと向かっていったのであった。

その頃、幻魔城ではドクロ法師が敗れた事で苛立っている玉梓の姿があった。

「うう、おのれ光の犬士どもめ・・・、又しても我等の切り札であるドクロ法師を撃破しおって・・・。」

「気を鎮めて下さいませ、玉梓様。」

「幻斎坊、全てはお主の責任じゃぞ。」

「も、申し訳ございません。しかしながら玉梓様、次なる手立てはすでに講じてございます。」

「幻斎坊、それは本当であろうな。」

「はっ、左様にございます。」

「して、その手立てとは何じゃ。」

「はっ、山城の国にある大江山に住む怪鬼、酒呑童子を操り、光の犬士どもを始末するのでございます。」

「酒呑童子をどうするつもりじゃ、幻斎坊。」

すると幻斎坊は、懐から一枚の赤い御札を取り出し、玉梓に見せたのである。

「玉梓様、この赤い御札は「れいまでんかいふ霊魔転怪符」と言って、邪悪の力を増幅させる効果があるとされる札にございます。」

『なるほど、それなら流石の光の犬士どもも、手も足も出まい。幻齋坊、なかなかの妙案じゃな。』

『お褒めに預かり、恐縮でございます。』

『それで、その役目は誰がするのじゃ。』

『この幻齋坊自ら大江山に赴き、直接酒吞童子を我が下部として使役致す所存でございます。』

『左様か、では早速大江山に行くのじゃ、幻齋坊。』

『御意……。』

悪霊・玉梓の命を受け、大江山に向かった闇の僧侶・幻齋坊。実は幻齋坊には、もう一つある画策を考えていたのである。

『くくく……。この霊魔転怪符さえあれば、いかなる妖怪を凶暴化させる事が出来る。・・・そうだ、大江山の酒吞童子を凶暴化させた後、例の場所に赴き、あの妖怪を復活させるとしよう。そうすれば、玉梓様もお喜びになられるだろう……。』

幻齋坊が抱いている野望、それはいったい何なのか……。

そして、幻齋坊が復活させようとしている妖怪とはいったい……。何も知らない導節達は、いったいどう挑むと言うのか……。

果たして、導節達の運命やいかに……。

第九話 闇の使者、冥獣四天王現れる！

悪霊・玉梓の命を受け、山城の国の大江山に辿り着いた幻斎坊は、大江山の怪鬼・酒吞童子の前に姿を現し、こう話し掛けていったのである。

「お主が、大江山の酒吞童子か……。」

「そう言う貴様、何者だっ。」

「拙僧は、幻魔城城主・玉梓様に仕える闇の僧侶・幻斎坊と申す。」

「その幻斎坊が我に何の様だ。」

「単刀直入に話そう、我等闇の一族に力を貸さぬか……。」

「闇の一族に力を貸すだと……、それは出来ない相談だ。」

「ならば仕方があるまい……、貴殿には我等の下撲となって貰うぞ。」

すると、幻斎坊は酒吞童子に奇襲攻撃を仕掛け、酒吞童子は幻斎坊の攻撃を避けていくが、暫くして幻斎坊は姿を消していったのである。

「幻斎坊っ、何処へ消えた。」

「ふはは……。酒吞童子よ、貴様には私の攻撃をかわす事が出来るものか。」

「黙れっ、何が何でも貴様等闇の一族に力を貸すものか。」

「ならば仕方あるまい、あまり荒っぽい事はしたくはないが……やむを得んな。」

そう言つて、幻斎坊は懐から「霊魔転怪符」を取り出し、酒吞童子に目掛けて放つていった。

「げ、幻斎坊……貴様何をした……。」

「ほほほ……、ちよつと細工を施したまでだ……。貴様は今日から私の下部として光の犬士を抹殺して貰うぞ。」

「うっ……。うおおっ。」

幻斎坊が酒吞童子の背中に「霊魔転怪符」を貼り付け、酒吞童子の

表情が豹変していき、邪悪に満ちた恐ろしい魔物に変貌していったのである。

『さあ、酒吞童子よ……。我が命令に従い、光の犬士どもを必ず始末するのだ。』

『御意……。』

一方同じ頃、ドクロ法師との激闘を終えた導節一行は、一路山城の国に向かっていった。

既に上空は暗雲が立ち込め、邪気に満ち溢れていたのである。

「やっと此処まで来たな、それにしても何だかおぞましい妖気が立ち込めているぞ。」

「確かに、此処山城の国はおぞましい妖気が充満している。これは、間違いない。闇の一族が関わっているに違いない。」

「導節様、急いで大江山に向かいましょう。」

「待てつ、新兵衛。大江山へ行くのはまだ早い。酒吞童子との戦いはいつでも出来る。」

「導節の言う通りだ、此処はひとまず、鋭気を養った方がいいぞ。」

「……。分かりました、導節様。」

「それよりも、これからどうするんだ。」

すると信乃は、口火を切ったかの如く、導節に話し掛けていった。

「とりあえず、宿を捜しましょう。大江山に行くのはそれからにしたほうが……。」

「そうだな、新兵衛、信乃、現八、小文吾。急いで宿屋に行くぞ。」と、その時だ。

突然導節達の前に、闇の僧侶・幻斎坊が姿を現した。

『光の犬士の諸君、初めまして……。』

「だ、誰だてめえは……。」

『申し遅れました、我は闇の僧侶・幻斎坊と申す者……。』

「何っ、闇の僧侶だと……。」

「まさかつ、闇の一族の者か。」

『さすがは光の犬士の諸君。』

「ちようどいいや、てめえをぶつ飛ばしてやるぜつ。」

現八が幻斎坊に斬り掛かろうとしたその時、幻斎坊が妖術を施し、現八の動きを封じていったのである。

「な、何っ……。」

「やいつ、幻斎坊。現八に何をしやがった。」

『ふはは……、少しばかり貴方達の仲間の動きを封じさせて貰いましたよ。』

「くつ、か……身体が……。」

「現八っ……。」

「てめえ、現八殿を元に戻しやがれつ。」

『それは無理な相談だ。ならばお主達も同じ目に逢わせてしんぜよう。』

幻斎坊が再び妖術を施し、導節達に攻撃を仕掛けようとしたその時、小文吾の身体が突然変異を起こし、獣の姿に変身してしまったのである。

『な、何だあれは……。』

「うおおお……っ。」

獣の姿に変身した小文吾は、幻斎坊に突進していくのだが、幻斎坊はひらりと身をかわしながら空中に漂っていったのであった。

『うぬぬ……、今日のところは引き上げよう。だが、この次に逢う時は必ず貴様達を地獄へ送り込む故、左様心得ておくがいい……。』

そう言つて、幻斎坊は妖術を施しその場から姿を眩まして行くのであった。

「くそつ、あと一步のところ……。」

「幻斎坊の奴、とんでもない術を掛けやがったな。」

「それよりも、現八に掛かっている術を解かないと……。」

信乃は現八に掛かっている妖術を解く呪文を施していくが、何の効

果もなく妖術を解く事は出来なかつた。

「駄目だ、妖力が強すぎて現八殿に掛かっている呪いを解く事が出来ない。」

「呪いつて何々だよ、信乃。」

「恐らく、幻斎坊の放った妖術は相手に呪いの術を掛け、永遠の命を奪う恐ろしい術だ。」

「信乃、どうすれば呪いの術を解く事が出来るんだ。」

「・・・今のところ、呪いの術を解く方法はない。」

「何だつて、このままじゃ現八が死んでしまうじゃないか。」

「落ち着け、新兵衛。」

「しかし・・・。」

「信乃、何かいい方法は無いのか。」
すると信乃は、

「一つだけ方法がありますが、かなり危険を伴います。」

「どんな方法なんだ、信乃。」

「この山城の国の南東にある「れいがくどう霊岳洞」と呼ばれる洞窟があり、その洞窟には恐ろしい魔物が住んでおり、洞窟の奥には「万能霊薬」と言う妙薬があるとされているのです。」

「・・・信乃、その万能霊薬を手に入れば、現八は助かるんだな。」

「ええ、ただ・・・。」

「ただ・・・つて何々だよ。」

「ただ、あの洞窟から生きて出れた者は、誰一人いないと・・・。」

「だったら、俺がその万能霊薬を取つて来てやるぜ。」

小文吾が一人で万能霊薬を取りに行くと言つたのだが、それではあまりにも危険過ぎると小文吾を咎めるのだった。

「小文吾、お前の気持ちはよく分かるが、あまりにも無謀過ぎる。」

「しかし導節様・・・。」

「落ち着け、小文吾。此処は一つ、私と新兵衛と三人で霊岳洞へ向かうと言つのはどうだ。」

「そうですね、三人で行けば万能霊薬を手に入るかも知れないじゃないですか。」

「・・・分かった、万能霊薬が手に入るのであれば、一人で行くより三人で行ったほうが確実だからな。」

「そうと決まれば、今すぐ霊岳洞へ行こう。」

「信乃、現八の事頼むぞ。」

「分かりました、現八殿の事は任せて下さい。」

「新兵衛、小文吾。行こう・・・。」

その頃、闇の僧侶・幻斎坊はと云うと、かつて伝説の犬土に封じられていた【冥獣四天王】を復活させようと、《封魔塚》と呼ばれる場所にいた。

「オン・バゾロウ・キリセンマンダ・アーク・バサラ・タンカン！
深き闇に眠りし冥獣四天王よ、今こそ我が命令に従い、再びこの世を闇に染めよつ。」

すると、突然空が闇に染まり始め、雷鳴が轟く中四つの墓標が爆発を起こし、暗闇の中から妖しい光を放ちながら冥獣四天王が復活を遂げたのである。

「うお~~~~つ、久しぶりの人間界の空気は、随分と邪気が少ないな。」

「あゝら、そんな事ないわ。これでも充分悪の気は充ちているじゃないの。」

「ふんつ、貴様は相変わらず呑気な事を・・・。」

「まあまあ、そう興奮しないで下さいよ。我々冥獣四天王は再びこの世に出られたのですから・・・。」

「ほほほ・・・、皆さんどうやらお揃いの様ですね。」

「貴様はいつたい何者だつ。」

「まあ、お聞きなさい。拙僧は闇の僧侶・幻斎坊と申す者。」

「その闇の僧侶である貴様がいつたい我等冥獣四天王に何の用だ。」

『次第に因つては、命を貰い受けるぞつ。』
『そう興奮なさらずに……。実は我が主である幻魔城城主・玉梓様に御目通り願おうと……。』
『我等を幻魔城に招待すると申すのか。』
『まさか、我等を騙そうとしている訳ではあるまいな。』
『とんでもない、拙僧はその様な事は一切致さぬ。では、我が妖術で幻魔城へ案内致そうぞ。』
そう言つて、幻斎坊は妖術を施し、一気に幻魔城へと移動していったのである。

暫くして、冥獣四天王を幻魔城に連れ出した幻斎坊は、玉梓の前にひざまづき冥獣四天王も同時に平伏したのであった。

『玉梓様に報告致します。これに控えているは、かつて最強の魔物と恐れられていた冥獣四天王にございます。』

『何つ、冥獣四天王とな……。』

『はっ、是非玉梓様に御目通りすべく、この場にて連れて参りましてございます。』

『なるほどのう。それで、うぬ等の名は何と申すのじゃ。』

『我は冥獣四天王の一人、闇の吸血鬼・朱雀將軍。』

『同じく、闇の破壊王・玄武將軍。』

『同じく、闇の風使い・白虎將軍。』

『同じく、闇の妖術師・青龍將軍。』

『我等、冥獣四天王……。見参！』

『幻斎坊、なかなか心強い者達ではないか。』

『御意、玉梓様がお喜び頂ければ、この幻斎坊身に余る光栄にてございます。』

『では、冥獣四天王に命令を下す。我等を亡き者にせんとする輩である、光の八犬士を抹殺して欲しいのじゃ。』

『玉梓様、我等冥獣四天王に万事お任せの程を……。』
と、そこへ冥獣四天王の前に現れたのは、なんと暗黒の魔術師が姿

を現していったのだった。

『こいつ等が、噂に聞く冥獣四天王か……。』

『だ、誰だ貴様は……。』

『俺の名は、闇の魔導騎士・暗黒の魔術師。』

『てめえ、我等冥獣四天王を侮辱するつもりか……。』

『侮辱だと……。ふっ、貴様等が光の八犬士を抹殺する事など、

到底無理な事だ。』

『き、貴様我等の力を見くびっているのか。』

『ならば、我々の力を思う存分受けてみなさい。』

すると冥獣四天王は、暗黒の魔術師に斬り掛かっていくが、暗黒の魔術師は剣を構えて術を唱えていったのである。

『ふっ、無駄な事を……。魔導秘術・波動烈火斬！』

暗黒の魔術師の必殺技・波動烈火斬が炸裂し、冥獣四天王は四方に弾き飛ばされてしまったのだった。

『ば、馬鹿な……。』

『我等が束になっても、あんな奴に負けるなんて……。』

『だから言っただであらう、貴様等には、光の八犬士は倒せぬと……。』

『暗黒の魔術師、お前は光の八犬士を倒す自信があると言うのか。』

『さあな、奴等の力はまだ完全では無い。だがいずれにせよ、奴等八犬士が揃った時、底知れぬ強大な力を発揮するだらう。』

『……。なかなか面白い男じゃな、暗黒の魔術師。』

『玉梓、勘違いをするな。俺はお前達に忠告をした迄の事。決して手を貸すつもりは無いのでな……。』

『暗黒の魔術師、貴様玉梓様の御前であるぞ。無礼を働けば、例え貴様でも容赦せぬぞ。』

『よさぬか、幻斎坊。放っておくがよからう。』

『まあ、せいぜい光の八犬士と互角の戦いをするがいい……。』

そう言っつて、暗黒の魔術師はそのまますう〜と姿を消していったのである。

『暗黒の魔術師め、奴はいつたい何を考えているんだ。』

『さあな、それよりも光の八犬士を捜しだし、一気にやつつけてしまおうぜ。』

『ああ、それがいいかもな……。』

『あゝら、だったら纏めて始末したほうがよくないかしら。』
すると、玉梓は冥獣四天王にある命令を下したのであった。

『冥獣四天王よ、これより大江山に向かい、光の八犬士を待ち伏せし、一気に叩き潰してしまうのじゃ。』

『はっ、我等冥獣四天王……。命に変えても任務を遂行致します。』

『では行くがよい、冥獣四天王つ。』

そう言つて、冥獣四天王はその場から姿を消し、大江山へと向かつていったのである。

『玉梓様、あの者達は光の八犬士を倒す事が出来るのでございませう。』

『幻斎坊、全てはあの者達に任せ、高みの見物と参ろうではないか。』

『御意……。』

遂に、復活を遂げた最強の妖魔・冥獣四天王。

光の八犬士との戦いを前に、いつたいどの様な罠を仕掛けようと言うのか……。

そして次回、いよいよ光の八犬士と、大江山の怪鬼・酒吞童子との決戦を迎える……。

果たして、この戦いの結末やいかに……。

酒呑童子の猛攻に、窮地に追い込まれた導節達は、まさに八方塞がりの状態に陥っていた。

「どうするんだよ、このままじゃ俺達奴の闇の力でやられてしまうぞ。」

「何か解決策は無いのですか、導節様。」

「こうなったら、五人の力を一つにして、一気に酒呑童子を倒すしかない。」

「導節、俺達五人で酒呑童子を倒せるのか？」

「ああ、一か八かやってみるしかないだろ。」

「よし、いっちょやってやるぜっ。」

導節、新兵衛、信乃、現八、小文吾の五人は、精神を集中させ、力を合わせながら八大童子の宝玉に念じていった。

「八大童子の宝玉よ、我等光の犬士に力を与え、闇の怪鬼を玉砕せよっ。」

すると、導節達の持っていた八大童子の宝玉がまばゆい光を放ち、酒呑童子は宝玉の光に因って弾き飛ばされてしまうのだった。

「な、何だ今の光は……。」

「酒呑童子よ、どうやら形勢逆転の様だな。」

「まさか、貴様等にそんな力があつたとはな……。だが、我が闇の力はこんなものではないのだ。」

「どう言う事だ……。」

「見よっ、我が最強の闇の力を……。」

そう言つて、酒呑童子は全身に闇の魔力を増幅させ、今まで以上に邪悪の力を導節達に見せ付けた。

「オン・バサラ・アーク・ダライア・キリク・バンドラ・ボダナ
ン・クナキリ・ソワカ！」

酒呑童子の身体が更に邪悪な妖気を漂わせながら導節達に攻撃を仕掛けていった。

『くたばれっ、光の八犬士よ。』

「まずいつ、この場を離れるんだっ。」

導節達が一斉にその場から離れ、酒呑童子の攻撃をかわしていくが、その後大爆発が起こり、再び酒呑童子が攻撃を仕掛けていったのである。

「おいつ、このままじゃ俺達奴にやられてしまうぞ。」

「いったい、どうすればいいんだよ。」

「導節様、もう一度八大童子の宝玉の力を使いましょう。」

「駄目だっ、もう間に合わない。」

あわや、史上最大の危機に追い込まれた導節一行。

完全に死を覚悟を決していた導節に、苦悶の表情を見せる新兵衛、信乃、現八、小文吾の四人。

と、その時……。

「酒呑童子、そこまでやあ。」

導節達が空を見上げると、何と巨大な龍を操りながら酒呑童子に目掛けて突進していく一人の若者が現れたのだった。

『おのれ、貴様は何者だっ。』

「わいは、龍使い・犬坂毛野や。」

『何っ、龍使いだと……。』

「貴様なんか、わい一人で倒したるさかいなあ、覚悟しときやあ。」

『小賢しい小僧め、それでも喰らいやがれっ。』

酒呑童子が毛野に目掛けて魔導秘剣を繰り出していくが、毛野はひらりと避けながら龍を操り、反撃に出るのだった。

「これでも喰らうとええわ。」

すると毛野は、龍を自由自在に操りながら酒呑童子に攻撃を仕掛け、時折龍の口から高温の炎を吐きながら酒呑童子を窮地に追い込んでいった。

「導節様、あの龍使いは……。」

「ただの龍使いじゃなさそうだな。」

「おいっ、見るよ。酒呑童子の奴が……。」

「あの若者の攻撃で窮地に追い込まれているぞ。」

「とにかく、奴を倒す機会だ。いくぞっ。」

導節達は一斉に酒呑童子を攻撃していき、龍使いの若者と力を合わせ、最後の最後まで酒呑童子を倒していったのである。

『ぐぐっ……、こっ、このままで終わる酒呑童子ではない……』

』

「いい加減に観念しろっ、もはや貴様は、我等に敗れたんだ。」

『……こうなったら、貴様等もろとも地獄へ道連れにしてやるっ。』

』

酒呑童子が最終手段として闇の妖術を施し、導節達を道連れにしよ
うと画策していた。

「そうはさせへんでえ。」

毛野は、すかさず導節達を一瞬のうちに助け出し、暫くして酒呑童
子は自らの妖術で命を落としてしまふのだった。

「いやあ、助かったぜ。」

「なんて礼を申してよいのやら……。」

「なあに、わいはあんた等があんな化け物を相手に無茶するさかい
な、助けなしゃあないやん。」

「それはそうかも知れないが、我々には我々の考えがあるのだ。」

「我々の考えって何やねん。」

「おいっ、失礼だろ。この方はなあ……。」

「現八、もういいだろう。」

「し、しかし……。」

「なあ、あんた等はいったい何者やねん。」

「申し遅れたが、私の名は修験者・犬山導節と申す。」

「同じく、犬江新兵衛と申します。」

「私は、犬塚信乃と言って、導節様と共に旅をしている者です。」
「俺は、犬飼現八だ。宜しくなつ。」
「私は犬田小文吾と言います。」
「わいは、犬坂毛野言うねん。」
「犬坂毛野殿と申すのか、随分と派手な攻撃をするみたいだが・・・。」
「ああ、こいつのお陰で多くの化け物と戦って来たんや。」
そう言つて、毛野は一匹の飛龍を導節達に見せたのである。
「な、なんだこいつは・・・。」
「ああ、こいつは飛翔丸ひしゅうまると言つて、わいの弟みたいなもんや。」
「随分でかい弟だなあ。」
『ぐわあぁぁっ。』
「うわっ、びっくりしたなあ。」
「何も驚かんでもよろしいわ、こいつは普段おとなしい性格やからな。」
「そ、そうなのか。」
「ところで、導節はんは何で山城の国に来はったんや。」
すると導節は、これまでに起きた経緯を毛野に話して言った。
「何やて、闇の一族が人間界を支配してはるつてホンマなんか？」
「ああ、我々はその闇の一族の首領である、悪霊・玉梓を追つて旅をしているんだ。」
「毛野殿、実は我々は光の犬士なのだ。」
「光の・・・犬士。」
そう言つて、導節達は懐から八大童子の宝玉を毛野に見せた。
「そ、その宝玉は・・・。」
「その通り、この宝玉は天界の王・雷帝龍王様より授かった光の犬士の証。」
「この宝玉がある限り、今までにない力が発揮されるのだ。」
「・・・なんや信じられへん話しやけど、もしその話が事実なら、わい一人でもその闇の一族っちゅう連中を倒してみせるさかいな。」

「毛野殿、闇の一族を甘く見ない方がいいぞ。」
「奴等は毛野殿が思っている程、相手強いぞ。」
「八大童子の宝玉が無いと、命が幾つあっても足りないんだぞ。」
「わいは、そんなもん持つてへんし、飯に持つていたとしても、あんな等に手を貸すつもりもないしな。」
「こ、この野郎……。」
「現八殿、落ち着いて下さい。」
「まあ、いいでしょう。しかし、毛野殿。」
「な、なんやの……。」
「私は必ず毛野殿を我々の仲間に取り入れてみせる。」
「わいは絶対に、仲間にはならへんつ。」
「じゃあ、勝手にするがいい……。」
「導節様……。」
そう言つて、導節はその場から去つて行くのだったが、新兵衛、信乃、現八、小文吾の四人は、毛野の言葉に少し違和感を感じていたのだった。

「導節様、これからどうするんですか。」
「……暫く様子を見る。」
「暫く様子を見るつて……、まさかつ。」
「毛野殿は必ず来る。」
「おいつ、導節本気が……。」
「私は本気だ。」
「……私も、導節様を信じます。」
「導節様、この犬塚信乃も毛野殿が来る事を信じます。」
「新兵衛……、信乃……。」
と、突然周りの空が真っ暗になり、白い靄の中から邪悪な妖気を漂わせながら四体の妖怪が導節達の前に姿を現していった。
「導節様、あれを……。」

導師が白い霧の中にいる四体の妖怪を見て、思わず愕然としてしまった。

「ま、まさか……。」

「導師、奴等は何者なんだ。」

「奴等は、闇の使者・冥獣四天王だ。」

「何ですって……。」

「知っているのか、信乃。」

「ええ、今から三百年前に封じられていた、闇を司る四体の魔獣。」

「厄介な連中が現れやがったな。」

と、その時……。

冥獣四天王の一人、闇の妖術師・青龍將軍が導師達にいきなり妖術を放っていった。

「オン・キリク・バサラ・アーク・センマンド・バラク・ウンハツタ！」

闇の妖術師・青龍將軍の放った妖術が導師達の前で大爆発が起こり、導師達は弾き飛ばされてしまうのである。

「ふはは……、どうかね、我が妖術の威力は……。」

「てめえ等が、冥獣四天王か。」

「いかにも、我等は闇の使者・冥獣四天王なり。」

「ほほほ……、貴方達が光の八犬士なのね……。」

「どんな奴等かと思えば、ただの人間じゃないか。」

「なあんだ、つまらないなあ。期待していたのに、がっかりだわあ。」

「「ごちゃごちゃ言ってねえで、名前ぐらい名乗りやがれっ。」

「よかるう、我は冥獣四天王の一人、闇の吸血鬼・朱雀將軍。」

「同じく、闇の破壊王・玄武將軍。」

「同じく、闇の風使い・白虎將軍。」

「同じく、闇の妖術師・青龍將軍。」

「遂に、始まってしまつのか……。」
導師が、何やら浮かない表情で呟いていたのを、信乃は見逃さなかつた。

「導師様、まさか……。」

「ああ、あの戦争が……始まるうとしている。」

「何だよ、その戦争と言うのは……。」
すると導師は、

「第一次聖魔大戦が、勃発しようとしているんだ。」

「第一次……聖魔大戦？」

「今から三百年前に起きた、天界、魔界の者達が起こした戦争の事だ。」

「その中でも、魔界を守護する冥獣四天王が、天界を滅ぼしていき、辛うじて天界の王・雷帝龍王は自らの命と引き換えに、龍神像に姿を変えたのだ。」

「それが、今俺達の目の前にいると言うのか……。」

「その通り、我等は天界を滅ぼし、雷帝龍王を始末しようと思つていたが、既に何処にも居なかつた。」

「そんな事で、天界を滅ぼすなんて……。」

「絶対に許さないつ。」

「既に我が首領である玉梓様は、我等に光の八犬士を倒す様命じたのさ。」

「……俺達光の八犬士は、断じて貴様等を許さない。」

「お前達五人で、どうやって我等冥獣四天王と戦うつもりだ。」

と、そこへ飛龍に跨がった犬坂毛野がやってきて、導師達と合流したのだった。

「ちよつと待ちいや、光の八犬士は此処にもおるでえ。」

「毛野……。」

「どうして此処へ……。」

「あれから何や胸騒ぎがしてな、飛翔丸が妙な泣き声するからふつと懐を探ったら、こんな玉が出て来たんや。」

そう言つて、信乃は懐から《礼》の文字が浮かび上がった宝玉を取り出した。

「そ、それは《礼》の文字が入った宝玉。」

「では毛野殿が、六人目の同志。」

「わいが、六人目の同志やて。」

「そうとも、毛野殿がいれば我々にとっては心強い仲間だ。」

「毛野、よく戻つて来たな。」

「・・・導節様。わいは導節様の為に、闇の一族を倒しまつせ。」

「ぐぐつ・・・、光の犬士が六人も揃つたのか。」

「だが、光の犬士が六人揃つたところで、我等冥獣四天王には敵うまい。」

「ああ、我々は無敵の四天王だ。人間如きに我等を倒せるものか。」

「ええ、私達の華麗なる術で、貴方達を抹殺してあげるわ。」

「へっ、八人揃わなくても、てめえ等をぶつ倒してやるぜ。」

「わい等を舐めとつたら、怪我するでえ。」

「潔く、天の裁きを受けるがいい。」

「みんな行くぞっ。」

「おお~~~~~。」

「おのれっ、我等冥獣四天王の恐ろしさを思い知らせてやる。」

「何だか、腕が鳴るぜ。」

「久しぶりに暴れてやるぜ。」

「私の華麗な術で、たっぷり始末してあげるわ。」

「玄武、朱雀、白虎、我等の力を光の犬士どもに見せてやるぞ。」

「万事承知した。」

遂に冥獣四天王対光の犬士の戦いが、今まさに始まるうとしていた。

しかし、この戦いは第一次聖魔大戦の序章に過ぎなかった。

果たして、この戦いの顛末はどうなってしまうのだろうか・・・。

冥獣四天王篇、第弐部へと続く・・・。

第拾壹話 冥獸四天王篇 第貳部 闇の吸血鬼

遂に迎えた光の犬士と、冥獸四天王の戦いを迎えたのだが、両者一進一退の攻防が続いたのであった。

「オン・アビリタ・ウンケン・ソワカ！」

「飛天流奥義・爆裂流氷斬！」

「必殺・烈風真空斬り。」

「天聖奥義・虚空雷鳴弾！」

「奥義・獣人変化っ！」

「秘術・火炎爆雷破！」

導師、信乃、現八、新兵衛、小文吾、毛野の六人は、それぞれの術や必殺技で冥獸四天王に仕掛けていくが、闇の風使い・白虎將軍が芭蕉扇ばしやうせんを取り出し、導師達の術や必殺技を芭蕉扇で仰ぎながら弾き返していった。

『無駄だ、光の犬士よ。我等冥獸四天王に、そんな術などは通用せぬ。』

「な、そんな馬鹿な……。」

「俺達の術が弾き返されたぞ。」

「なんて奴等だ……。」

「なんちゆう連中や、わいの術が簡単に打ち破られてもったわ。」

「このままでは、奴等にやられてしまうぞ。」

「導師様、これからどうしましょうか。」

「くっ、仕方ない……。一旦この場から離れるしかあるまい。」

そう言つて、導師は修験術を施していき、新兵衛、信乃、現八、小文吾、毛野は導師の後を追う形で退却していくのであった。

『あらら、逃げちゃったじゃないの。』

『おいつ、青龍……。いいのか、奴等を追い掛けなくても。』

『ああ、奴等が逃げたところで、そう簡単に我等冥獸四天王から逃

れるものか……。」

『だったら、奴等の後を追って……。』

『その必要はない……、いずれ奴等を始末するんだ。まあ、じっくり様子を見ようじゃないか……。』

無事冥獣四天王の攻撃から逃れた導節達は、山城の国から遠く離れた西国・出雲の国へと身を隠していた。

「くっそ、冥獣四天王の奴等……。」

「あんなに強いとはな……。」

「俺達の術や必殺技が、見事に破れてしまっただからな。」

「ほんまに、めっちゃ悔しいわ。」

「導節様、これからどうなされますか。」

「……奴等は必ず我々を追ってくるに違いない。それまでに、残り二人の同志を捜さなければ……。」

暫くして、導節達は出雲大社近くの宿に泊まり、しばしの休息を取ったのである。

「はあく、やつとゆつくり休めるぜ。」

「おいっ、あまり羽目を外すなよ。」

「分かってるよ。」

「奴等は血眼になって捜しているんだ。恐らく、この近くまで来ているのかも知れないぞ。」

「本当に、このままでいいんでしょうか。」

「どう言う事だ、信乃。」

突然、信乃が意味深な発言を導節達に話していったのだった。

「信乃、いったい何が言いたいのだよ。」

「あの冥獣四天王、どうも我々の事を見くびっている様な気がしてならないのです。」

「気にし過ぎなんだよ、信乃は……。」

「そ、そんな事を言われても……。」

「現八、信乃殿はもの凄い予知能力を持っているんだ。これまでに、数々の予知を的中させたんだぞ。」

「へえ、信乃はんはそんな能力があつたなんて知らんかつたわ。」

「ところで信乃、いつたいこれから何が起ころうとしているんだ。」

「導師は信乃に、これから起こる事を聞いてみた。すると信乃は、精神を集中させ、これから起こる事を予言していった。」

「……南西の方角、赤い翼を持った魔物が大群を率いてこちらに向かつて来るのが見えます。」

「何だつて……。」

「まさかつ、冥獣四天王か……。」

「まだ断定は出来ませんが、恐らく……。」

「それで、その赤い翼を持った魔物は何処にいるんだ。」

「場所は出雲大社の近く、北西の方角にある『鬼骨城』と呼ばれるところに、その赤い翼を持った魔物がいるのが見えます。」

「鬼骨城……か。」

「また、厄介な奴が現れたな。」

「信乃、奴の姿を透視する事が出来るか。」

「更に信乃は、神経を集中させていき、透視を試みた。」

「……。」

「どうした、信乃。」

「……駄目でした、全く見えません。」

「正体不明の魔物か……。」

「いずれにせよ、冥獣四天王に違いないのは確かだ。」

「導師、いつ鬼骨城へ行くんだ。」

「すると導師は、」

「暫く休養したら、鬼骨城に向かう。」

「その方がいいでしょう。そうしないと、またこの前みたいな事になり兼ねないですからね。」

「そうや、わい等だけでは冥獣四天王を倒すのは不可能やからな。」
「だったら、あとの二人の同志を捜さないと……。」
「……ああ。」

一方その頃、導師達が泊まっている宿屋から北西の方角にある、不気味に聳え立つ朱色に染まった魔の城・「鬼骨城」では、冥獣四天王の一人、闇の吸血鬼・朱雀將軍が多くの手下を率いて光の八犬士討伐命令を下していた。

『さあ、準備はいいかしら。急いで光の八犬士を捜して、一気に血祭りにあげるのよ。』

闇の吸血鬼・朱雀將軍の号令の下、約三万の軍勢が一齐に出撃していったのである。

『ほほほ……、随分気合いが入っていますね、闇の吸血鬼・朱雀將軍。あれからどうなっているのですか？』

と、そこへ闇の僧侶・幻斎坊が闇の吸血鬼・朱雀將軍の前に姿を現したのである。

『あらあ、誰かと思えば闇の僧侶・幻斎坊様じゃありませんか。』

『朱雀將軍、この間の失態……どう責任を取るつもりですか。』

『仕方ないじゃない、突然あの連中が変な術を使うものだから、やむを得なかったのよ。』

『全くしようがありませんね、今度ばかりは大目に見ましよう。が、今度の作戦は大丈夫なんでしょうね。』

『その心配はいりませんわ、私の作戦は完璧なのですから……。』

『相当な自信があると見受けられるが、もし失敗した場合には、どう責任を取るつもりかな……朱雀將軍。』

『その心配はないわ。こちらには、とっておきの秘策があるもの……。』

『ほほう……、ではお手並み拝見と参りましょう。』

『期待していてちょうだい……、幻斎坊殿。』

それから三日後、導節達は出雲大社の北西の方角にある鬼骨城へ向かっていった。

「もうすぐ鬼骨城に到着するな。」

「ああ、だがこの辺りは昔から邪悪な妖気を持つ屍が多く存在している場所だからな。」

「そう言われてみれば、なんとなく何かが出てきそうな雰囲気だよな。」

「あつ、あれはもしや……。」

新兵衛が遂に鬼骨城を発見し、導節達は慎重に鬼骨城へと近付いていった。

「これが、鬼骨城か……。」

「全体が頑丈な朱色の骨で出来ているのか。」

「信乃、この中に赤い翼の魔物がいるんだな。」「ええ、間違いありません。」

と、その時だ……。

鬼骨城の周りを旋回しながら導節達を襲撃する鳥の様な化け物の軍勢が一斉に攻撃を仕掛けていった。

「な、なんだあれは……。」

「まさか、闇の一族の者が。」

「なんやこいつ等、一斉に襲い掛かって来よるで。」

「みんな、気を抜くなよ。」

『了解つ。』

導節達は急降下してくる魔物の軍勢を蹴散らしながら鬼骨城へ進んでいくが、あまりの多さに苦戦を強いられていったのである。

「これじゃ、どうにもならないぜ。」

「数が多過ぎて、先に進めやしないぞ。」

「導節、どうするんだよ。」

「……やむを得ないな、こいつだけは使いたくなかったが……。」

「

「どうでもいいから、早くしてくれ。」

「わかっている……。みんな、私の傍を離れるな。」

そう言つて、導師は懐ふところから「天地滅殺破」の巻物を出し、印を結んで術を唱えていったのである。

「オン・バサラ・ナウマク・サマンダ・ボダナン・インダラ・ソワカ！」

すると、導師は巻物を広げていき、左右に大きく弧を描く様に魔物の軍勢を全滅させていったのだつた。

「す、すげえ。」

「あつという間に全滅させやがった……。」「

「導師様、最初からそいつでやつつけた方が早いですの。」「

「……。そ、そうだな。とにかく、急いで鬼骨城に向かうぞ。」「

と、信乃が突然導師達を足止めさせていったのである。

「ちよつと待つて下さい。」「

「どうしたんだ、信乃。」「

「かなり強い妖気がこの近くまで来ています。」「

「それで、何処から妖気を感じるんだ。」「

「……。あの城の中から妖気を感じます。」「

「あの城の中に、目指す敵がいるって言うんだな。」「

「とにかく行つてみようぜ。」「

と、突然爆音が響き渡り、赤い翼の魔物が導師達の目の前に現れた。

『その必要はありませんよ、光の犬士のみなさん……。』

「き、貴様は……。」「

「冥獣四天王、闇の吸血鬼・朱雀將軍。」「

「まさか……。こんなところで逢うとはな……。」「

『随分捜しましたよ。だけど、捜す手間が省けたわ。』

「やはり、赤い翼の魔物の正体は、闇の吸血鬼・朱雀將軍だったのか……。」「

「なんや、けつたいな奴が来おつたで。」「

「だったら、この場で片付けちまおうか。」「

「その必要は無いわ……。」

「どう言う事だっ。」

「貴方達には、この場で死んでもらうわ。」

そう言うって、朱雀將軍は翼を大きく拡げ、術を唱えながら攻撃を仕掛けていった。

『魔導妖術・幻影爆炎破！』

朱雀將軍の妖術・幻影爆炎破が炸裂し、導節達を窮地に追い込んでいった。

が、すぐさま導節達は朱雀將軍に反撃の狼煙のろしを上げていったのである。

「朱雀將軍、貴様だけは絶対に許さない。」

「こつなつたら、我等光の犬士の力を思い知るがいい。」

『何度やつても無駄よ、貴方達が束になっても私には敵う訳ないわ。』

再び朱雀將軍が術を施し、導節達に攻撃をしていくが、すぐさま導節達はそれぞれの術や必殺技で応戦していくのだった。「オン・バサラ・ナウマク・キリセンマンド・ボダナン・インダラ・ソワカ！」

「飛天流奥義・爆雷衝撃斬。」

「必殺・烈風真空斬り。」

「天聖奥義・虚空雷鳴弾。」

「奥義・獣人変化っ。」

「秘術・火炎爆雷破。」

導節達それぞれの術や必殺技を繰り出していくが、朱雀將軍の前では無力だったのである。

『だから言ったじゃない、私の前ではそんな術や必殺技など、通用しないって……。』

「くそっ、どうすりゃいいんだよ。」

「俺達の術なんか、奴を倒す事すら出来ないぜ。」

「何かええ方法ないんかいな。」

もはや手段を講じる事すら出来ない導節達だったが、突如空に朝日が昇り始め、朱雀將軍の動きが若干鈍くなっていったのだった。

『はっ、ちよつとヤバくなってきたじゃない。もう、こんな時に朝日が昇ってくるなんて、ちよく最悪う。』

「なあに、ごちやごちや言ってるんだよ。」

『ふんっ、今日のところは見逃してあげるけど、この次に逢う時は必ず貴方達の命は頂戴するから、覚悟なさい……。』
そう言つて朱雀將軍は、赤い煙を翼で仰ぎながらその場から姿を消していったのだ。

「くそっ、あともうちよつとで……。」

「しかし妙だな……。」

「どう言う事だ。」

「朱雀將軍の奴、太陽が昇った瞬間、動きが鈍くなつただろう。」

「ああ……。」

「奴は闇の吸血鬼の異名を持っているんだ。と、言う事は……。」

「……そうかつ。」

「奴は太陽の光に弱いんや。」

「そうと分かれば、奴を倒す武器を探そう。」

「しかし、そんな武器何処にあるんだよ。」

小文吾が朱雀將軍を倒す武器が何処にあるかを導節に聞いてみるが、さすがの導節も分からないと言う。

「……導節様。」

と、信乃が突然導節に話し掛けていき、大昔に存在していた「太陽十字剣」の事を思い出したのだ。

「確か、今から百五十年前に「太陽十字剣」と言う対吸血鬼用の武器が、この世の何処かにあると言う話しを聞いた事があります。」

「それは本当か……。」

「はい……。」

「それで、その太陽十字剣は何処にあるんだ。」

「今は何処にもありません。しかし、その太陽十字剣を造る材料が、この出雲の国にあると言う事が分かりました。」

「よしっ、早速探しに行こうぜ。」

「そいつを見つければ、太陽十字剣が手に入るんやな。」

「ああ、とにかくそいつを探しに行こう。」

「朱雀將軍、この次は必ず……。」

遂に朱雀將軍の弱点を知った導節達は、太陽十字剣の材料を探しに出雲大社周辺を探索していった。

だが、このあと信乃に最悪の出来事が起きようとしていた……。

次回、衝撃の物語が幕を開ける……。

第拾弐話 冥獣四天王篇 第参部 地獄からの使者

翌日の朝、導師達は太陽十字剣の材料を探しに出雲大社近くの山道に辿り着いた。

だが、その山道は昔処刑所だった為、誰も立ち入る事すら無く、辺りは邪気に満ちていたのだった。

「信乃、本当に太陽十字剣を造る材料がこの近くにあるんだろうな。」

「ええ、この辺りにあると聞いたのですが……。」

「でも、なんか薄気味悪いところだな。」

「何でもこの辺りは、罪人を処刑する場所だったとか……。」

「ほ、本当かよ……。」

「確かに、何かが出てきそうな雰囲気ですね。」

と、突然空が真っ暗になり、導師達の目の前に暗黒の魔術師が姿を現した。

『どうやら此処まで来たようだな、光の犬士達よ……。』

「き、貴様暗黒の魔術師……。」

「何しに来やがった……。」

『そう殺気立てるな、別にお前達をどうこうするつもりはない。』

「何だつて……。」

「暗黒の魔術師、いったい何の用があつて来たんだ。」

すると暗黒の魔術師は、

『お前達も知つての通り、冥獣四天王が復活した事は知っているな。』

「ああ……。」

『奴等はお前達を倒そうと画策している。』

「で、俺達に言いたいのはそれだけか。」

「待ってください、最後まで話しを聞きましょう。」

「その方が懸命だな、では話しの続きをしよう。今のお前達の力では、奴等を倒せまい。」

「それで、我々に何をしろと言うのだ。」

「簡単な事だ、一日も早く残りの犬士を捜し、冥獣四天王を倒す事だ。」

「そんなの分かっている、だが何処にいるのか見当がつかないんだ。」

「そうだ、どうやって捜せって言うんだよ。」

「・・・いいだろう、教えてやる。お主達が捜している犬士は、この近くの山奥の小屋に住んでいる。」

「本当か・・・。」

「嘘じゃないだろうな。もし、それが本当なら何故俺達に助言する。」

「別に助言するつもりは無い・・・、ただお主達の力が今まで以上に強さを増しているのを感じるのだ。」

「どう言う意味だ。」

「これまでの戦いで、お主達が強くなっているのを、まだ実感していないからだ。」

「ほんまなんか、でもなんでわい等が強うなってるん分かるんや。」

「さあな、ただ何となくそう思うだけだ。」

と、暗黒の魔術師が導節赤い石の様な物を手渡していった。

「こいつは・・・。」

「お主達が捜していたのは、「金剛太陽石」と言う鉱物じゃないのか。」

「これを何処で・・・。」

「余計な詮索はするな、後はお主達に任せる・・・。」

そう言つて、暗黒の魔術師は再び消えていったのである。

「導節・・・、暗黒の魔術師は俺達を試しているんじゃないのか。」

「そんな筈は無い、あいつは我々を助けているとしか思えないんだ。」

「相手は敵だぞ、敵の言う事なんか信用するのか。」

「そうですね、暗黒の魔術師は我々を陥れようとしているに違いありません。」

「せや、あんなん信用しても、何の得もあらへんのやで。」

「確かにそうかも知れないが、私は暗黒の魔術師を信じる。」

「導節、お前正気か……。」

「ああ、正気だ。」

「とにかく、山奥の小屋に行ってみよう。」

暫くして、導節達は山奥の小屋に辿り着いたが、小屋の中には誰もおらず、静寂が漂っていた。

「誰もいないようだな。」

「本当に、此処に間違いないんだろうな。」

「ああ、間違いない。」

「それにしても、何だか閑散としてんなあ。」

「そうですね。でも、部屋はちゃんと整理されていますし、難しい本がずらりと並んでいますね。」

「此処の住人って、どんな人なんだろうか。」

と、そこへ小屋の住人らしき人物が山奥から帰って来たのであった。

「あつ、客人が見えられたか……。」

「すみません、勝手に小屋に入ってしまったまして……。」

「いえ、それより貴方達は……。」

「申し遅れました、私は犬山導節と申します。」

「同じく、犬江新兵衛と申します。」

「私は犬塚信乃と申します。」

「俺は、犬飼現八と申す者。」

「拙者は犬田小文吾と言う者にございます。」

「わいは犬坂毛野いいますねん。」

「私は、犬川荘助と申す刀鍛冶を生業としている者にございます。」

「そうですね、実は我々は魔物退治の旅をしているのです。」

「魔物退治……ですか？」

「ああ、俺達はそいつを追って全国を旅しているんだ。」

「そいつ等はこの世を闇に変えてしまおうとしている連中で、闇の一族と言つ悪の軍団なのです。」

「闇の一族……。」

「莊助はいきなり暗い表情を浮かべ、奥の部屋へと消えていったのである。」

「なあ、俺達気に障つた事を言つたか。」

「闇の一族と云う言葉に、過剰な反応したみたいだが……。」

「……こいつは何か訳がありそうだな。」

その日の夜、導師は莊助の部屋を尋ね、理由を聞く事にした。

「莊助殿……。」

「あつ、これは導師様。まだ、起きてらしていたんですか。」

「ええ、どうも眠れないみたいです。」

「そうですね……。ところで導師様、私に何か御用でもありませんか。」

「実は、莊助殿が「闇の一族」と云う言葉を聞いて、何だか表情が強張っていた様子だったので、もし差し支えが無ければ話して頂けませんか。」

「暫く無言が続いた莊助だったが、遂に重い口を開いていったのである。」

「今から丁度二十年前、私の住んでいた村が魔物の軍団に襲われ、父と母は魔物に殺されてしまいました。」

「それが、闇の一族……。」

「闇の一族は私の両親の命を奪い、村を破壊された今、なにもかも奪われてしまいました。」

「それで、村を離れて山奥に居を移したと云うのですか。」

「はい……。」

「……莊助殿、私はこれまでに数多の妖怪を倒して来ました。中でも闇の一族は、邪悪の力を持つ最強の妖怪軍団。それを束ねているのが、幻魔城城主・悪霊玉梓……。」

「……導節様、私は殺された両親の敵を討ちたいんです。」

「しかし、相手は恐ろしい妖怪軍団。貴方一人では闇の一族を倒すのは不可能です。」

「では、どうすれば……。」

すると導節は、懐から八大童子の宝玉を莊助に見せた。

「それはもしや……、八大童子の宝玉じゃありませんか。」

「ええ、我々は光の八犬士なのです。」

「光の八犬士……。昔、私の祖父から聞いた事があります。闇の一族に対抗出来る正義の使徒。それが、貴方達だったとは……。」

「それは多分、我々の先祖の事でしよう。」

「……導節様、実は貴方に見て頂きたい物がございます。」

そう言つて、莊助は奥座敷から桐の箱を持ちだし、紐を解きながら蓋を開け、中から紫色の布に包まれていた水晶玉を導節に見せた。

その水晶玉には、《智》の文字が浮かび上がっていたのである。

「おお……、それは八大童子の宝玉。しかも、《智》の文字が入った水晶玉ではないか。」

「はい、私の祖父が持っていたとされる物にございます。」

「莊助殿、おそらくお主の祖父殿は、この水晶玉を莊助殿に託すつもりで残されたのかも知れませんよ。」

「祖父が、この水晶玉を……。」

莊助が八大童子の宝玉を手にした瞬間、突然まばゆい光を放つていったのだつた。

「な、なんだこの光は……。」

「どうやら八大童子の宝玉が、莊助殿を光の八犬士として認められたのだ。」

「えっ、私が光の八犬士ですって……。」

「その水晶玉こそ、光の八犬士の証となる物。その宝玉を携えば、眠っていた力が發揮され、超人的能力を操る事が出来るでしょう。」

「・・・この水晶玉に、そんな力があつたなんて。導師様、お願いでございます。私も一緒に戦わせて下さい。」

「莊助殿・・・分かりました、一緒に戦いましょう。」

と、突然現八と新兵衛が導師のところへ駆け寄り、信乃が突然何者かに因つて連れ掠られたと云う事を導師に話していったのだった。

「何っ、信乃が掠られたと・・・。」

「ああ、俺達が寝ている間に忽然と姿を消してしまつたんだ。」

「導師様、申し訳ありません。私達がついていながら、こんな事になつてしまつて・・・。」

「それより、小文吾と毛乃の二人は・・・。」

「小文吾と毛乃の二人は、信乃を掠つていった奴の後を追跡しているみたいだが・・・。」

「あれからだいぶ時間が掛かっている様なんですけど・・・。」

何か不安を感じた導師は、莊助に「金剛太陽石」を手渡し、この石で太陽十字剣を造つて欲しいと頼んでいった。

「莊助殿、すまないがこれで剣を造つて欲しいのだ。」

「これはもしや、金剛太陽石・・・。」

「刀鍛冶である莊助殿にしか出来ない事なんだ。」

「・・・分かりました。それで、どの様な剣を造るのですか。」

「太陽十字剣と云う吸血鬼を滅ぼす聖剣を造つて欲しい。」

「太陽十字剣つて・・・あの伝説の聖剣の事ですか。もはやこの世に存在しないと思つていましたが・・・。分かりました・・・、この犬川莊助、一世代の大仕事をさせて貰います。」

「忝ない・・・。」

「導師、急いで信乃を助けないと・・・。」

「導師様・・・。」

「ああ・・・。新兵衛、現八、行くぞつ。」

丁度その頃、連れ掠われた信乃を追跡していた小文吾と毛野だったが、途中闇の一族の妖怪軍団が襲来し、二人の行く手を阻んでいったのだ。

「くっ、邪魔が入りやがったぜ。」

「ほんまやな、けつたいな連中がうじゃうじゃ来おったで。」

「毛野、どうする？」

「決まってるやないか、一気に片っ端からやつつけるしかないやろ。」

「よし、いつちよやるかあ。」

「臨むところやあ。」

小文吾と毛野は、迫り来る妖怪軍団を次々と蹴散らしていくが、あまりの多さに苦戦を強いられていくのであった。

「くそっ、これじゃどうにもならないぞ。」

「いったいどないするねん、小文吾はん。」

「こうなったら、術で応戦するしかないだろ。」

「せや、わい等の術で全滅させたるわ。」

再び小文吾と毛野は、得意の術で闇の一族の妖怪軍団を一気に全滅させていったのである。

「そこまでだっ、光の犬士どもよ……。」

突然小文吾と毛野の前に、謎の妖怪が姿を現していった。

「誰だっ、貴様は……。」

『我が名は朱雀將軍親衛隊長、地獄の道化師……。』

「朱雀將軍親衛隊……。」

「地獄の道化師……。」

『貴様等、仲間を助けようと後を追って来ているようだが、そう簡単に仲間のところには行かせる訳にはいかぬ。』

「なんやとっ……。」

「地獄の道化師、てめえが信乃を掠ったのか……。」

『その通り、我は朱雀將軍様の命令により、貴様の仲間である犬塚信乃を掠ったのさ。』

「てめえ、なんて事をしやがるんだ。」

「せや、あんた卑怯な真似すんなや。」

『卑怯だど．．．、何度でも言うがよかるう。だが、貴様等は此処で我に殺されるのだからな．．．。』

すると地獄の道化師は、小文吾と毛野に妖術を施し、大打撃を与えていくのである。

「くっ、なんて力なんだ．．．。」

「めっちゃ強いやんか．．．。」

『たいしたことないな．．．、光の八犬士の力はこの程度なのか。』

「へんっ、まだまだこんなもんじゃないぜっ。」

「せやっ、わい等が本気を出せば貴様なんか一発で倒したるわいつ。」

『ふふふ．．．、威勢だけはいいらしいなあ。だが、此処までの様だな．．．。』

「どう言う事だっ．．．。」

『今から貴様達に、我が最強の妖術をお目に掛けよう．．．。』

すると地獄の道化師は、印を結んで術を施し、呪文を唱え始めた。

『オン・バサラ・キリーク・ナウマク・アーク・シャノウ・タンカ
ン！』

地獄の道化師の妖術が小文吾と毛野に命中し、暫くして二人の身体が段々硬直していったのだった。

「か、身体が動けねえ。」

「いつたい何をしたんや。」

『ははは．．．、暫くの間そうしているがいい。時間が立てば、貴様等は完全に石になっていくんだからな．．．。』

「なんやと．．．。」

「俺達を石に変えようとしているのか。」

『その通り、貴様等みたいな邪魔者を始末してしまえば、全て万事上手く行くんだ．．．。』

「くっ、こんな時に導節様がいてくれたら．．．。」

「はよ、助けに来てえや・・・導節はん。」

信乃を追跡しようとしていた小文吾と毛野の前に、突如現れた謎の妖怪・地獄の道化師。

行く手を阻む地獄の道化師の目的とは何か・・・。
果たして、小文吾と毛野の運命やいかに・・・。

突如小文吾と毛野の前に現れた朱雀將軍親衛隊隊長、地獄の道化師。一進一退の攻防が続くなか、地獄の道化師が怪しげな妖術を掛け、小文吾と毛野の動きを封じていったのだった。

「くっ、こんな時に導師殿がいてくれたら・・・。」

「はよ、導師はん来てくれへんやろか。」

『無駄だ、どうあがいても誰も来る筈があるまい。』

もはや窮地に追い込まれた小文吾と毛野。

「もう、駄目なのか・・・。」

「諦めたらあきまへん、小文吾はん。」

「毛野、お前は大丈夫なのか。」

「わいは大丈夫や、それよりこうなったら、八大童子の宝玉の力を使うしかないやろ。」

「そうかつ、その手があつたか・・・。」

小文吾と毛野は、懐に忍ばせた八大童子の宝玉に念を込め、地獄の道化師の妖術を解き放とうとしていた。

「八大童子の宝玉よ、我等に力を貸してくれっ。」

小文吾と毛野が心の中で念していると、突如八大童子の宝玉がまばゆい光を放ち、地獄の道化師に掛けられた術が破られ、動ける様になったのである。

『な、何いっつ。』

「よっしやっ、これで自由に動けるぜ。」

「なんや身体がきつくな感じすんねんけど、やっと解放したでえ。」

『ば、馬鹿な・・・。我が妖術を簡単に打ち破るとは・・・。』

「当たり前だ、我等はそう簡単に貴様の妖術など掛かってなるものか。」

「せやつ、二度と同じ手は通じへんで。」

『それはどうかな・・・。』

「どつ言つ事だつ。」

「いい加減に悪あがきはやめなはれ。」

『悪あがきだと・・・、何度でも言つがいい。』そう言つて、地獄の道化師は再び妖術を施し、なんと以前に倒した筈の妖怪・螳螂鬼を呼び寄せたのであつた。

「な、そんな馬鹿な・・・。」

「なんや、この化け物は・・・。」

「導師様が以前に倒した妖怪・螳螂鬼だ。」

「なんやてつ・・・。」

『さあ、妖怪・螳螂鬼よ。奴等を始末しろつ。』

すると、妖怪・螳螂鬼が小文吾と毛野に先制攻撃を仕掛けていったが、一瞬の隙を突いて妖怪・螳螂鬼をやっつけていったのだった。

「なかなかしぶとい奴だな、だがこれで終わりじゃないぜつ。」

「そや、わい等を甘く見ない方が身の為やで。」

『ほざかしいつ、かくなる上は奥の手を使うしかあるまいつ。』

すると、地獄の道化師は印を結んで術を唱え、異世界から怪鬼・酒呑童子を甦らせたのであつた。

「何つ、そんな馬鹿な・・・。」

「酒呑童子が復活しおつたで。」

『さあ、酒呑童子よ・・・。今こそ奴等に復讐するのだ。』

『・・・。。。。。。』

『何をしている、早く奴等を始末しろつ。』

『・・・誰に向かつて口を聞いているんだ。俺は誰の指図をも受けない。俺には俺のやり方があるのだ。』

「なんや知らんけど、小文吾はん、いっちょやってみおつやないか。」

「

「お、おう・・・。」

突然の出来事に、ただ呆然としたしていた小文吾と毛野だったが、暫くして正気に戻り、復活した酒呑童子に攻撃を仕掛けていったのだった。

「酒呑童子、もう一度地獄へ叩き落としてやるぜつ。」

「この前みたいに、同じ手は二度と通用せえへんで。」

『愚かな、俺は今までの酒呑童子ではないぞ。』

そう言つて、酒呑童子は魔断烈火剣を大きく振りかざし、小文吾と毛野に襲い掛かつていった。

「な、なんやこいつ……。大江山にいた時よりも強うなつてるで。」

「それだけじゃない、魔力も数段上がっているぞ。」

『貴様等二人だけか……。他の連中はどうした……。』

「そんな事はどうでもいい……。何が何でもめえを再び地獄へ叩き落とす……。」

「せやつ、もう一度わいの術でお見舞いしたるさかいな。」

『……。言いたい事はそれだけか。光の犬士どもよ……。』

「何つ……。」

『見せてやろう、我が究極の魔導妖術を……。』
すると、酒呑童子は最大の魔導妖術を施し、小文吾と毛野は大打撃を受けてしまったのであった。

「やはり、倒す事は出来ないのか……。」

「あ、あかん……。めっちゃ強過ぎるわ。」

『さあ、酒呑童子よ。とどめの一撃を……。』

『言われなくても分かっている。これでおしまいだ、光の犬士よ……。』

最強の力を誇る酒呑童子の前に、為す術を無くした小文吾と毛野。

もはやこれまでかと思われたその時、なんと暗黒の魔術師が酒呑童子の目の前に姿を現していったのである。

『貴様、我等の邪魔をしに来たのか……。』

『まさか、俺はただ……。お前達のやり方があまりにも卑怯だから、この者達を手助けしようと思つたまでだ。』

『我等のやり方が卑怯だと……。ふざけるな、我等は玉梓様の命令に従つての事。よそ者が口を挟む義理はない筈だ。』

『要するに、問答無用って言う事なのか……。面白い、ならば貴様の實力を見せて貰おうか。』

『ふんっ、あとで後悔する事になるぞ。』

「暗黒の魔術師、何故俺達に力を貸す……。」「気が変わったのだ、いずれこう言う事が起こる事を予測していた。小文吾、毛野、よく見ておくがいい。これが、俺の本当の姿だ……。」「

なんと、暗黒の魔術師は自らの黒頭巾を外してしまい、素顔をさらけ出してしまふのだった。

「に、人間だと……。」「

「いったいどないなっぺんねん。」「

『奴の正体が、人間だったとはな……。』

「地獄の道化師、酒呑童子。確かに俺は人間だ。だが、俺の心に潜んでいる正義の心が目覚めちまつたんだからな。」「

「正義の……。」「

「心……。やてっ。」「

『ふんっ、何が正義の心だ。貴様が誰であろうと、容赦はしない。』

『俺は、貴様が許せない……。必ず、お前を殺す。』

「やれるもんならやってみろ。貴様等の實力を試させて貰うぜ。」「すると謎の男が、地獄の道化師と酒呑童子に攻撃を仕掛けていき、たつたの一撃でやつつけてしまふのであった。

「す、すげえ……。」「

「たつた一撃で、地獄の道化師と酒呑童子を倒しおつたでえ。」「

「だから言つた筈だ、貴様等は俺を倒す事は出来ないと……。」「

『き、貴様はいつたい何者だ。』

「俺の名前は、犬村大角……。《義》の宝玉を持つ最後の犬士だ。」「

「えっ、あの男が……。光の犬士だと……。」「

「と言う事は、わい等の仲間うちゆう事になるんか。」「

「ああ、そう言う事になるな。小文吾殿、毛野殿、頼む、一緒に戦おう。我等光の犬士の力を奴等に見せつけるのだ。」「

「大角殿……。」

「大角はん……、わい等も一緒に戦わせて貰いまっせ。」
「いくぞっ。」

「ああ、我等光の犬士の力を……。」

「思い知るがええで。」

『ふんっ、たつた三人で挑もうと言うのか。』

『面白い……、だが貴様等が束になつても俺は決して滅びはしない。』
「それはどうか……、我等光の犬士は無敵の犬士。」

「決して最後まで諦めない……。」

「わい等の底力を……思い知るがええわ。」

小文吾・毛野・大角の三人は、地獄の道化師と酒吞童子に戦い挑んでいくが、無敵の力を誇る地獄の道化師と酒吞童子には全く歯が立たなかった。

「あかん、めっちゃ強いで……。」

「大角殿、何かいい方法は無いのか。」

「こうなつたら、八大童子の宝玉の力を使っしかないな。」

「よっしゃ、一か八かやるしかないぜ。」

「せや、三人で力を合わせて、地獄の道化師と酒吞童子をやっつけたるで。」

「小文吾、毛野、行くぞっ。」

「おお。」

三人は八大童子の宝玉を握りしめ、術を唱え始めたのである。

『天空を守護せし八大童子よ、今こそ我等光の犬士に力を与えてくれ。』

すると、八大童子の宝玉がまばゆい光を放ち、今まで以上の力を手に入れたのだった。

「す、すげえ……。」

「何だか、身体が熱く感じるで。」

「これが、八大童子の力なのか……。」

『な、何だと……。』

『あれが、八大童子の真の力……。』
「地獄の道化師、酒吞童子、これでてめえ等もおしまいだ。」
「八大童子の力を手に入れた今、向かうところ敵無しやで。」
「潔く我等の裁きを受けるがいい。」
『小賢しい、光の犬士どもめ。』
『かくなる上は、最後の手段を講じるしかあるまい。』
「そうはさせるかつ。」
遂に、小文吾・毛野・大角の三人は、力を合わせ攻撃を仕掛けていった。

「必殺、三位一体攻撃っ。」
三人の必殺攻撃が炸裂し、遂に地獄の道化師と酒吞童子を撃破していったのである。

「遂にやったのか……。」「
「わい等、あの酒吞童子を再び倒したんやな。」
「全て大角殿のお陰……。何と礼を言ったらよいか……。」「
「礼なんかいいさ、それより掠われた仲間を連れ戻さないと……。」「

「ちよつと待ちいや、導師はん達を待たんといかんやないの。」
「そうだ、他の仲間と一緒に信乃殿を助けないと……。」「
と、そこへ後から駆け付けた導師・新兵衛・現八の三人がやってきたのだった。

「小文吾、毛野、その男は何者だ。」
「導師殿、この方は犬村大角殿でございます。」
「わい等と同じ、光の犬士やで。」
「本当か……。」「
「貴方が、犬山導師殿ですか。」

「ああ、しかし何処かで見えた様な……。はっ、まさかつ、暗黒の魔術師なのか。」

「ええ、以前はそうでしたが、こいつのお陰で心の奥に潜んでいた正義の心が目覚めたんです。」

すると大角は、懐の奥から《義》の宝玉を導節に見せた。

「あつ、それは《義》の文字が入った宝玉……。と、言う事は大角殿が、八人目の犬士。」

「俺が、八人目の犬士……。」

「では、光の犬士が全員揃った事になるのか。」

「やったな、導節。」

「現八、これで私の念願だった光の八犬士が揃ったんだ。」

と、その時後から荘助が導節のところへ駆け寄り、太陽十字剣が完成したと告げたのだ。

「導節様、遂に太陽十字剣が完成しました。」

「本当か、遂に完成したんだな。」

「これで、朱雀將軍を倒せるぜ。」

「導節殿、朱雀將軍つて冥獣四天王の一人か。」

「ああ、奴を倒す唯一の聖剣が完成したんだ。」

「此処にいる七人で、朱雀將軍のいる鬼骨城へ乗り込むぞ。」

「そして、捕われの身となった信乃殿を絶対助ける。」

「せや、一刻も早く助けんとやばいで。」

「ああ、行こう。我等光の犬士の力を、冥獣四天王に思い知らせてやるぞつ。」

『おお〜っ。』

その頃、鬼骨城では朱雀將軍が信乃を張り付けにしてしまい、苦悶の表情をした信乃を苦しめいつたのであった。

『さあ、信乃……。いい加減に諦めなさい。貴方はもう私の物よ。』

「ふざけるな、誰が貴様なんか……。」

『あゝら、随分気が強いのねえ。だけど、貴方みたいな人間は初めてよ。大抵の人間つて、すぐに命を落とすけど、貴方なら私の事を気に入ってくれると思つたのにい。』

「冗談じゃない、必ず私の仲間が助けに来る。その時が貴様の最後

だ。」

『生意気ね、だったらこうしてやるわっ。』
そう言つて、朱雀將軍は鞭の様な物を振りかざし、信乃を痛めつけていったのである。

「くっ、絶対諦めるものか……。」

『強情ねえ、もっと痛めつけてやるわ。』

更に朱雀將軍は、信乃を痛めつけ、暫くして信乃は気絶してしまつたのだつた。

『あゝら、気を失つちやつたの……。ん、しょうがないわねえ。』

『』
そう言つて、朱雀將軍は信乃に水を掛けていったが、信乃はゆつくりと目を開け、朱雀將軍を見つめていた。

『やっと気がついたのね。』

「……私は絶対諦めない。」

『それはどうかしら……。』

「必ず来るさ……。必ず私の仲間が助けに来る。」

『いい加減に諦めなさい……。』

「……。。。。。」

朱雀將軍の執拗な拷問に、苦悶の表情を浮かべる信乃だったが、必ず仲間が助けに来ると信じてじつと耐えていた。

そして、導師達の前に現れた暗黒の魔術師は、実は八犬士最後の一人、犬村大角だつた事が判明した。

新たに犬村大角が加わり、光の八犬士がめでたく勢揃いする事になった。

そしていよいよ、光の八犬士対闇の吸血鬼・朱雀將軍との決戦を迎えようとしていた。

。果たして、導節達は無事信乃を救出する事が出来るのだろうか・・・

導節達の運命やいかに・・・。

第拾四話 冥獸四天王篇 第五部 決戦！鬼骨城の戦い

遂に決戦の日を迎えた導節達は、新兵衛、現八、小文吾、毛野、莊助、大角を率いて鬼骨城に向かつていった。

既に鬼骨城の廻りは、邪悪な妖気に充ちており、導節達の行く手を遮っていたのである。

「遂に来てしまったな……。」

「信乃は無事だろうか……。」

「導節様、朱雀將軍はどんな罫を仕掛けて来るのでしょうか。」

「奴は強力な術を操るんだ。油断は出来ない。」

「せやかて、こつちには対吸血鬼用の武器があんねん。」

「そうとも、俺達は八大童子の宝玉があるんだ。冥獸四天王なんざに負ける訳にはいかないぜ。」

「そうですね、八大童子に護られている限り、我等光の犬士は不滅ですから……。」

「だからと言って、油断は禁物だ。気を引き締めて朱雀將軍との戦いに備えるぞ。」

と、その時だ。

鬼骨城の上空から、吸血鳥の大群が導節達に一斉襲撃を仕掛けていった。

「また来やがったぞ。」

「待てっ、よく見ろっ……。」

「あっ、あれは……。」

導節達が目撃しているのは、朱雀將軍が放った吸血鳥・怪魔鳥鬼かいまちようきと
言う巨大な吸血妖怪の大群だ。

「前に見た奴とは全く違うぞ。」

「そんなのどうでもいい、みんな一気にやつつけるぞっ。」

『おおっっ。』

導節、新兵衛、現八、小文吾、毛野、莊助、大角の七人は、怪魔鳥

鬼の大群を蹴散らしていき、一気に全滅に追い込んでいったのである。

「なんとかやつつける事が出来たが、まだ終わりでは無い。」

「どう言う事だ、導節……。」

「あれを見ろっ。」

導節達は更に上空を見上げると、またもや怪魔鳥鬼の大群が襲来し、容赦無い攻撃が続いたのであった。

「なんや、また来おったで。」

「次から次へと来やがって……。」

「こっとなったら、俺が一気に型をつけてやる。」

「大角殿、どうやってあの怪鳥を……。」

「まあ、見ている。俺の究極の術で全滅させてやるぜ。」

大角は、黄色いお札を手に取り、印を結んで術を唱え始めていった。

「天空を司りし雷いかづちの守護神・天聖雷帝神てんしやうらいていじんよ、我が命令に従い、邪悪なる魔物に天罰を与えよっ。」

大角が術を唱え終わると、天空から強力な雷鳴が怪魔鳥鬼の大群を事如く全滅させていった。

「よっしゃ、これで先に進めるぜっ。」

「導節はん、急いで信乃はんを助けな……。」

「よしっ、みんな急いで鬼骨城に乗り込むぞ。」

暫くして、導節達は鬼骨城に突入し、迫り来る妖怪軍団を蹴散らしながら最上階を目指していったのであった。

「この奥に、信乃がいるのか……。」

「だが、朱雀將軍もこの中にいるんだろ。」

「ああ、みんな油断するなよ。行くぞっ。」

導節達は鬼骨城の最上階の扉を開け、中に突入していった。

「はっ、信乃……。」

「導節様、気をつけてっ。」

突然、朱雀將軍が導節達を襲撃し、その後信乃の前に立ちはだかつ

たのである。

『オホホ……。とうとう此処まで来た様ね、光の犬士の皆さん。』

「てめえ、朱雀將軍。」

「信乃を返しやがれっ。」

『そうはいかないわ、せつかくの人質をそう簡単に渡せないわよ。』

「ふざけんじゃねえ、何が何でも信乃を返して貰うぜ。」

「せや、あんさんだけは絶対許さへんで。」

『だったら、力尽くで奪ってみるがいいわ。』

「くっ、だったらやってやるぜっ。」

「みんな、行くぞっ。」

導節達七人は、信乃を取り返すべく朱雀將軍に戦い挑んで行くが、逆に朱雀將軍の圧倒的な力には全く歯が立たなかった。

『オホホ……。さっきの勢いは何処へいったの。全く期待外れじゃない……。』

「なんて強さだ、さすがは冥獣四天王の一人・闇の吸血鬼、朱雀將軍。」

「俺達が束になっても全く術が通用しないぜ。」

「いったいどないしたらええねん。」

「もう一度行くぞっ、駄目元で奴に打撃を与える……。』

再び導節達は、それぞれの術で朱雀將軍に応戦していくが、またしても朱雀將軍は妖術で導節達を退けていったのである。

「駄目だ、何度やっても打撃を与える事が出来ない。」

『何度やっても無駄よ、我は無敵の冥獣四天王、闇の吸血鬼・朱雀將軍を倒すなんて百年早いわよ。』

と、その時だ。

信乃が突然朱雀將軍にこう言い放っていったのだった。

「……。何が倒す事は出来ないだと。ふざけるなっ、俺達は貴様等みたいな外道に、負ける訳にはいかないんだよっ。」

信乃の怒りが爆発し、力を振り絞って縛られていた鎖を引き契っていったのである。

「ば、馬鹿な……。妖術の掛かった鎖を引き契るなんて……」
「し、信乃が本気になったぞ……。」
「まさか、あんなに本気になった信乃は初めてだ。」
「信乃、大丈夫か。」
「導節様、御心配を掛けてしまいましたて申し訳ありません。」
「よくぞ我慢致した。だが安心しろ、遂にあの武器が完成したぞ。」
「あの武器って……。まさか太陽十字剣が……。」
「ああ、これで闇の吸血鬼、朱雀將軍を倒す事が出来るぞ。」
「つしゃ、信乃が無事帰って来たんだ。」
「これで光の八犬士が揃ったんや。」
「朱雀將軍、もはやこの勝負……。我等の勝ちの様だな。」
「黙れつ、まだ勝負はこれからよ。」
「へんつ、そんなのやってみなきゃ分かんねえだろ。」
「ならば、どちらが勝つか勝負よ。掛かって来なさい……。」
「臨むところだ、我等光の八犬士の真の力を見せてやる。」
遂に、光の八犬士対闇の吸血鬼・朱雀將軍との決戦の火蓋が切つて
落とされた。

導節、新兵衛、信乃、現八、小文吾、毛野、莊助、大角等八人の犬
士達は、果敢に朱雀將軍に挑んでいくが、朱雀將軍の強力な妖術を
施し、大打撃を与えていたのである。
「オホホ……。他愛も無い連中だねえ。」
「くそつ、朱雀將軍め……。」
「こうなったら、俺達が持っている八大童子の宝玉を使うしかない
な。」
「よしつ、みんな力を併せて八大童子の宝玉に念を送るんだ。」
「おおつ。」

導節達は八大童子の宝玉を握りしめ、精神を集中させながら念じて
いったのだった。

『天空を司りし天界の守護神・八大童子よ。今こそ我等に力を与えよ。秘術・天空変化っ！』
すると、導節達の身体が全身金色の光に包まれ、今までに無い力が増幅させていくのであった。

『な、何なの……あの光は……』

『す、すげえ……』

『力が漲っていくぞ。』

『これが、八大童子の宝玉の力なのか……』

『これで、互角に戦える事が出来る……』

『なんや、身体が熱う感じるで。』

『うおおっ、何だか身体の底から無限の力を感じるぜっ。』

『導節様、これで一気に朱雀將軍を倒せますね。』

『ああ、我等の底力を見せてやるうじゃないか。』

『うぬぬ……、例え八大童子の力を手に入れても、我には敵うものか。ならばもう一度、私の術を喰らうがいいわ。』

再び朱雀將軍は妖術を施していくのだが、導節達は全く打撃を受けず、無傷のままであった。

『何っ、私の術が効かないだと……』

『だから言っただろ、我等は完全無敵の八犬士だとな……』

『せや、貴様の術なんざ通じやせえへえねん。』

『今度はこっちの番だ、朱雀將軍……』

遂に導節達は、法力の力を最大まで上昇させ、一気に放出させていったのだ。

『喰らえっ、無限の力……。必殺・天空八卦陣！』

導節達の放った天空八卦陣が朱雀將軍に命中し、更に導節は信乃に「太陽十字剣」を渡していったのだ。

『信乃、こいつでとどめを刺せっ。』

『太陽十字剣……。こいつで……。貴様を倒すっ。』

『ま、待って……。』

『問答無用……。喰らえっ、天の裁きを受けよ。天空秘剣・太たい』

陽十字斬殺剣！」

信乃の必殺技、天空秘剣・太陽十字斬殺剣が炸裂し、遂に闇の吸血鬼・朱雀將軍は倒されていった。

『お、おのれ……。我等冥獣四天王を倒すとどうなるか……。』
「どう言う事だっ。」

『我等冥獣四天王を倒せば、地底に眠りし闇の大魔獣が復活する事を……。』

「何だっ……。」

「闇の……大魔獣。」

『その闇の大魔獣が復活すれば、この世は闇に包まれ、全てが終わるだろう。』

「へんっ、そうはさせへんで。」

「待てっ、毛野。」

「奴の言っている事は、どうやら事実の様だ。」

「噂には聞いた事がある、冥獣四天王が敗れし時、闇の大魔獣が復活する……と。」

「闇の大魔獣は、三百年前に滅びたと聞いているが、まさかそれが現実に起こるとは……。」

『その通りよ、必ず闇の大魔獣は我等の魂で復活するのよ。あと三つ揃えば、完全に復活するんだから……。』

「野郎っ、何が何でも必ず阻止してやる。」

『無駄よ、全ては玉梓様の思うがまま……。』 「またしても、悪霊・玉梓が……。」

『玉梓様が、我が魂を救ってくれる……。その時が、貴様達の最後なのよ……。』

そう言い残しながら、闇の吸血鬼・朱雀將軍は消滅していったのである。

「先ずは一人……。」

「冥獣四天王、闇の吸血鬼・朱雀將軍。手強い相手だった……。」

「でも、奴は言っていた。冥獣四天王敗れし時、闇の大魔獣が復活

すると……。」

「でも、悪霊・玉梓が絡んでいるとなると、もっと厄介な事になるぞ。」

「残る冥獣四天王は、あと三人……。」

「闇の破壊王・玄武將軍。闇の風使い・白虎將軍。そして、闇の妖術使い・青龍將軍。」

「この三人を倒した時、闇の大魔獣が甦るのか……。」

「でも、どうやって闇の大魔獣の復活を阻止するかだよな。」

「そんな簡単やん、一気に片付ければいいやんか。」

「毛野、そんなの無謀に決まってるだろ。」

「じゃ、どうやってやっつけるんや。」

「それは分からない……。だが、必ず解決策はある筈だ。」
と、その時だった。

『よくぞ集まった、光の八犬士よ。』

突然、天空の彼方から九本の尻尾をもった金色の狐が導節達の前に姿を現した。

「だ、誰だお前は……。」

『私は天空聖者・九尾乃狐。天空界の神・雷帝龍王様に仕える神官。』

「天空聖者……。」

「雷帝龍王様の使いの者だって……。」

「九尾乃狐よ、俺達に何の用があつて来た……。」

『お主達も知つての通り、冥獣四天王の一人、闇の吸血鬼・朱雀將軍を倒した今、既に闇の大魔獣復活の儀式は始まっている。』

「何だつて……。」

「それは、ほんまなんか……。」

『ええ、雷帝龍王様も既に闇の大魔獣復活を予言なされていました。』

「雷帝龍王様が、そこまで予言なされていたとは……。」

「それで、闇の大魔獣の復活を阻止する方法は……。」

すると九尾乃狐は、

『強いて言うならば、お主達が真の八大童子の力を手に入れる事です。』

「真の・・・八大童子の力。」

「どう言う事だよ。」

『お主達の今の力では、闇の大魔獣を倒す事は出来ない。けど、真の八大童子の力を手に入れた時、その力は想像を遥かに超えるであろう。』

「だったら、その真の八大童子の力を手に入れようぜ。」

『それは無理でしょう。真の八大童子の力を手に入れるには、遥か彼方に存在する国・蓬萊国ほうらいこくに行かなければ、手に入れる事は出来ません。』

「よしっ、その蓬萊国へ行ってみよう。」

「九尾乃狐よ、蓬萊国へ行くには、どうすればいいんだ。」

『蓬萊国へ行くには、時空の鏡を通らなければ、行く事は出来ません。』

「導節、このままじゃ奴等に勝てないぜ。」

「そうですね。行きましよう、蓬萊国へ・・・。」

「・・・行こう、蓬萊国へ。」

『分かりました。貴方達の熱意に感服しました。この九尾乃狐、蓬萊国へ案内致しますよう。』

「頼むぞ、九尾乃狐。」

遂に始まった聖魔大戦。

冥獣四天王、闇の吸血鬼・朱雀將軍が言い放った『闇の大魔獣』とはいったい何者なのか・・・。

天空界の神・雷帝龍王に仕える神官・九尾乃狐の導きに因り、蓬萊国へと旅立った導節達。

果たして、導師達は真の八大童子の力を手に入れる事は出来るのだ
ろうか……。

そして遂に、冥獣四天王第二の刺客が現れようとしていた……。

丁度その頃、冥獣四天王の一人、闇の吸血鬼・朱雀將軍が敗れてしまい、幻魔城城主・玉梓は朱雀將軍の魂を回収し、闇の大魔獣復活の儀式を執り行なわれようとしていたのである。

『遂に、光の八犬士が揃ってしまった様じゃな……。』

『あの暗黒の魔術師が、八犬士の一人だったとは……。迂闊でございました。』

『それにしても、冥獣四天王の一人、闇の吸血鬼・朱雀將軍が倒されてしまった今、あの闇の大魔獣を復活させる儀式をする時が来たようじゃ。』

『玉梓様、まさかあの闇の大魔獣を甦らせようと……。』

『その通りじゃ。闇の大魔獣を復活させるには、冥獣四天王の魂が必要なのじゃ。今此処に、朱雀將軍の魂がある……。この魂を、あの邪神像に宿し、復活の時期を待つ……。』

すると玉梓は、朱雀將軍の魂を邪神像に宿しながら呪文を唱えていった。

『深き眠りし、闇の帝王・怪魔将牙神かいましやうげじんよ。今此処に、冥獣四天王の魂を捧げ、再び闇の世界より復活を遂げよ。オン・バサラ・ターク・シヤナウ・ボダナン・アーク・センマンダ・ソワカ!』

すると、朱雀將軍の魂が邪神像に吸収され、邪神像の目が赤く妖しい光を放つていった。

『おお、これぞまさしく、闇の帝王・怪魔将牙神の気配……。』

『玉梓様、怪魔将牙神の復活も、そう遠くはありませんな。』

『ほほほ……。それはさておき、次なる四天王を呼ぶとするかのう。出でよつ、闇の破壊王・玄武將軍。』

玉梓が闇の魔法陣から、冥獣四天王の一人である闇の破壊王・玄武將軍を呼び出していった。

『お呼びでございますか、玉梓様……。』

『闇の破壊王・玄武將軍よ、亡き闇の吸血鬼・朱雀將軍の仇を取り、光の八犬士を始末せよっ。』
『任せておけ、我は無敵の破壊王。光の八犬士など、赤子の手を捻る様なものだ。』
『何と頼もしい事を……、さすがは玄武將軍。早速奴等の息の根を止めて来るのだ。』
『万事承知……。』

そう言つて、玄武將軍は闇の魔法陣を潜り、姿を消していったのである。

『玉梓様、あの者に任せて宜しいのですか。』
『幻斎坊、あれでよいのじゃ。もし、光の八犬士にやられたとしても、また魂を回収すれば済む事じゃ。』
『はっ、しかし玉梓様……。』
『何か不満な事でもあるのか……。』
『いえ、別に何も……。』
『後は時期を待つのみじゃ……。』
『御意……。』

その頃、闇の吸血鬼・朱雀將軍を倒した導節達は、更なる力を求めて聖地・蓬萊国へ向かうべく、雷帝龍王に仕える神官・九尾乃狐と共に時空の鏡に辿り着いたのである。

『これが、時空の鏡……。』
『この鏡を潜れば、蓬萊国へ行けるのか。』
『なんや、ちよつと緊張してきたわ。』
『そうですね。しかし、この先にはいったいどんな世界が待っているのか……。』
『果たして、我々を待ち受けるのは、正か邪か……。』
『とにかく、行ってみようぜ。』

「導師様、早速この鏡を通らない事には……。いつ奴等が襲撃して来るか……。」
「そうだな……。九尾乃狐よ、案内してくれ……。神の聖地・蓬萊国へ……。」
「分かりました。では、蓬萊国へ通ずる時空の鏡前に立って下さい。」
九尾乃狐は、導師達を時空の鏡の前に立たせ、呪文を唱え始めた。
『時空の鏡よ、我が名に於いて命令を下す。光の八犬士の者達を蓬萊国へ導き給え……。』
すると、時空の鏡がまばゆい光を放ち、一瞬にして導師達を蓬萊国へ移動していくのであった。

「……。ん、此処はいつたい何処なんだ。」

『光の八犬士よ、此処が聖地・蓬萊国です。』

「此処が、蓬萊国なのか……。」

「人間界とは全く違う世界だな。」

「うわ、なんか綺麗なところやなあ。」

「九尾乃狐よ、何処に行けば本当の八大童子の力を手に入れる事が出来るのだ。」

すると九尾乃狐は、

『この蓬萊国には、八人の賢者が存在すると云います。光の八犬士よ、これより八人の賢者が住むと云う、天将楼てんしょうろうに向かうといいですよ。』

「もしかして、天将楼の……八賢者の事なのか。」

「知っているのか。」

「ええ、天将楼の八賢者と言えば、あらゆる物事に精通している大賢者の事で、勿論闇の大魔獣の事も存じているかと……。」

「それじゃ、八大童子の事も知っていると云うのか。」

「ええ、この事は天将楼の八賢者以外は、誰も知られていないので

す。」

「とにかく行ってみようぜ、天将楼とやらへ……。」

「ああ、私も天将楼の八賢者に逢ってみようと思っていたところだ。」

「

早速導節達は、九尾乃狐の案内で天将楼に向かっていった。

「此処が、八賢者が住むと言う天将楼か。」

「それにしても、何だか物々しいところですね。」

「この中に、全てを司る八賢者がいるんだな。」

「なんや、めっちゃ緊張してきたで。」

「いつたい、どんな姿をしているのか……。」

『では、参りましょう。八賢者の待つ、《謁見の間》へ……。』

しばらくして、導節達は天将楼の中に入り、謁見の間の扉を潜るとそこには八人の賢者が鎮座しており、導節達が来る事を予言していたと言うのだ。

『よくぞ此処まで来たな、選ばれし光の八犬士達よ……。』

「貴方が、天将楼の八賢者……。」

『いかにも、我等は天将楼の八賢者。光の八犬士よ、お主達が真の八大童子の力をどうしても手に入れたいと申すのか……。』

「お願いです、どうすれば真の八大童子の力を手に入れる事が出来るのでしょうか。」

すると、八賢者の一人がこう答えたのだ。

『今のお主達の力では、真の八大童子の力を手に入れる事は出来ない……。』

「何ですって……。」

「どう言う事やねんっ。」

『今のお主達では、闇の大魔獣・怪魔将牙神を倒せぬ……。』

「怪魔将牙神……。」

「そいつはいつたい、何者なんですか。」

『怪魔将牙神は、今から三百年前に滅びた伝説の大魔獣。その大魔獣が、再び復活を遂げようとしている。』

『その大魔獣を封じたのは、伝説の戦士・てんくうはうしょうじん天空八将神。』

『天空八将神とは、天空界を司る大天空聖者・げんしてんそん元始天尊様を守護する護衛兵の事……。』

『大天空聖者・元始天尊様は、天空八将神に命じて怪魔将牙神を封じていった。』

『ところが、何者かが闇の大魔獣・怪魔将牙神を復活させようとしている者がいる……。』

『まさかつ、悪霊・玉梓が……。』

『恐らく……。悪霊・玉梓が何らかの形で怪魔将牙神を復活させようと思んでいるに違いない……。』

『……。いったい俺達はどうすればいいんだ。』

『そや、わい等が敵う相手やないで。』

『そんな弱気になってどうするんだよ。』

『だが、必ずしも策が無いとも言えぬ……。』

『どう言う事ですか、八賢者よ……。』

『お主達の心の奥に眠る、光の心がまだ目覚めておらぬからだ。』

『光の……。心。』

『その光の心が目覚めぬ限り、闇の大魔獣は倒せぬぞ。』

『では、どうすれば……。』

『方法はただ一つ、この世界に存在する、三つの試練に挑まなければならぬ。』

『その三つの試練とは……。』

『第一の試練は、攻撃技だけの試練。第二の試練は、法術だけの試練。第三の試練は、必殺技だけの試練。』

『この三つの試練を全て制覇した時、初めて真の八大童子の力を手にする事が出来よう。』

『要するに、その三つの試練を制覇しちまえばいいんだな。』

『なんや、だったらさっさとやってしまおうやないか。』

『光の八犬士よ、そう簡単に三つの試練は甘くないぞ。』

『左様、それぞれの試練には屈強の番人が控えておる。一筋縄ではいかぬ者達ばかりじゃからのう……。』

「それでも構わない、我々を三つの試練に案内してくれっ。」

『……。よからう。ではっ、お主達を三つの試練へ案内致そう。』

すると八賢者は、印を結んで術を唱え、導節達を三つの試練に転送していったのである。

『天空を守護せし大天空聖者・元始天尊様、この者達に三つの試練へと導いて下さりませ。天空秘術・時空転送の術。』

すると、導節達は魔法陣の中へ吸い込まれる様に一瞬にして転送されていくのであった。

『あの者達は、果たして無事戻って来られるだろうか。』

『心配する事は無い、あの者達は必ず戻って来る……。』

『その通り、あの連中からは強い霊気を感じる……。』

『やはり、そなたも感じるか……。』

『ああ、必ずあの八人の犬士は帰って来る。』

『ではっ、八犬士のお手並み拝見と参ろうかのう。』

しばらくして、導節達は三つの試練の一つである、第一の試練の洞窟の前に辿り着いたのである。

「遂に来たな……。」

「これが、第一の試練の洞窟か……。」

「この中に、いったいどんな試練が待ち受けているのか……。」

「はよ、中に入ろうやないの。」

「そうですね。導節様、行きましよう……。」

「そうだな、気を引き締めて行こう。」

洞窟の中に入ってしまった導師達は、恐る恐る洞窟の奥に進んで行く
と、なんとそこには大きな身体をした、いかにも強そうな巨体の男
が、導師達を待ち構えていたのである。

『待っていたぞ、光の八犬士達よ……』

「貴方はもしや……、第一の試練の番人なのでは……。」

『いかにも、我は第一の試練の番人・剛力大仙こうりきだいせんである。』

「なんか、強そうな番人だな。」

「俺達、あんな奴に勝てるのかな……。」

「でも、やっぱり勝てないかも……。」

『お主達は、天将楼の八賢者から話しは聞いていると思うが、此処
で行う試練は、全て攻撃技しか使う事を許されない場所だ。勿論、
法力や必殺技は使用出来ないからそのつもりで……。』

「分かってている。強力大仙よ、早速我々を鍛えてくれ。」

『承知した、だが我は一切手加減せぬ。心して掛かるがよかるうぞ。』

遂に始まった剛力大仙の試練を受ける導師達。

だが、何度挑んでも剛力大仙の猛攻には、導師達も手も足も出な
かった。

『光の八犬士よ、お前達の力はその程度か……。』

「まだ、こんなもので終わる俺達じゃないっ。」

「せやっ、わい等が本気になれば、あんななんか一発で倒したる
わいっ。」

『そうだ、その根性があれば、怪魔将牙神をも倒せる筈だ。さあ、
もう一度掛かって来いっ。』

あれから、どの位の時間が経過したのだろうか。

導師達の力が徐々に増幅していき、遂に剛力大仙を追い詰めてい
たのである。

『とうとう、此処まで強くなつたな……。だが、これで終わりでは無いぞ。更なる技を受けてみるがよかるうぞ。』
すると剛力大仙は、全身全霊を込めて導節達に攻撃技を放つていくのだった。

『破あゝゝゝつ、必殺・龍狼烈火斬！』

しかし、導節達は剛力大仙の必殺技を跳ね返し、逆に剛力大仙を撃破していくのであった。

「大丈夫ですか。」

『……。だ、大丈夫だ。それにしても、お主達はやはり強いいう。』
「そんな事あらへん。」「でもそのお陰で、我々を鍛えてくれたのですから……。」

「これで俺達は、闇の大魔獣討伐に一步近付いたんだな。」

「だが、我々はまだ完全に強くなつた訳ではない。残りあと二つの試練を制覇しない限り、奴等に勝てる確証は無いに等しい……。」
『その通りだ……。光の八犬士よ、決して今日学んだ事を決して忘れるではないぞ。』

「はいつ。我々八犬士、剛力大仙殿の教えを胸に秘め、日々精進致す所存にございます。」

『よくぞ申された、それでこそ教え甲斐があると言つものだ。』

「ではつ、これで完全に剛力大仙殿の試練は……。」

『第一の試練は、合格じゃ。』

「やつたぜ、この調子で第二、第三の試練を制覇しようぜ。」

「そうだな、あと二つ制覇すれば、我等は闇の一族である悪霊・玉梓や、他の冥獣四天王、更には怪魔将牙神を倒す事が出来るんだ。」

『では、光の八犬士よ。お主達に鳳凰の証を授ける。こいつを持って次の試練へと進むがいい。』

「ありがとう、剛力大仙殿。」

導節達は、剛力大仙から鳳凰の証を手に入れ、次なる第二の試練へと向かつていった。

果たして、導節達に待ち受けます試練とはいつたい……。

天将楼の八賢者の導きにより、蓬萊国の三つの試練を挑む事になった導節達は、第一の試練の番人・剛力大仙との戦いで見事勝利を修め、剛力大仙から鳳凰の証を手に入れ、その後導節達は第二の試練に挑むのであった。

「此処が、第二の試練の洞窟か……。」

「何だか、第一の試練の洞窟に比べて、強い靈気を感じます。」

「ほんまや、めっちゃごっつい靈気が強烈に来よるで。」

「いかにも、『うお〜っ。』って出て来そつな雰囲気だな。」

「ああ、でも油断するなよ。前の試練の洞窟とは違うから気を付けろ。」

「分かっているさ、どんな相手が来ようと、この現八様が一気に決めてやるぜっ。」

「そんな強気でいると、あとでしっぺ返しが来るぞ。」

「そうですね、現八様は一度こうだと決めたらとことん突っ走る癖がありますからね。」

「……わ、悪かったな。だけど、そう言う信乃だつて一時は敵に捕まっていたんだから、文句が言える立場じゃないだろう。」

「待てっ、現八……。そう苛立つんじゃない……。」

「す、すまなかつたな……。俺が言い過ぎた。この通りだ……。」

「私の方も、ちょっと言い過ぎたみたいです。それより、現八様の龍虎餓狼剣の様子が……。」

「何っ……。」

現八の武器である、龍虎餓狼剣が奇妙な怪音を響かせながら導節達の耳を狂わせていった。

「な、何だこの怪音は……。」

「どうやら、現八殿の剣から怪音波が発している様です。」

「何だつて……。」
更に龍虎餓狼剣の怪音波が激しく共鳴し、遂には導節達を窮地に追い込んでいったのである。

暫くして、怪音波は治まったのだが、原因は分からず現八は龍虎餓狼剣を手に取ってじいじと見つめていたのだった。

「何故だ、何故龍虎餓狼剣が……。」

「妙だな、龍虎餓狼剣が怪音波を発するなんて……。」

「導節様、これっていったい何の前触れなんでしょうか。」

「……もしかしたら、この近くに闇の一族の妖怪がいるのかも知れないな。」

「だが、この蓬莱国に妖怪が来る事は不可能な筈……。」

「せやかて、現八はんの剣が異常な怪音波を発しているさかい、これは何かありそつやで。」

「うん、でも何か嫌な予感がするな……。」

と、その時だ。

時空の歪みが生じ始め、黒い霧の様な物が蓬莱国を一瞬で包まれてしまい、その黒い霧の中から冥獣四天王の一人である、闇の破壊王・玄武將軍が導節達の目の前に姿を現したのである。

「な、なんやあれは……。」

「そんな馬鹿な……。なんで闇の一族がこの蓬莱国に……。」

「あれは、冥獣四天王の一人……闇の破壊王・玄武將軍。」

『やつと見つけたぞ、光の八犬士達よ。』

「なんで貴様が此処にいるんだ。」

『そんなの簡単な事だ。我の得意とする魔導妖術を用いて、時空転送の術を使って此処まで来たのさ。』

「時空転送の術だつて……。」

「くっ、奴等もとうとう此処まで手を延ばしていったか。」
「どうするよ、導師。このままじゃ、蓬萊国が闇に染まってしまっ
ぞ。」

「仕方が無い、こうなったらやるしか無いだろう。」

「だけど、まだ第二、第三の試練が終わっていないんだぜ。」

「そんな事はどうでもいい、とにかく奴を倒すぞっ。」

『そう簡単にやられてなるものか。朱雀將軍の仇を取らせて貰うぞ。』

すると、玄武將軍はいきなり導師達に攻撃を仕掛けていき、更に玄武將軍は大きな金棒を振り回し、地面に叩きつけて地響きを起こし、導師達に打撃を与えていったのだった。

「うわっ……。」

「あつぶねえ。」

「玄武將軍め、いきなりあの金棒で攻撃するなんて……。」

「あの金棒で攻撃されたら、一たまりもないぜっ……。」

「せやで、あんなんやられたらどうにもならへんでえ。」

「おいっ、どうするんだよ。このままでは奴にやられちまうぞ。」

「導師様、こうなったら第一の試練で鍛えた攻撃技を玄武將軍に見せてやりましょう。」

「そうだな、みんな行くぞっ。」

導師の号令の下、新兵衛、現八、信乃、小文吾、毛野、莊助、大角が一斉に玄武將軍に攻撃を仕掛けていった。

『な、何だこいつ等……。凄まじい攻撃力で我を追い込んでいくなんて……。』

だが、玄武將軍も反撃していくが、あまりの力技に圧倒されてしま
うのだった。

『うぬぬ……。ならばこれでも喰らうがいい。魔導妖術・波動裂
震破あ〜っ。』

玄武將軍の魔導妖術である「波動裂震破」は、振り上げた金棒に妖力を送り込み、地面に叩きつけたと同時に強烈な地響きを起こし、

打撃を与える玄武將軍が得意とする妖術である。

「ぐわっ……。」

「あかんっ、こいつはヤバイでえ。」

「このままじゃ、玄武將軍にやられてしまうぞ。何かいい方法は無いのか……。」

「一か八かやってみるしか無いな……。」

「導節、いったい何をするつもりだ……。」

すると導節は、印を結んで呪文を唱え、玄武將軍に向かって術を放っていった。

「オン・バサラ・ナウマク・サマнда・ボダナン・インダラ・ソワカ！」

導節の放った術が玄武將軍に命中し、打撃を与えたかのように見えたが、玄武將軍の強靱な鎧に導節の術が跳ね返されてしまうのであった。

「何っ、私の術が跳ね返されただ……。」

「導節の術が通じないなんて……。」

「どないなってんねん、導節はんの術が跳ね返されたで。」

『無駄だ、貴様の術などこの玄武將軍様には通用しないんだ。』

「どうするんだよ、もしかしたら俺達の術が全く効かないかも知れないぞ。」

「……もう一度やるしかないな。」

再び導節は術を唱えていくが、何度やっても玄武將軍には全く傷一つ付ける事は出来なかった。

『何度やっても同じ事だ。所詮、貴様等の力などそんなものだ。』

「くっ、もはやこれまでか……。」

「諦めたらあかん、導節はん。最後まで諦めたら、人間界に未来はあらへんで。」

「そうだよ、毛野の言う通りだ。最後まで諦めるんじゃない。」

「俺達も一緒に戦うから、決して諦めるな。」

「みんな……。」

「とりあえずもう一度やるぞっ。」

再び導師は、他の七人と共に全身全霊の力を込め、玄武將軍に全ての力を放っていった。

『うおお~~~~っ。』

導師達の術が玄武將軍に命中し、玄武將軍は深い傷を負ってしまい、ひざまづきながらこう言い放った。

『お、おのれ光の八犬士め……。よくもこの玄武將軍をコケにしたなあ。だが、これで終わりだとおもったら大間違いだぞ。いつか必ず貴様等の命を貰い受ける故、左様心得ておくがいい……。』

姿を消した玄武將軍を追い掛けようとしたのだが、信乃は突然奇妙な事を言い出したのだ。

「……玄武將軍は必ず我々に災いを齎すかも知れません。」

「本当か……。」

「どんな災いなんだよっ。話してくれないか、信乃。」

「あの玄武將軍は、四天王最強の妖怪。攻撃・防御・素早さ共に最高ののですが、それだけではなく災いを齎す呪いの術を得意とする

〔魔導呪災術〕と言う妖術を使うと聞きます……。」

「魔導……呪災術。」

「なんや、聞いた事ない名前の術やなあ。」

「導師、何か知っている事ないのか……。」

「魔導呪災術……、それは全ての物に災いや呪いを齎す、最強の妖術……。」

「そんなに凄い妖術を持っているなんて、何だか恐ろしい奴だな。」

「だが、いったい奴はどうやって災いや呪いを掛けるんだ。」

「それは分からない。けど、玄武將軍は予告無しに突如相手に災いや呪いを掛けてくるんだ。」

「いったい誰に……。それに、どんな災いや呪いを玄武將軍は仕

掛けていくんだ。」

『それは、わしから話そう……。』

突如、導師達の目の前に白髪の老人が姿を現し、闇の破壊王・玄武將軍の秘密を話していった。

「貴方は……。」

『我は天空十二神てんくうじゅうにしんの一人・太上老君たいじょうろうくんじゃ。』

「天空十二神……。」

「えっ、天空十二神と云えば、天空界の神・元始天尊様に仕える、天空神官の事……。」

「その太上老君様が、何故闇の破壊王・玄武將軍の事を御存知なのですか……。」

『あの玄武將軍は、元々我の1番弟子だったんじゃ。ところがある日、奴は我の所を去り、悪の道を進んだ。それ以来、自らを闇の破壊王と名乗り、冥獣四天王の一人として悪霊・玉梓に忠誠を誓った様じゃ。』

「ではその間、玄武將軍は天空八將神に封印され、三百年経った今……奴等は復活した。」

「何としてでも、玄武將軍を阻止しないと……。」

「太上老君様、玄武將軍を倒す方法は無いのですか……。」

『強いて言えば、奴を倒す方法はある。だが、生半可な攻撃では、強靱な防御を誇る玄武將軍には勝てぬ。そこでじゃ、お主達に我が秘術を伝授しようと思つておる。』

「本当ですか……。」

『ただし、わしの修行はちと厳しいぞ。』

「と、申しますと……。」

『わしが、此処の第二の試練の番人でもあるからじゃ。』

「何ですって……。」

「太上老君様が、第二の試練の番人だったとは……。」

「ちいっとも知らなかったわ。」

「……太上老君様、是非我々にその秘術を御伝授して頂きとう存

じます。」

『お主達にその覚悟があるのならば、伝授しても構わぬが……。』
「我々は、どうしても玄武將軍に勝ちたいのです。どんな辛い修行でも耐えて見せます。」

「俺も、もつと強くなりたいんだ。」

「私も同感です。」

「わいも、もつと強うなつて真の力を手に入れたいんや。」

「お願いです、太上老君様……。」

暫くして、太上老君はすつと立ち上がり、導節達にこう話していった。

『お主達の熱意、しかと受け止めた。では早速修行を始めるとするか。う……。』

「ありがとうございます……。」

「これで、心置きなく修行が出来るぜつ。」

「よし、気合いを入れて修行をするぜつ。」

太上老君の指導の下、導節達は玄武將軍との戦いに備えて厳しい修行が始まるうとしていた。

さて、丁度その頃。

先の戦いで負傷した玄武將軍は、あまりにも不甲斐ない結果に不満を抱いていた。

『くつ、光の八犬士め……。奴等は確実に強くなっている……。だが、この玄武將軍は他の三人とは格が違うからな。絶対奴等を根絶やしにしてやるっ。』

と、そこへ闇の僧侶・幻斎坊が現れ、玄武將軍にある秘策を伝授すると近付いて来たのだった。

『玄武將軍よ、どうやら光の八犬士に苦戦を強いられている様だな。』

』

『これは、幻斎坊殿……。』

『奴等は、徐々に強さを増している。だからと言って、油断は禁物だ。』

『そんな事を言われなくても分かっている。俺は無敵の玄武將軍だ。光の八犬土など、誰の力を借りずとも、一気に全滅させてやるっ。』

『やれやれ、これだからお主は自信過剰なのだ。仕方がない……。お主にこれを授けよう。』

すると幻斎坊は、玄武將軍に「魔導玉」と呼ばれる強力な魔道具を渡していったのである。

『幻斎坊殿、こいつはいい……。』

『これは魔導玉と云って、お主が使う魔導妖術を増幅させる道具だ。』

『ほう、こいつはいいや……。これさえあれば、奴等を全滅させられる事が出来るぜっ。』

『よいか、玄武將軍……。決して魔導玉の使い過ぎには気をつけられよ。さもなければ、命に関わるのでな……。』

『それぐらいは承知しておる。それ程俺は馬鹿では無い。』

『ならば、それでよいが……。まあ、せいぜい命を無駄にせぬ事だな……。』

『万事任せておけ、俺はそんなにへまをする様な事はせぬ。まあ、幻魔城から高見の見物でもするがよからう……。』

『では、そうさせて貰おうかのう……。』

導節達に不覚を取ってしまった玄武將軍は、闇の僧侶・幻斎坊から「魔導玉」を受け取り、更なる力を手に入れてしまった……。

そうとも知らない導節達は、天空十二神の一人である太上老君から、玄武將軍との戦いに備えて強力な法術を教わる事になった。

果たして、導節達は闇の破壊王・玄武將軍に勝てる事が出来るのだろうか……。

第拾七話に続く・・・。

天空十二神の一人である太上老君から、闇の破壊王・玄武將軍に勝つ為、厳しい修行を続けていた導師達は、誰一人根を上げる事無く修行に精進していたのである。

『よくぞ此処まで耐えて来た・・・、光の八犬士達よ。』

「太上老君様、これで我々も、玄武將軍を倒せる域まで達したと思えますが・・・。」

「そうですね、我々八犬士も此処まで修行をしてきたのです。」

『だが、お主達の力はまだ完全では無い。』

「どう言う事ですか。」

「俺達の力が完全じゃないってどう言う事だよ・・・。」

『・・・確かに、お主達は術を完璧に修得した。だが、何か一つ気になる事があるのじゃ。』

「気になる事・・・ってどう言う事なのですか。」

『それは、お主達が持っている八大童子の宝玉が完全に光を失っているからじゃよ・・・。』

「何ですって・・・。」

「八大童子の宝玉が、光を失っているですって・・・。」

『・・・本当だ、宝玉が光を放っていない。』

「嘘だろっ、何で光らないんだよっ・・・。」

「なんでやねんっ。」

「太上老君様、これはいったいどう言う事何ですか・・・。」

すると太上老君は、暫くして八大童子の宝玉の秘密を明かしたのである。

『八大童子の宝玉は、元々龍水晶リョウスイクリウキョウから造られたとされている由緒正しき聖なる宝玉。』

「その龍水晶が、後に八大童子の宝玉になったと言う訳ですね。」

『その通りじゃ、龍水晶は修験道の開祖・役行者えんのぎやうじやが靈力の強い龍

神から譲り受け、百八の連ねた数珠を造られたそうじゃ。』

「それで、いつ頃から八大童子の宝玉がこの世に現れたのですか。」

『八大童子の宝玉がこの世に現れたのは、今から丁度三百年前の事、ある城の姫君の首に掛かっていたと言う伝説があったとされている。』

「その姫君の名は……。」

『館山城城主・里見義実公の娘・伏姫様じゃ。』

「太上老君様、伏姫様が首に掛かっていた数珠は、その後どうなったのですか。」

「せやっ、なんか気になるわ。」

『伏姫様はその後、愛犬・八房を庇おうと、自ら楯になって銃に撃たれて命を落としたのじゃ。すると、首に掛かっていた龍水晶の首飾りの糸が切れてしまい、《忠》《義》《孝》《礼》《信》《智》』

《悌》《仁》の八つの宝玉が八方向に飛び散っていったのじゃよ。』

「それが、今我々が持っている「八大童子の宝玉」なのか……。」

「そんな事があつたなんて知らなかったぜ。」

「でも、八大童子の宝玉が光を失っているって言うのは、何か原因がある筈何ですが……。」

「信乃、教えてくれっ。何で八大童子の宝玉が光を失ったのかを……。それに、このままじゃ玄武將軍に全員やられてしまうんだぞ。」

「私に言われても、どうにもなりませんよ。」

「現八、いい加減にしろっ。この事は、太上老君様に任せるしかあるまい。」

「太上老君様、何か方法は無いのでしょうか。」

暫くして、太上老君は導師達に『後は運を天に任せるのみ。』と、言うだけだったのである。

「それじゃ、このまま我々を野放しにするつもりですか。」

『いや、そう意味で言ったのではない。その宝玉は、力を蓄えているのじゃよ。』

「力を……蓄えている。」

「いったい、どういう意味なんですか。」

『八大童子の宝玉は、一度最大の力を発揮すると、暫くの間靈力を失う事がある。だが、ある一定の期間だけ、靈力を回復させる事が出来る。』

「本当ですか、太上老君様……。」

「どうすれば、八大童子の宝玉を回復させる事が出来るのでしょうか。」

『靈泉洞れいせんどうと呼ばれる聖なる洞窟があり、その奥にある「龍神水りゅうじんすい」に宝玉を沈めると、宝玉は元の光を取り戻す事が出来るかも知れぬ……。』

「早速その靈泉洞に行ってみようぜつ。」

「導師様、時間がありません。急いで靈泉洞へ向かいましょう。」

「そうだな、とにかくその靈泉洞に行ってみよう。」

『光の八犬士達よ、我が靈泉洞に案内致そう。』

と、突然導師達の目の前に爆発が起き、再び冥獣四天王の一人、玄武將軍が姿を現していったのである。

「またお前かつ、性懲りもなく現れやがったな……。」

『ははは……、随分なご挨拶だな。だが、今の貴様達には力を感ぜない。何故だ……。』

「そんな事はどうでもいい、どうせまた俺達にやられたいのか。」

『ふんつ、この間は不覺を取ってしまったが、今度は同じ手を二度と通用しないから覚悟するがいい。』

「だったら、試してみるか……。」

「せやつ、今までのわい等とは格がちやうで。」

『ほう……、相当自信があると見えるな。ならば、試しに戦ってみるか……。貴様達がどれだけの力を身に付けたのか、この玄武將軍が再び相手になつてやるつ。』

「面白え、速攻でてめえをぶっ倒してやるぜつ。」

「導師様、我々の力を玄武將軍に見せ付けてやりましょう。」

「ああ、みんな行くぞっ。」
『おおっつ。』

遂に始まった八犬士対玄武將軍との戦いが、再び始まるうとしていた。

『くたばれっ、魔導妖術・爆雷斬魔弾！』
はくらいざんまたん

玄武將軍の魔導妖術・爆雷斬魔弾が炸裂し、導節達の前で大爆発が起こり、大打撃を受けてしまったのである。

「くっ、玄武將軍の奴・・・前より強くなってるぞ。」

「なんで、あんなに強くなっているんだ。」

『奴はどうやら、「魔導玉」を使っているらしいのう。』

「魔導玉・・・。」

『魔導玉は、妖術を増幅させる魔道具の一つ。一步間違えれば命に関わる恐ろしい道具じゃ。』

「玄武將軍の奴、とんでもない物を使いやがったな。」

「どつりで、やけに強力な妖術を使うと思っていいたら、そんなカラクリが仕組んでいたとはな・・・。」

『よくぞ見破ったな、だかカラクリが分かっているても、もう誰にも我を止める事は出来ないぞ。』

「くそっ、どうすりゃいいんだよ・・・。」

「導節、何かいい策略は無いのか・・・。」

「あの魔導玉がある限り、どうにもならない。」

「こつなったら、一気に玄武將軍をやっつけるしかないで。」

「そうだな、例え八大童子の宝玉の光が失おうと、我々には無限の力がある。その無限の力を信じるんだ。」

「その通りだ。導節の言う通り、俺達には無限の力がある。そいつに全てを掛けてみようじゃないか。」

「そうですね。みんなの力を一つにして、玄武將軍を倒すのです。」

「よっしやっ、もう一丁気合いを入れて行くかあ。」

『何度戦つても同じ事だ。もう一度、我が魔導妖術を喰らうがいい。』

再び玄武將軍が魔導妖術を繰り出していくのだが、先程より強力な魔力を帯びた雷球らいきゅうが導節達を直撃していったのである。

『これで、光の八犬士もおしまいな。』

完全に光の八犬士を全滅させたと思ひ込んでいた玄武將軍だったが、その時奇跡は起きたのだ。

「玄武將軍、何がおしまいだって……。」

『何っ、そんな馬鹿な……。』

なんと、大打撃を受けた筈の導節達が、全くの無傷で玄武將軍の前に姿を見せたのである。

「どうだ、俺達は無傷だぜ。」

「形勢逆転の様やな、玄武將軍。」

「我々光の八犬士は無敵の犬士。貴様みたいな奴に、決してやられはしないんだ。」

「闇の化身である玄武將軍よ。貴様に生きる資格は無いんだ。」

「その通り、悪が栄えた試しは無いのさ。」

「今此処に集いし光の八犬士が……。」

「天に代わつて成敗してやるぜっ。」

「来いっ、最後の勝負だ……。」

『うぬぬ……、言わせておけば無礼雑言の数々、断じて許し難し。』

こうなつたら、この魔導玉で更に増幅させ、貴様等を叩き潰してやるっ。』

遂に本気モードに突入した玄武將軍は、魔導玉を握り締め呪文を唱えていったのだった。

『闇を司りし邪悪の神よ、今こそ我に魔導玉の力を与えよっ。』

すると、玄武將軍の持っていた魔導玉が妖しく黒い光を放ち、邪悪な妖気が玄武將軍の身体に取り込まれていくのであった……。

『うおお~~~~っ、力が漲つていくぞお。』「う、嘘だろっ……。」

……。玄武將軍の魔力が増幅されているぞ。」

「そんなのどうでもいい、一気に勝負を決めるぞ……。」

『おお~~~~っ。』

導師達は反撃を開始し、導師、新兵衛、信乃、現八、小文吾、毛野、莊助、大角の八人はそれぞれの術や必殺技で応戦していき、玄武將軍を追い込んでいったのである。

「これでとどめだつ、玄武將軍……。」

導師は究極の修験術を施し、玄武將軍にとどめの一撃を刺していくのである。

「大いなる天空の力を受けてみよつ。天空秘術・爆炎昇龍破あ〜っ。

」

導師の修験術・爆炎昇龍破が玄武將軍に命中し、遂に玄武將軍は倒されていったのである。

『お、おのれ……。だが、我が滅んでも後の二人が貴様等を倒してくれるに違いない。その前に、とっておきの奥の手を使い、貴様等に永遠の呪いを掛けてやるっ。』

そう言つて、玄武將軍は死ぬ間際に「魔導呪災術」を放ち、一瞬のうちで導師達は玄武將軍の呪いを受けてしまったのだ。

「な、何だ……。」

「か、身体が……。」

「身体の自由が……き、利かないぞ。」

「こ、これが奴の言っていた「魔導呪災術」なのか……。」

「くそっ、どうにもならないぜっ。」

「いったい、どないなつてんねん。」

「導師様、このまま我々は奴の呪いを受けたまま、やられてしまうのでしょうか。」

「いいや、これで終わる八犬士じゃない……。最後まで諦めるなつ。」

と、その時だ。

それまで光を放たなかった八大童子の宝玉が奇跡的に輝かしい光を放ち、玄武將軍の魔導呪災術が完全に打ち破られてしまったのだ。た。

『おお、奇跡じゃ。あの者達に奇跡が起きた様じゃ……。』

「お、俺達助かったのか……。」

「いったい、何があつたんだ……。」

「もしかしたら、こいつのせいなのか……。」

「多分、八大童子の宝玉が助けてくれたのか。」

「ほんまなんか。ほんまに呪いが解けたんやな……。」

「玄武將軍、さつきも言った様に我々は決して最後まで諦めないといった筈だ……。」

『……。さすがは光の八犬士。よくぞ我を倒したな。だが、これでは闇の大魔獣の力になれるんだからな……。』

「またしても、闇の大魔獣か……。」

「まさかつ、怪魔将牙神の事やないのか。」

『その通り、我が滅びて怪魔将牙神様と一心同体となるのだ。』

「そんな事はさせないぜつ。」

だが、玄武將軍は完全に滅び、魂となって遙か彼方へと飛び去って行ったのである。

『どうやら遅かった様じゃな……。』

「太上老君様、玄武將軍の魂は……。怪魔将牙神の中に取り込まれていくのか。」

『恐らくな、まだ怪魔将牙神は完全体ではない……。』

「どう言う事ですか。」

『怪魔将牙神は、恐らく悪霊・玉梓が冥獣四天王の魂を集め、復活の儀式を行おうとしている。今、玄武將軍の魂がもうすぐ怪魔将牙神の中に取り込まれようとしておる。あと二つの魂が揃えば、怪魔将牙神は完全に復活するであろう。』

「くそつ、そうはさせるか……。」

「あと二人つて事は、闇の風使い・白虎將軍と闇の妖術師・青龍將軍のみ……。」

「もし、この二人を倒した時、怪魔將牙神は復活しちまうのか。」

「でも倒さないと、人間界がやばい事になるぜ……。」

「どつち道、両方やっちまわないと、意味が無いんじゃないか。」

「太上老君様、何かいい知恵はありませんか……。」

「……さすがにこれだけは、どうにもならん……。」

「とにかく、俺達だけで何としてでも奴等を阻止しようぜ。」

「ああ、我等八犬士は必ず闇の一族を滅ぼす……。」

「せやっ、わい等が倒さんと誰が倒すんねんっちゆう話しや。」

「みんなで力を合わせて、残り二人の將軍を倒し、悪霊・玉梓と怪魔將牙神を完全にやつつけるぞ……。」

「その意気じゃ、光の八犬士達よ。だがその前に、お主達が持つて

いる八大童子の宝玉を靈泉洞の龍神水で清められていくがよかろう

ぞ。」

「では、今から靈泉洞に行つて八大童子の宝玉を清めて行こう。」

「

暫くして、導節達は太上老君の案内で靈泉洞に向かい、八大童子の

宝玉を龍神水に沈めたあと、天將楼の八賢者のところへと向かつて

いったのである……。」

天将楼に辿り着いた導節達は、八賢者の前にひざまづき、太上老君の立会いの下にこれまで起きた事を事細かく報告していったのである。

「天将楼の八賢者様に申し上げます。恐らく御存知とは思いますが、闇の一族冥獣四天王の一人、闇の破壊王・玄武將軍が突如蓬萊国に潜入し、我々を追って此処まで来たのでございますが、なんとか撃滅致した次第でございます。」

『左様か……。だが、お主達は第三の試練を踏破とくはしていないのは何故なにゆえなのか……。』

『申し上げます。実は全てこの太上老君が決断を下したまでの事……。闇の一族の配下の者が蓬萊国へ潜入し、この国を守る為に仕方なく第三の試練を行わなかったのでございます。』

「八賢者殿、太上老君様は我々の事を思っていたまでの事……。」

「あまり、太上老君様を責めないで下さい。」

「せや、太上老君様は悪うないで。」

「お願いです、八賢者様……。」

すると八賢者は、導節達と太上老君にこう言って聞かせたのだった。

『……光の八犬士達よ、お主達の活躍……。確かにこの目で見さ

せて貰った。更に、太上老君の采配は実に見事ではあった。だが、肝心の八大童子の宝玉の光がまだ見えない様が、どうやら靈泉洞の龍神水に沈めていったみたいだな。」

「そこまでお見通しでしたとは……。」

「それで、八大童子の宝玉は光を取り戻したのか……。」

「ご覧の通り、八大童子の宝玉は無事光を取り戻しました。」

導師達は八賢者に、まばゆい光を放つ八大童子の宝玉を見せていった。

「おお……、まさしくその光は、八大童子の宝玉。」

「その輝きこそ、紛れも無く八将神の力の源……。」
みなもと

「八将神って、まさか「天空八将神」の事では……。」

「その通り……。かつて天空八将神は八大童子の宝玉を用いて力を増幅させ、強大な妖怪と死闘を繰り広げていったとされている。」

「だがその後、八大童子の宝玉は「八大守護神」と呼ばれる者達に渡ったと聞いた事がある。」

「八大守護神……。」

「八大守護神とは、千手観音・虚空蔵菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩・勢至菩薩・大日如来・不動明王・阿弥陀如来の八人の守護神の事。」

「その八大守護神が、その宝玉を受け継いだと言つ訳ですか。」

「しかし、本当にそんな事があつたなんて……。」

「全然知らなかつたな……。」

『八大守護神は、宝玉を安置する為、「八角堂」に納めたのだが、何の因果なのか……八大童子の宝玉は忽然と何処かへ消えてしまつたのだ。』

「そして今、我々の手元にあるのか……。」

「なんや、不思議な話しやなあ。」

「それにしても、この八大童子の宝玉にそんな秘密があつたとはな……。」

『光の八犬士達よ、今からお主達に我等天将楼の八賢者から渡した
い物がある。』

そう言つて、天将楼の八賢者は導節達に色違いの装束しゅうそくと八本の剣けんを渡していつたのである。

「八賢者様、これはいつたい……。」

『それは、伝説の天空八将神が身に纏つていた「八将神の装束」と、
「陰陽八極剣」（おんみょうはちきよくけん）だ。』

「これが……伝説の八将神の装束と、陰陽八極剣。」

「こんな凄い武器と装束は初めてだぜっ。」

「なんや、色も鮮やかで・・・結構カッコいいやん。」

「おいっ、早速着てみようぜ・・・。」

導師達は早速、それぞれの装束に袖を通し、剣を装備して八賢者に披露したのである。

『おお、まさしく天空八将神の生き写し・・・。長生きはするものだなあ。』

『これこそが、我々天将楼八賢者が求めていた姿・・・。』

『今此処に、お主達を天空八将神と名乗る事を認める。』

『しかし、第三の試練がまだ終わっていませんが・・・。』

『もう、既に終わっておる。闇の破壊王・玄武將軍との戦いで、必殺技の修行は完璧に習得済みじゃ。』

「それじゃあ・・・。」

『うむ、そなた達は三つの試練を全て踏破した事になる。』

「やったぜ、俺達完璧に三つの技を完全に習得したんだ。」

「これで、我々も闇の一族に対抗出来る力が更に付いたと言っ訳ですな・・・。」

「導節様、急いで元の世界へ戻らないと、また闇の一族が暴れているのかも知れませんよ。」

「ああ、急いで戻ろう。何だか、嫌な予感がするんだ……。」

『天空八将神よ、お主達にもう一つこの太上老君から渡したい物がある。受け取ってくれ。』

そう言つて、太上老君は導節達に「退魔の鏡」を渡していったのであつた……。

『これは「退魔の鏡」と言つて、あらゆる妖魔の魔力を跳ね返す力がある究極の法具じゃ。これさえあれば、どんな強大な妖怪の呪力でも完全に防ぐ事が出来るじやろ。』

「ありがとうございます。何から何まで太上老君様にはお世話になりました。このご恩は一生忘れません。」

『では、天空八将神よ。気をつけて行かれられよ。お主達の武運を祈つておるぞ……。』

「ありがとうございます、天将楼の八賢者様……。」

「おいつ、そう言えば九尾の狐は何処へ行つたんだ。」

『導節様、遅くなって申し訳ありません。』

「いったい何処へ行っていたんだよつ。」

『そ、その姿は……。もしや、天空八将神ではありませんか。』

「ああ、どやっ・・・結構似合っているやろ。」

「そんな事より、今まで何処に行っていたんだ・・・。」

『はい、私は闇の一族の行動を偵察していました。ところが、冥獣四天王の一人である、闇の風使い・白虎將軍が江戸の町に現れ、事もあろうに江戸城を占拠した模様でございます。』

「何っ、遂に江戸城まで手を伸ばしていたとはな・・・。」

『それだけではございません。先程幻魔城で、闇の破壊王・玄武將軍の魂が、怪魔將牙神の中に取り込まれてしまいました・・・。』

「くそっ、遂に朱雀將軍と玄武將軍の魂が、怪魔將牙神の中に入っちゃったか・・・。」

『天空八將神よ、急いで人間界に戻り、闇の風使い・白虎將軍を何としても倒すのだ。』

「分かりました、必ずや我等天空八將神が白虎將軍を倒してご覧にいきます。」

『では早速時空の鏡に向かいましょう。事は一刻を争います。』

「分かった。新兵衛、信乃、現八、小文吾、毛野、莊助、大角・・・。」

「ああ、俺達の力を奴等に見せつけようぜ。」

「せやっ、光の八犬士改め、天空八將神の誕生やで。」

「皆、気合い入れていくぞっ。」

『おお~~~~~っ。』

その頃、人間界では闇の風使い・白虎将軍が江戸城を占拠し、江戸八百八町を支配していたのである。

『あの最強だった玄武将軍が、まかさ光の八犬士如きにやられるなんて・・・本当に情けないわね。けど、この闇の風使い・白虎将軍は他の二人とは違って、頭脳明晰で策略家だと言ったところを光の八犬士どもに知ら示してやらねば・・・。』

と、そこへ例の如く闇の僧侶・幻斎坊が現れ、白虎将軍に話し始めたのだった。

『相変わらずの策略家である白虎将軍が、そんな愚痴を零すとはのう・・・。』

『ふんっ、何が愚痴を零しているですって・・・。別に好きで愚痴を零している訳じゃないのよ。ところで、私に何か用があって来たんじゃないのかしら。』

『おお、そうだった。実は、玉梓様からの特命で、江戸の町全体に結界を張る様命ぜられたのだ・・・。』

『もしかしたら、「魔導結界陣」の事かしら・・・。』

『さすがは白虎将軍殿・・・、察しが早いですなあ。』

『玉梓様の御命令とあらば、この白虎將軍が江戸の町を闇に変えて見せるわ。』

すると白虎將軍は、江戸城の天守閣から魔導妖術を施し、江戸の町の四方八方に結界を張り巡らしていったのだった。

『これで光の八犬士であろうと、この結界を破る事は出来ないわ。』

『さすがは白虎將軍、術のキレもなかなかの物だな。』

『それ程でも無いわ……。それはそうと幻斎坊殿、最近光の八犬士の姿が見えない様だけど、いったい何処へ行ったのかしら……。』

『何でも光の八犬士は、蓬萊国へと向かっていった様子なのだが、そこから先は全く見当が付かない様だ。』

『そんな事はどうでもいいわ、例え光の八犬士が強くなるうとも、この闇の風使いである白虎將軍には敵う訳がないわ。』

『ほほほ……。なかなか頼もしいのう。だが、あまり自信過剰になり過ぎない様、常に気をつけられるがよかるうぞ。』

『その辺は抜き無いわ。伊達に冥獣四天王をやっている訳じゃないから、他の三人と一緒にしないで頂戴……。』

『全く気の短い奴だ……。だが、これだけは言っておく。例え結界が万が一破れたとしても、手加減せずに光の八犬士を抹殺するのだぞ。』

『承知したわ。万事、この白虎將軍に任せて頂戴……。』

『頼んだぞ……。』

一方その頃、蓬萊国から無事帰還した導節達は、天空神官である九尾の狐の案内で、急いで江戸に向かつていったのだが、途中妖怪の軍勢と出くわし、戦う羽目に遭ってしまったのであった。

「やいつ、邪魔をするな……。」

『へへへ……、此処から先は通す訳にはいかねんだよ。冥獣四天王の闇の風使い・白虎將軍様の命令で、貴様等を近づけるなどの御命令なんだよ。』

「ふざけるなつ、我等の邪魔をする者は、俺達天空八將神が相手になつてやるぜつ。」

『何つ、天空八將神だと……。貴様等、光の八犬士じゃないのか……。』

「そんな事はどうでもいい。闇の一族の妖怪である貴様に、我等天空八將神が成敗してやるから覚悟するがいい。」

『くつ、問答無用つてな訳だな……。仕方が無い、この妖怪・修羅魔神様が相手になつてやるぜつ。』

「皆、気合いを入れて行くぞつ。」

導師達の行く手を阻む妖怪・修羅魔神は、容赦無い攻撃を繰り広げていくのだが、導師達も今まで以上の力を発揮し、修羅魔神を追い込んでいったのだった。

『なかなかやるな、だがこれで終わりじゃないぞ。我が妖術の威力を見せてやるつ。』

すると修羅魔神は、印を結んで術を唱え、灼熱の炎の柱を導師達の周りを固めていった。

「しまった・・・、奴は灼熱の炎の柱を張り巡らしていったぞ。」

「このままじゃ焼け死んでしまうぜつ。」

「慌てるな、我々は天将楼の八賢者から授かった装束がある。こいつに護られている限りやられたりはしない・・・。」

「せやでつ、わい等は無敵の天空八将神やで。そんな炎の柱なんか、一気に消したるわいつ。」

「信乃、お前の得意な術であの炎の柱を消す事が出来るか・・・。」

「ええ、あの炎の柱ぐらいどうって事ありませんよ。」

「頼むぞ・・・。」

「分かりました、やってみます。」

早速信乃は印を結んで術を唱え、灼熱の炎の柱を消していこうとし

た。

「水を司りし天空の龍神・東海龍王とうかいりゅうおうよ、今此処に我が命令に従い、邪悪の炎を消し去り賜えっ……。」

すると、天空の彼方から水の守護神・東海龍王が姿を現し、大量の雨を降らしていきながら修羅魔神の放った炎の柱を一瞬のうちに消していったのである。

「よっしゃ、これで一気に逆転したぜっ。」

「これで形勢逆転だな、修羅魔神……。もはや、貴様の勝機は無くなったぞ。」

『うぬぬ……。ならば奥の手を使うしかあるまいな。』

「いったいどうするつもりだ……。」

「何だか、嫌な予感がします。」

修羅魔神は印を結んで術を唱え終わると、なんといきなり巨大化していったのである。

「な、なんやあれは……。」

「修羅魔神が巨大化していきやがったぞ。」

「あれじゃ全然勝ち目が無いぞ。」

「どうするんだよ、導師……。」

「どつすると言われても、あんなに巨大化したら、どつにもならない……。」

『ふはは……。どつだ、これで手も足も出まい……。』

「導節、何かいい知恵は無いのか……。」

「導節様……。」

『導節殿……。』

突然、修羅魔神が巨大化した事で窮地に立たされた天空八将神。

果たして、このピンチを切り抜ける事は出来るのだろうか……。

第拾九話に続く……。

突然巨大化してしまった修羅魔神を目の前に、どうする事も出来ない導節達は、ただ立ちすくむばかりだったのである。

「どうするんだよ。あんなにでかいのと戦ったら、間違い無くやられてしまうんだぞ。」

「落ち着けつ……。こうなったら、術を使って一気に仕留められない。」

「でもそんなので、修羅魔神を倒せるのかよ。」

「せやつ、やってみなきゃ分からへんやろ。」

「とにかく一か八かやってみるしかないな。」

すると導節達は、八方向から一斉に術を施し、打撃を与えようとしたのだが、巨大化した修羅魔神は全く打撃を受けていなかったのである。

『無駄だ、貴様等の術など痛くも痒くもないわ……。』

「駄目だっ、全く効いていないや。」

「どうするんだよ、これじゃ奴を倒すのは無理なんじゃないのか。」

「そんな事は無い、必ず何かいい方法がある筈だ……。」

「でも、どうやって修羅魔神を倒すって言ったんだ……。」

すると、導師はある方法を思いついたのだ。

「こうなったら、空中戦で戦うしかないな。」

「でも俺達は空を飛ぶ事すら出来ないんだぞ。それに、簡単に空を飛ぶなんて有り得ない話しだぞ……。」

「いや、不可能を可能にするのは我々天空八将神だ。とにかく信じる心があれば、必ず空を飛べる筈だ。」

「せやっ、導師はんの言う通りやで。信じる心があれば、誰でも飛ぶ事が出来るんや。」

「よしっ、やってみようぜ。」

導師達は心を一つにして、新たに覚えた空を飛ぶ呪文を唱え始めていったのであった。

『天空秘術・飛来舞空術……』

すると、導師達の身体が突然宙を浮かび上がり、空を自由自在に飛べる様になったのである。

「な、俺達空を飛んでいるのか……。」

「信じられないけど、本当に空を飛んでるぞ。」

「これで、修羅魔神と対等に戦えるぜ。」

『な、そんな馬鹿な……。奴等空を飛べるのか……。』

「つたりめえだろ。俺達を甘く見くびるんじゃないぞ。」

「どやっ、わい等ほんまに空を飛んでんねんで。これで、勝負は勝つたも同然や。」

『ふんっ、貴様等がどう挑もうと、状況的には我が有利な筈だ。例え空から応戦しようとも、こちらには強力な武器があるんだ。』

「それはどうか。……。強力な武器があるからって、必ずしも有利とは限らないぞ。」

「その通りだ、修羅魔神。我々は決して負けはしないんだ。」

「行くぜっ、我等天空八将神の力を思い知るがいい……。」

そう言つて導節達は、再び修羅魔神に攻撃を仕掛けていき、四方八方から攻撃技や術を駆使しながらやつつけていくのだった。

暫くして、修羅魔神は窮地に追い込まれ、遂には導節達にこう話していった。

『天空八将神よ、我はもう戦いはしたくない。心を入れ替えて闇の一族に反旗を翻そうと思っている。』

「どう言う事だ。闇の一族に反旗を翻すって……。」

『我はかつて天空十二神の一人・東岳大帝と名乗っていた。ところがある日、闇の風使い・白虎將軍に妖術を掛けられ、それ以来ずっと自らを修羅魔神と名乗り、悪事の限りを尽くしていった……』

「ところが、そのあんたが闇の一族を裏切ると云う訳だな。」

『あの闇の風使い・白虎將軍のやり方は、あまりにも卑劣過ぎる。これまでに、幾多の悪事を重ねて来た闇の一族を許す訳にはいかならないからな。』

「随分と闇の一族に恨みがある様だな。」

「せやかて、あんな奴の信用なんか出来るかいな。」

「いやっ、修羅魔神の言っている事は嘘ではないらしいぞ。それに、修羅魔神は天空十二神だった事は事実だからな。」

「九尾の狐よ、あの者は確かに天空十二神だったのか……。」

『ええ、姿形は妖怪の姿をしています。間違はなく天空十二神の一人・東岳大帝殿に間違いありません。』

『どうやら、信じてくれたみたいだな。』

「では、改めて東岳大帝殿と呼ばせて頂こう。」

『ああ、そうしてくれ。我の知っている限りの事を話そう。』

「東岳大帝殿、江戸の町でいったい何が起きているのだ。」

『今、江戸の町には行ってはいけない……。』

「どう言う事だ……。いったい江戸の町に行ってはいけないって……。。」

『今、江戸の町は白虎將軍が施した妖術・魔導結界陣が張られている。』

「魔導結界陣……。。」

「何か厄介な事になって来たな。でも何の為に結界を張ったんだ。」

「そんなの決まっているだろ、俺達の邪魔をする為さ。」

「でも、どうやって結界を破壊するかだよな。」

『それなら方法がある。でも、そう簡単には結界を破壊する事は出来ないぞ……。』

「……。よしつ、とにかく江戸の町へ行ってみよう。結界を破壊する方法はそれからだ。」

暫くして、導節達と東岳大帝は急いで江戸の町まで辿り着いたのだが、時既に遅し……。

江戸八百八町は元より、江戸城の周りまで結界が張り巡らされていたのであった。

「くっ、これじゃどうにもならないな……。」

「こんなに結界が張られていたんじゃ、侵入する事すら出来やしな
いじゃないか。」

「なあ、何かいい方法は無いのか……。」

「そう慌てるな、あの結界をどう破壊するかだな……。」

導節が結界を破壊する方法を考えていたその時、突然毛野が、「わ
いにいい考えてがあるぞ。」と話していったのだった。

「毛野、何かいい知恵でも浮かんだのか。」

「ああ、わいの飛翔丸であの江戸城の天守閣まで近付き、結界を破
壊したるねん。」

「そうか、それだったら結界を張った奴を一気に攻めれば……。」

「江戸の町に張られていた結界は解かれると言う訳だ……。」

「ああ、万事わいに任せなはれ。」

早速毛野は、飛翔丸を呼び寄せる道具である、角笛つのぶえを吹き始めた。

すると、東の空から大きな龍が現れ、毛野の傍までやってきたので
ある。

『ぐおおお~~~~~』

「よう来たな、飛翔丸。これで一気に天守閣までひとつ飛びやで。」

「頼むぞっ、毛野。」

毛野は飛翔丸に跨がり、颯爽と江戸城上空まで上昇していったのだ。

「あとは、結界が解除されるのを待つだけだな……。」

「ところで東岳大帝殿、闇の風使い・白虎將軍はいつたい何故結界を張っていったんだ。」

『恐らく、白虎將軍は江戸城を中心に、魔の都を造り上げるつもりでいるらしい。』

「白虎將軍め……。」

「とにかく、毛野が結界を破壊してくれる事を祈るしかないな。」

丁度同じ頃、江戸城上空を飛んでいる毛野は、結界が何処から発しているか、探索を続けていたのだが、未だにその元凶が見つからず難航が続いたのである。

「いつたい何処から結界を張っているんねん。これじゃ全く分からへんやんか。」

と、その時だ。

江戸城の天守閣付近に何やら怪しい物体が城の四方に配置されてお

り、毛野は一つずつ破壊していくのだった。

「よっしゃ、これで江戸城に進む事が出来るでえ。」

しかし、結界を破壊したのも束の間、突然天守閣から怪光線が毛野を直撃し、真つ逆さまに急降下していったが、間一髪で難を逃れる事が出来たのだ。

「大丈夫か……。」

「わいは大丈夫や。そんな事より、結界は破壊されたで。これで、江戸城に入る事が出来る様になったで。」

「よくやった、毛野。」

「しかし、あの怪光線はいつたい……。」

『あれは、白虎將軍が放った魔導光線と思われませう。』

「くそつ、白虎將軍め。よくも毛野を……。」

「こうなったら、一気に攻めるしかないな。」

「導師様、我々には天空界の王・元始天尊様に護られているんだ。何も恐れる事は無い……。」

「せやつ、わい等は絶対に負ける訳にはいかんのや。何が何でも勝たなあかんのやで。」

「毛野もこう言っているんだ。皆で力を合わせて、闇の風使い・白

虎將軍を倒すぞつ。」

『おお〜〜つ。』

一方、江戸城の天守閣では、闇の風使い・白虎將軍は結界を破壊されてしまい、次なる作戦を講じるのであった。

『遂に来たわね、光の八犬士が……。だけど、結界を破壊したところで、そう簡単には辿り着けないわよ。さあ、無事この城の天守閣に辿り着けるかしら……。』

『申し上げます。』

『何事かしら。』

『はっ、たった今光の八犬士がもうすぐこの城に近付いて参ります。』

『そんな事は既に想定済みよ……。それで、奴等はどの辺まで来ているの。』

『はっ、半蔵門を通過し……。江戸城の西門辺りまで迫っている様子にございます。』

『もうそこまで奴等は来ているのね……。だったら、あの手を使わうしか無いわね。見てらっしゃい、光の八犬士達……。此処からが貴方達の最後となる罠を仕掛けてあげるから覚悟なさい。』

その頃、導師達は白虎將軍が罠を張った事に気付かず、江戸城へと

向かっていたのだ。

「ちょっと待てっ、何だか様子が変わだぞ。」

突然導節が他の犬士達を足止めし、話しを切り出したのである。

「どうした、導節。」

「いったい何があったんだよ。」

「ちょっと様子が可笑しいんだ。」

「どう言う事だよ。」

「こいつはどうも出来過ぎている様な気がしてならないんだ。」

「まさか、白虎將軍が仕掛けた罠だと言うのか……。」

「冷静になって考えてみる。いかにも江戸城に入ってくれって言っている様なもんだろう。」

「もしそうだとしても、白虎將軍は俺達を罠に嵌める余裕は無い筈だろ……。」

「……こうなったら、二手に分かれて江戸城に潜入するしかないさそうだ。」

「信乃、現八、大角は私と一緒に東から潜入する。新兵衛、小文吾、毛野、莊助の四人は西から攻めるんだ。」

「ばつちり任せておけ。俺達四人で、奴等を攪乱させて見せるぜつ。」

『私は早速、この事を元始天尊様に報告致します。』

「ああ、頼むぞ。皆、手筈通りに作戦を実行する。決して失敗は許されないぞ。」

「了解つ。天守閣で逢おうぜつ。」

導師、信乃、現八、大角の四人は、江戸城の東側から、新兵衛、小文吾、毛野、莊助の四人は西側からそれぞれ二手に分かれて挟み打ち作戦を実行する事になった。

『とうとう此処まで来た様だな、光の八犬士。』

「ちっ、こんなところに妖怪が潜んでいたとはな……。」

「けど、俺達に逢ったのが運のツキだった様だな。」

「せやで、わい等が束になって掛かれば、貴様なんか一発で倒したるわいつ。」

「さあ、覚悟するんだな。我等天空八将神の力を見せてやる。」

『ふっ、たった四人で我に挑もうと言うのか……。面白い……。この魔導妖怪・土蜘蛛が相手になってやる。』

するといきなり、魔導妖怪・土蜘蛛が口から糸を吐き、新兵衛、小

文吾、毛野、莊助の四人に攻撃を仕掛けていくが、四人はひらりと避けていき反撃を開始したのである。

「それでも喰らえっ、天空秘術・虚空雷鳴破っ……。」

「天空秘剣・波動烈火斬！」

「天空秘伝・八野はっけい乃術。」

「天空臨技・武雷たけがら翔龍しやうりゆう霸。」

四人はそれぞれの必殺技や術を屈指し、魔導妖怪・土蜘蛛に大打撃を与えていったのであった。

『ぐぐぐ……、もう勘弁ならん。こうなったら、貴様等を纏めて始末してやるっ。』

魔導妖怪・土蜘蛛は再び口から糸を吐き、今までの倍以上の強力な粘着力の糸が、新兵衛達にまとわり付いていくのであった。

「しまった……。」

「なんや、身体が動かへんわ。」

「こいつを何とかしないと、抜け出す事は出来ないぞ。」

「だけど、この粘着力は半端じゃないぞ。いったいどうやって抜け出すか……。」

『無駄だ、私の吐き出した糸はそう簡単には離れぬぞ。さあ、もっ』

と締め付けてやるから、もがき苦しむがいい……。』

もはや窮地に立たされた新兵衛、小文吾、毛野、莊助の四人。

魔導妖怪・土蜘蛛の卑劣な攻撃に、為す術も無かった。

果たして、新兵衛達の運命やいかに……。

第貳拾話に続く……。

魔導妖怪・土蜘蛛に苦戦を強いられていた新兵衛達は、強力な粘着力のある呪いの糸の餌食となってしまうたのだ。

だが、新兵衛達は決して最後まで諦める事なく、脱出の機会を待っていたのである。

「あかんっ、動けば動く程余計に締め付けられてまうわ。」

「新兵衛、何とかならないのか……。」

「そんな事を言われても、どうにもなりませんよ。」

「しかし、どうやって此処を抜け出すかを考えましょう。」

『ふふふ……、何度やっても無駄だ。動けば動く程貴様等は我が呪縛の糸に因って締め付けられていくのだからな。』

もはや諦め掛けていたその時、突然新兵衛達の懐に忍ばせていた八大童子の宝玉がまばゆい光を放ち、魔導妖怪・土蜘蛛を目眩ませ、その隙に呪縛の糸を切り離していったのだ。

「これで、自由の身になったぜっ。」

「うっ、一時はどうなるかと思ったけど、何とか抜け出す事が出来たな……。」

「なんや、けつたいな事になってもうたけど、やっと自由になったで。」

「もう勘弁ならぬぜつ、魔導妖怪・土蜘蛛。」

『くつ、まさか簡単に我が呪縛の糸を打ち破ってしまうとは・・・』

「さて、どう始末しようかな。」

「あんな目に合わせたんだからな、倍にして仕返ししてやるぜ。」

「せやで、貴様なんかわい等が始末したるさかいな。」

「こうなったら、変身して戦うしかないぞ。」

『おお～～～っ。』

新兵衛、小文吾、毛野、莊助の四人は、それぞれ印を結んで呪文を唱え始めた。

『天空を司りし八大守護神よ、今こそ我等にその力を授け賜え。天空変身・八将神変化っ。』

すると、新兵衛、小文吾、毛野、莊助の四人が金色の光に包まれ、光の戦士・天空八将神に変身したのだった。

『な、何っ。まさかあの伝説の戦士・天空八将神だと・・・。』

「その通り、天空八将神に変身してしまえばこっちのモンだぜ。」

「どやっ、これが本当の姿やで。」

「天下無敵の八将神の登場だぜ。」

「さあ、魔導妖怪・土蜘蛛。勝負かこれからだぜっ、だが今度は同じ手は通用しないから覚悟しなっ。」

『ふんっ、変身したぐらいで我を倒せるとも思ってたか。だったら、もう一度勝負してやる。どれだけの物が見させて貰おうか。』

再び魔導妖怪・土蜘蛛は、口から呪縛の糸を吐き新兵衛達を攻撃しようとしたが、ひらりと身を避けながら魔導妖怪・土蜘蛛に攻撃を仕掛けていくのだった。

「破あ~~~~っ。」

新兵衛が果敢に魔導妖怪・土蜘蛛に挑み、更に小文吾、毛野、莊助が続げざまに攻撃を仕掛けていったのである。

『お、おのれ小賢しい奴等め……。こうなったら、貴様等を地獄へ道連れにしてやるっ。』

「そうはさせへんで、地獄に行くのは魔導妖怪・土蜘蛛……。貴様の方やで。」

「その通りだぜ。もう貴様に猶予は無いんだからな。」

「今までの我等とは格段に違うんだ。」

「潔く我等の裁きを受けるがいい……。」

遂に新兵衛達は、魔導妖怪・土蜘蛛にとどめの一撃を刺していくのであった。

『天空秘剣・四神龍虎斬！』
しんりゅうこげん

新兵衛、小文吾、毛野、莊助の四人の合体技『四神龍虎斬』が炸裂し、魔導妖怪・土蜘蛛は遂に撃破されてしまうのであった。

「これで何とか先に進む事が出来るぞ。」

「それよりも、導節様達は無事天守閣に着いたのでしょうか。」

「さあな、導節様達も恐らく同じ事が起きているのかも知れないぞ。」

「なんや嫌な予感がしてしゃあないねん。」

「どう言う事だよ、毛野……。」

「導節はんの身に、何か悪い事が起きる様な気がするんや。」

「それはちょっとヤバイんじゃないか。」

「急いで導節様達のところまで行こう。」

「ああ、そうしよう。」

一方その頃、江戸城の東側に向かっていた導節、現八、信乃、大角の四人は、あと一步のところまで魔導妖怪・火車かしゃが現れ、導節達の行く手を阻んでいった。

『待っていたぞ、光の八犬士達よ。』

「てめえは、魔導妖怪・火車……。」

「なんでこんなところに……。」

『貴様等が此処へ来る事ぐらい、先刻承知していたのさ。特に、犬山導節にはな……。』

「導節、何か心当たりは無いのか……。」

「……はっ、まさか貴様あの時の……。」

『どうやら覚えていた様だな、犬山導節。だが、あの時は不覚を取ってしまったが、この次は貴様の命を頂く……。』

「魔導妖怪・火車、貴様だけは絶対許さない。」

「導節、こんな奴なんか一発で倒しちまおうぜ……。」

「待てっ、奴を侮ってはいけない。奴は地獄の炎を操る、とんでもない妖怪だ。」

『何をごちゃごちゃ言っているんだ。こうなったら、そこにいる奴

から始末してやるっ。』

「そうはさせるかっ。」

すかさず導節は、必死に庇おうとするのだが、魔導妖怪・火車の卑劣な攻撃に因って負傷してしまうのであった。

「導節っ……。」

「しっかりしろっ。」

「くそっ、魔導妖怪・火車め……。」

「いいか、奴には手を出すな。これは命令だ……。」

「しかし……。」

「俺の言う事が聞けないのか……。」

「……分かった。」

『どうやら観念した様だな、犬山導節。望み通り、貴様の命を貰うぞ。』

しかし、導節は不敵な笑みを浮かべながら魔導妖怪・火車を睨みつけていたのだった。

「魔導妖怪・火車よ、貴様に命を奪われるくらいなら、例えどんな事があっても仲間を守るっ。」

『無駄な事を・・・、何が仲間を守るだ。所詮人間と言う生き物は、
下等動物に過ぎないんだよ・・・。』

「もう一度言ってみる・・・。」

『何度でも言ってる。人間は我等魔導妖怪に殺されてしまえばい
いんだよ。』

「き、貴様・・・。」

導節の怒りが爆発し、単独で魔導妖怪・火車に戦い挑もうとしてい
た。

「貴様だけは、絶対に許さない・・・。あの時に起きた記憶が甦っ
て来たぜっ。」

『ふんっ、だったらどうすると言うのだ。その身体では、到底我に
敵う訳がなかるう・・・。』

「だったら、命を賭けてでも貴様だけは必ず倒す・・・。」

「導節、無理をするな。その身体では、余計に蝕んでしまうだけだ
ぞ。」

「俺の事は心配するな、絶対に奴を倒してみせるさ・・・。」

「だけど・・・。」

「現八、信乃、大角、後は頼んだぞ・・・。」

「導節つ……。」

魔導妖怪・火車の攻撃を受けたのにも拘わらず、なお戦い挑もうとしていた導節だったが、魔導妖怪・火車は更に攻撃を続けていったのである。

「どうやら早死にしたいらしいな……。ならば、貴様の望み通り……地獄へ送ってやる。」

魔導妖怪・火車が導節に向かって地獄の炎を放ち、あわやこれまでかと思われたその時、導節の身体がまばゆい金色の光を輝かせ、魔導妖怪・火車の地獄の炎を跳ね返したのである。

「そ、そんな馬鹿な……。あの炎を跳ね返すとは……。」

「だから言った筈だ、俺は絶対貴様を許さないとな……。」

「導節……、何とも無いのか。」

「ああ、こいつのお陰で助かったからな。」

「それより、奴を倒す方法は無いか。」

「奴は生半可な攻撃は一切通じない。こうなったら、変身して戦うしかない。」

「もしかしたら、天空変身か……。」

「ああ。そうでなければ、奴に勝てないからな……。」

「そうと決まれば、急いで変身だつ。」

早速導節達は急いで印を結び、呪文を唱えながら天空変身を施していったのだつた。

『天空を司りし八大守護神よ、今こそ我等にその力を授け賜え。天空変身・八将神変化つ。』

導節、現八、信乃、大角の四人は、金色の光に包まれながら天空八将神に変身していったのであつた。

『そ、その姿は……。もしや噂に聞く、伝説の戦士・天空八将神。』

「その通りだ、我等は伝説の戦士・天空八将神……。」

「魔導妖怪・火車、てめえだけは絶対に許さないぜ。」

『くつ、どうやら厄介な事になってしまったみたいだな。』

魔導妖怪・火車は、地獄の炎で身を隠そうとしたのだが、導節達は一瞬の隙を突いて一斉攻撃を仕掛けていったのである。

「潔く天の裁きを受けやがれつ。」

『ふんつ、そう簡単に裁かれてたまるかつ。』

「ならば仕方があるまい、我等天空八将神の力を思い知るがいい。」

すると導節達は、四方向から一気に攻める攻撃で、魔導妖怪・火車

を追い詰めていくのだった。

だが、魔導妖怪・火車をあと一步のところまで逃してしまつたのであつた。

『ははは．．．、残念だつたな．．．天空八将神の諸君。』

「魔導妖怪・火車、逃がすものか．．．。」

『今日のところは引き上げるが、この次逢う時は貴様等を始末してやるから覚悟するがいい．．．。』

そう言つて、魔導妖怪・火車は炎に包まれながらその場から姿を消していったのだ。

「くそつ、あともう少しで奴を倒せたのになあ．．．。」

「仕方ないよ、奴は確かに強いが、深追いは禁物だからな。」

「導師．．．、何だか浮かない顔をしているみたいだが、何かあつたのか．．．。」

「．．．いや、別に何でも無い。」

「そうか．．．。」

「それよりも、急いで天守閣に行こう。新兵衛達の事が気になるからな．．．。」

「四人とも無事でいるといいのだが．．．。」

暫くして、導節達は西側からやって来た新兵衛達と合流し、江戸城の天守閣へと向かっていった。

「ついに来てしまったな……。」

「この城の天守閣に、闇の風使い・白虎將軍がいるんだな。」

「みんな、油断するなよ。奴はどんな罫を仕掛けてくるのか……。」

「なんや、めっちゃ緊張してきたわ。」

「私も、何だか震えて来ました……。」

「毛野、莊助、大丈夫だ。誰でも緊張はするもんだ。気を引き締めて行くぞっ。」

いよいよ、導節達は江戸城に突入し、目指すは最上階の天守閣……。

途中、行く手を遮る魔物の妨害を切り抜け、遂に天守閣に辿り着いたのであった。

『遂に此処まで来た様だね、天空八将神の皆さん……。』

「闇の風使い・白虎將軍……。」

「あれが、冥獣四天王第三の刺客なのか……。何だか、恐ろしい妖気を漂わせている感じが気になりますね。」

「でも、此処で戦わないと、闇の大魔獣が復活するんやで。」

「だったら、一気に決着をつけるしかないだろ……。」

『それは無理よ。何故ならば、この城の天守閣にはもう一つの結界が張り巡らされているからだわ……。』

「何だつて……。」

「どう言う事だ、白虎將軍。」

『この天守閣は、貴様等の術や必殺技を全て封じた。つまり、此処ではどんな手をおおうと、我を倒す事は出来ないのよ……。』

「どうする、導師。」

「仕方がないさ、術や必殺技が使えないんじゃ、力技ちからわざで戦うしかないだろ。」

「そうとも、導師の言う通りだ。術や必殺技が使えなくても、力尽くで戦つてやるぜつ。」

『ほほ……。果たしてこの白虎將軍を倒せるかしら……。倒された朱雀將軍や、玄武將軍とは格が違うのよ。さあ、掛かってらっしゃい。』

遂に始まった天空八将神対闇の風使い・白虎將軍との戦いが、幕を

開けようとしていた。

術や必殺技が使えない状況に陥った導師達は、満身の力を振り絞りながら白虎將軍に戦い挑むのであった。

「これでも喰らいやがれっ、白虎將軍っ。」

現八が果敢に戦い挑み、続けざまに小文吾、毛野、大角の四人が一斉に攻撃を仕掛けるが、逆に白虎將軍が手に持っていた芭蕉扇で四人を吹き飛ばしていったのだった。

『うわ~~~~っ。』

『ほほほ……、他愛も無いわね。それが、天空八将神の力なのかしら……。』

「ちつくしよ、全く齒が立たないや。」

「あの芭蕉扇のせいで、近づく事すら出来ないぞ……。」

「くそっ、術さえ使えたら……。」

『いい加減に諦めたらどうなの。貴方達は今もどつどもならないのよ。』

「万事休すか……。」

窮地に追い込まれた導師達は、白虎將軍の卑劣な攻撃に手も足も出ない状況に陥ってしまった。

果たして、この窮地を脱出する事が出来るのだろうか・・・。

第貳拾壹話に続く・・・。

冥獸四天王の一人、闇の風使い・白虎將軍の卑劣な攻撃に、窮地に追い込まれた導節達は、どうする事も出来ずにいたのだが、秘そかに反撃の機会を伺っていたのである。

「くそつ、術さえ使えたら・・・。」

「この状況じゃ、奴を倒すのは無理みたいだな・・・。」

「いや、必ず打開策が見つかる筈だ。そうでもしなきゃ、絶対奴には勝てないぞ。」

「せやで、あんなに使われたら、どうにもならへんで。」

「術や必殺技が封じられている今、どうやって奴を倒すかだよな。」

「でも何処かに、結界を破壊するカラクリを暴かないと・・・。」

「導節、何かいい解決策は無いのか・・・。」

「奴の張り巡らした結界を破壊する方法があれば、我々の術や必殺技が使えるんだが・・・。」

と、その時だ。

導節はある異変に気付き始めた。

天守閣の奥に鎮座されている怪しげな仏像から、目に見えない結界

が縦横無尽に張り巡らしている事に気付いたのだった。

「そうかつ、全ての謎が解けたぞ。あの仏像から目に見えない結界を張り巡らしていて、俺達の術や必殺技を封じていたんだ。」

「そうと分かれば、こんなもん破壊してやるぜっ。」

『そうはさせないわよ。その結界の像は、何が何でも阻止してやるわ。』

闇の風使い・白虎將軍が結界の像を破壊されまいと、導節達を阻止しようとしたのだが、ほんの一瞬のうちに結界の像を現八と大角の二人が破壊していったのである。

「よっしゃ、これで術が使える様になったぜ……。」

「俺の必殺技も、なんとか取り戻す事が出来たぞ……。」

「闇の風使い・白虎將軍、これでお互い五分五分になった訳だ。」

『それはどうか……。結界を破壊したくらいで、形勢が逆転した訳では無いわよ。』

「どう言っ事だ……。確かにあの像は破壊した筈。それなのに、何故……。」

『さあ、そんな事よりそろそろ決着をつけようじゃないの。どちらが勝つか……勝負よ。』

すると白虎將軍は、芭蕉扇を一仰ぎすると巨大な竜巻を起こし、一瞬にして導節達を吹き飛ばしていくが、すぐさま導節達は体制を整えて反撃を開始した。

「術さえ使えればこっちのもんだぜつ。喰らえつ、天空秘術・爆雷烈火弾つ。」

信乃が天空秘術・爆雷烈火弾を放つと、咄嗟に白虎將軍が芭蕉扇で弾き返し、逆に信乃のところへ術の威力で打撃を受けてしまうのであった。

「ならばこれでも喰らえつ、天空秘剣・龍虎爆裂斬。」

現八の天空秘剣である龍虎爆裂斬が炸裂していくのだが、またしても白虎將軍が芭蕉扇で弾き返し、現八は自ら放った必殺剣で打撃を受けてしまうのである。

『だから言っただじゃないの……。何度やってもこの私に打撃を与える事は出来ないって……。もう、いい加減に諦めたらどうなのよ。』

「うるせえ、絶対諦めるものか……。」

「せやっ、わい等がそう簡単に諦める訳ないやろ。」

「どんな事があっても、我等天空八将神は貴様等を絶対に許さない。」

『絶対に許さないうすって……。我は完璧主義な妖魔、どんな卑劣な手を使おうと、決して妥協はしないのよ。』

「だったら、その妥協を崩してやるぜっ。」

小文吾が果敢に白虎將軍に戦い挑むも、巨大な芭蕉扇で小文吾を吹き飛ばしていくのであった。

『もはや、貴様等に勝機は無くなった。潔く我が術で死に絶えるがよからうぞ。』

「このまま遣られて堪るものか……。こうなったら、天空変身で戦うしかない。」

「よしっ、みんな変身だ……。」

すると導師達は、急いで変身の呪文を唱え、天空八将神に姿を変えていったのだった。

『遂に本当の姿を現した様ね、伝説の戦士・天空八将神。』

「変身してしまえば、こっちのもんだぜ。」

「俺達の真の力を見せてやるっ。」

「覚悟するんやな、白虎將軍……。」

『くうく、なんて生意気な事を言う連中かしら……。もう、勘弁ならないわ。こうなったら、纏めて始末してあげるわ……。』

いよいよ始まった最終決戦……。

闇の風使い・白虎將軍は巨大な芭蕉扇を自在に操り、導節達に目掛けて竜巻を起こし攻撃をしていくが、導節達は既に白虎將軍の行動を完全に読み切り、果敢に挑んでいくのであった。

「喰らえつ、天空秘剣・爆龍烈火斬！」

「天空秘術・雷鳴轟々破つ。」

信乃の必殺剣である爆龍烈火斬と、莊助の必殺技である雷鳴轟々破が白虎將軍に命中し、更に現八、毛野、大角、導節、小文吾、新兵衛の六人が続けざまに得意の必殺技や術で白虎將軍を窮地に追い込んでいったのだ。

「なかなかやるわね、だが我の本当の力を見せてあげるわ。」

「何っ。」

「あれだけ遣られているのに、まだ魔力が残っているとは……。」

「さあ、潔く地獄へ送ってあげるわ。」

白虎將軍が芭蕉扇で再び巨大な竜巻で導節達を滅ぼそうとしたその時、導節達の懐に忍ばせていた八大童子の宝玉がまばゆい光を放ち、導節達を包み込むかの様に護られていくのである。

「な、何っ。我が術を遮つただと……。」

「八大童子が、俺達を護ってくれたのか。」

「めっちゃ助かったわ。これで、心置きなく戦えるで。」

「闇の風使い・白虎將軍、今度こそてめえを叩き潰してやるから覚悟しろつ。」

遂に導節達は、最後の手段である必殺技・天空八卦陣を繰り出し、闇の風使い・白虎將軍は苦悶の声を上げながら消滅していくのであった。

「遂にやったな、導節……。」

「残るは、闇の妖術師・青龍將軍。」

「奴を倒せば、冥獣四天王を全滅した事になる……。」

「と、同時に闇の大魔獣・怪魔将牙神が復活する……。」

「どちらも、避けられないと言う事なのか……。」

「みんな、諦めたらあかん。せつかく此処まで戦って来たんや。最後まで諦めずに、戦おうやないか。」

「そうだつ、毛野の言う通りだ。人間界を護るのが、俺達の役目じゃないのか。」

「例え、我等が命を失おうとも、最後まで闇の一族と戦うぞ。」

と、突然江戸城上空が真っ暗闇になり、何処からか甲高い声が導節達の耳に届いたのである。

『お初にお目に掛かる、我は闇の一族の首領・幻魔城城主・玉梓で

ある……。」

「あれが、闇の一族の首領・玉梓か……。」

「何か、もの凄い邪気を感じるぜっ。」

『光の八犬士……、いや、天空八将神よ。冥獣四天王を三人倒したみたいだが、最後の一人である闇の妖術師・青龍将軍が控えているぞよ。』

「そんな事ぐらい分かっている。」

「我等は決して、闇の妖術師・青龍将軍には負ける訳にはいかないんだ……。」

『ほほほ……、なかなか威勢がいいわね。けど、どちらにしても避けられない運命にあるのじゃ。まあ、せいぜい頑張るがよからうぞ。』

「待てっ、玉梓……。逃がすものかつ。」

しかし、玉梓はいずこかへ消え去り、暫くして上空が明るくなっていったのである。

「くそっ、玉梓め。」

「まさか、あんなところで逢うとはな……。」

「おいつ、導節。奴に逢った事があるのか。」

「ああ、無限回廊を探索していた時、偶然玉梓が封印していた柩を見つけたんだ。姿は見なかったけど、あれは間違い無く悪霊・玉梓の声だった……。」

「けど、あんなのが出て来たら、どうにもならへんで。」

「大丈夫だよ、俺達には元始天尊様がついているんだ。」

「そっだよ、何も恐れる事は無いよ。」

「よし、此処まで来たら後には引けないんだ。とことん最後まで戦おうぜ。」

「おいつ、あれを覚えてみるよ。」

現八は南東の方角からやって来る白獅子に跨がった黄金の鎧を身に纏った天空戦士を目撃したのである。

「まさかつ、闇の一族の手先か……。」

「いやっ、あれは違うぞ。恐らく、我等の味方に違いない……。」

暫くして、黄金の鎧を身に纏った天空戦士が導節達の前に姿を現し、天空界の守護神・封雷元帥ほうらいげんすいが導節達を「雷界殿らいかいでん」に連れて来る様命じたと言うのだ。

『もしや、貴方達は天空八将神の方々ですね。』

「ああ、いかにも我々は天空八将神だが……。そう言うお主はいったい……。」

『申し遅れました、我は天空界の守護神・封雷元帥様に仕える天空戦士・趙遼紫龍ちやうしやうしじゆうと申す者でございます。』

「その趙遼紫龍殿が、我々にどんな御用で参られたのか……。」

『我の主である、封雷元帥様の命に因り、天空八将神の皆さんをお連れする様にこの事にございます。』

「俺達を、雷界殿へ連れてってくれると云うのか……。」

「何か、訳ありの様やけど……行ってみる価値はありそうやで。」

「趙遼殿、封雷元帥様のところへ案内してくれっ……。」

『分かりました。では早速、封雷元帥様のところへ案内致しますので、こちらの絨毯にお乗り下さい。』

そう言つて、趙遼紫龍は大きな真紅の絨毯を拡げ、導節達はその絨毯の上に乗っていくと、すくっと空中に浮かび上がり、そのまま趙遼紫龍と共に雷界殿へと向かっていった。

あれから、どのくらいの時間が経過したのだろうか。

導節達がいた人間界から遙か十万八千里離れたところにある幻想的な宮殿・雷界殿が目の前まで迫って来たのだった。

「あれが、雷界殿なのか……。」

「何か、凄いところへ来てしまった様な気がする……。」

「それにしても、随分荘厳な宮殿だな。」

「あの中に、封雷元帥様がいるのか……。」

「いったい、どんな神様なんやらなあ。」

「何だか、緊張してきましたよ。」

「導節様……、いよいよ封雷元帥様に逢えるんですね。」

「ああ、俺も段々緊張して来たみたいだ……。みんな、気を引き締めて行くぞ。」

『皆さん、もうすぐ雷界殿に到着します。此処から先は、神聖な場所なので、失礼の無い様をお願いしますね。』

「分かりました。」

暫くして、導節達は雷界殿に到着し、趙遼紫龍が雷界殿の扉を開け、宮殿の奥へ進んで行く、目の前の玉座に座っている雷界殿の主・封雷元帥が導節達を迎え入れたのである。

『よくぞ参られた、天空八将神達よ。我はこの雷界殿の主・封雷元帥と申す……。』

「お初にお目に掛かります。私は、天空八将神の一人・犬山導節と申します。此処に控えていますは、私の同志達にございます。」

『左様か・・・、お主達の活躍ぶりをこの水晶玉で見させて貰った。』

「ところで封雷元帥様、我々をこの雷界殿に呼んだのは、何やら重要な話があると見受け致しますが・・・。」

『さすがは犬山導師殿・・・。実は今から十年前に、雷界殿の宝物蔵から「太極破斬剣」と云う聖剣が何者かに盗まれてしまったのだ。』

「その太極破斬剣とは、いったいどんな代物なのですか。」

『太極破斬剣とは、かつて闇の大魔獣・怪魔将牙神を倒したとされる聖剣の事。その聖剣が盗まれた今、この雷界殿に非常事態を招いているのだ・・・。』

「それで、その太極破斬剣を盗んだ犯人は誰なんですか・・・。」

『さあ、我にも全く見当がつかぬ・・・。とにかく、一刻も早く太極破斬剣を取り戻さないと・・・。』

「まさか、冥獣四天王が拘わっているって事は無いよな。」

「仮にそうだとしても、奴等が盗んだと云う証拠が無いじゃないか。」

「うーん、そいつは困ったな。」

「どうするよ、導師。絶対奴等が盗んだに違いないぜ。」

「せやでっ、闇の一族の連中の仕業に違いないっちゆうねん。」

「……よしっ、俺達が太極破斬剣を取り戻してみせるっ。」

『導節殿、それは本当か……』

「ええ、例え盗んだ奴が誰であろうと、我等天空八将神が必ず取り戻してみせます。」

『おお、何とも頼もしい事を……。では、全てそなた達に託す。頼んだぞ、天空八将神よ……』

「分かりました、万事お任せの程を……。」

奪われた太極破斬剣を取り戻すべく、雷界殿の主・封雷元帥の命令を受けた導節等天空八将神は、果たして無事取り戻す事が出来るのだろうか……。

更に、太極破斬剣を盗んだのは、いったい誰なのか……。

第貳拾貳話に続く……。

第貳拾貳話 冥獸四天王篇 第拾參部 悪魔の樹海

その頃、幻魔城では城主である玉梓は、これまで三人の冥獸四天王を滅ぼされ、その魂を怪魔将牙神の像に宿していったのである。

しかし、玉梓もそう簡単には黙ってはいなかった……。

残された手札は、冥獸四天王最後の一人である闇の妖術師・青龍將軍を玉梓は呼び寄せていたのである。

『闇の妖術師・青龍將軍よ、もはやお主だけになってしもうた様子やな……。』

『御意……。しかしながら、奴等はこれまでに朱雀將軍、玄武將軍、更に白虎將軍まで滅ぼされたんだ。このまま引き下がる訳にはいかぬ。』

『相変わらず気性の荒い奴じゃな……。ん、お主の腰に携えているその剣は……。』

『ああ、こいつはと或る所から頂戴した太極破斬剣と云う聖剣らしいんだ……。』

『ほう……。なかなかの代物ではないか。』

『こいつさえあれば、いかに天空八将神であろうと、敵う筈もあるまい……。』

『ところで青龍將軍よ、もっと強くなりたいと思わぬか……。』

『ああ、もつと強くなって、天空八将神をぶちのめしてやる……』

『ならば、これを持っていくがよからう……。そいつは「時空魔鏡」と云って、相手にその鏡を向けると、一瞬にして鏡に吸い込まれ、過去の世界に飛ばす魔鏡なのじゃ。』

『この鏡を使えば、奴等は過去の世界に飛ばされ、その隙に我は悪さをし放題つてな訳だ。』

『それから、万が一に備えてこいつを持っていくがいい……。』

そう言つて玉梓は、懐から銀色の丸薬を青龍将軍に手渡したのである。

『そいつは「妖幻丹」と言つて、それを飲めば、たちどころに力が増幅する丸薬じゃ……。』

『この二つさえあれば、奴等を一気に倒す事が出来る……。』

『では青龍将軍よ、早速奴等を追跡し、全滅させるのじゃ。』

『万事承知致しました、必ずや天空八将神の連中を始末してご覧にいれましようぞ。』

一方、時を遡る事半時前、雷界殿から盗まれた聖剣・太極破斬剣を探す事になった導節達は、一路南西の方角にある《翔風殿》へと向かっていた。

「導節様、何故翔風殿に行かれるのですか。」

「何でも翔風殿には、風の神・鳳扇元帥様ほうせんげんすいが住んでいると云う噂を聞いた事がある。」

「でも鳳扇元帥様は、あまり姿を見せないのです……。」

「なんで、姿を見せへんのやろか。」

「そうだよ、姿を見せないって言うのが、何だか気になるんだよな。」

「導節、その鳳扇元帥様つてのは、どんな人物なのか、説明してくれないか。」

すると導節は、

「これはあくまでも想像だが、鳳扇元帥様はあまり素顔を見せないだけでなく、その容姿は謎に包まれているとの事だ。」

「いったい、どんな方なんでしょうか。」

「さあな、一切謎に包まれているんだ。その姿を見るまでは、引き下がる訳にはいかないからな……。」

「おいつ、もうすぐ翔風殿に到着するぞっ。」

あれからどのくらいの時間が経過しただろうか。

導節達は翔風殿の門前まで辿り着き、主である鳳扇元帥のいる玉座に案内されたのだが、全く姿を見せる事無く時間が経過していったのである。

「いつたい、鳳扇元帥様はいつになったら我々の前に現れるんだ。」

「そんな、私に言われても……。」

「おいつ、こんなところで大声を出すなよ。」

「そうですね、神聖な場所なんですからあまり大声を出すのは良くないと思うんですが……。」

「そやで、現八はんがそんな大声出したら、鳳扇元帥はんが出て来いひんやんか。」

「みんな落ち着け、そんなんじゃ鳳扇元帥様が来ないじゃないか。」

「そうだよな、此処はひとつ鳳扇元帥様が来るのを待とう。」

「あつ、どうやら鳳扇元帥様が見えられた様ですよ。」

暫くして、部屋の奥から鳳扇元帥が導節達の前に姿を現したのである。

『よくぞ参られた、我はこの翔風殿の守護者・鳳扇元帥である。』

「お初にお目に掛かります。私は天空八将神の一人・犬山導節と申す者でございます。」

「同じく、犬江新兵衛と申します。」

「同じく、犬飼現八と申す。」

「私は、犬塚信乃と申す者にございます。」

「某は、それがし犬田小文吾と申す。」

「わいは、犬坂毛野言いますねん。」

「私は、犬川莊助と申します。」

「同じく、犬村大角と申す者にございます。」

『遠路遙々御苦勞であつた……。時に犬山導節殿には、他の者達と力を合わせ闇の一族を次々と倒していった事は、まさに感慨深いものがある……。』

「ところで、鳳扇元帥様には是非お伺いしたい事がございます。」

『いったい、どのような事なのか……。』

「実は、とある場所から「太極破斬剣」が、何者かに因つて盗まれたと言うのですが、何か御存知ではないかと……。」

『……確かにそう言う噂は聞いた事がある。しかし、実際に見た訳ではないが、恐らく闇の一族の仕業では無いかと推測される。』

「やはりそうでしたか……。」

「導節、何か分かったのか。」

「ああ、太極破斬剣を盗んだ犯人がな……。」

「いつたい誰なんだよ、太極破斬剣を盗んだ犯人は……。」

「その犯人とは……、鳳扇元帥様……あなたですつ。」

「なつ、何を馬鹿な事を言っただ。」

「いくら導節様でも、言っつていい事と悪い事がありますよ。」

「いやつ、導節の言っつている事はまんざら嘘では無いぞ。」

「大角殿まで……。」

『な、何を言っつかと思えば……無礼であるぞ。それに、我がその太極破斬剣を盗んだ犯人だと申すのか。』

「ああ、それに本物の鳳扇元帥様なら、太極破斬剣の事を口にしない筈……。」

「その通り、この事を知っつているのは、天空界の神々のみ……。」

「と言っつ事は、まさか鳳扇元帥様が偽者だと言っつのか。」

『我が偽者だと言っつ証拠があるのか……。』

「証拠なら、此処にあるぜつ。」

すると大角は、いきなり鳳扇元帥の覆面を剥ぎ取り、更に鳳扇元帥の袖を捲くつていくと、なんと二の腕には黒い炎の紋章が施されていたのである……。

「あつ、あの紋章は……。」

「闇の一族の紋章……。」

「やはり、貴様だったのか……冥獣四天王の一人、闇の妖術師・青龍將軍っ。」

すると、偽の鳳扇元帥は不敵な笑みを浮かべながら導節達に本性を現わにしていた。

「さすがは天空八将神、よくぞ見破った。」

「本物の鳳扇元帥様を何処へ隠したっ。」

「本物の鳳扇元帥は、もうこの世にはいない……。」

「何だつて……。」

「そんな馬鹿な……、鳳扇元帥様が消えただなんて有り得ない。」

「てめえ、正直に白状しやがれっ。鳳扇元帥様を何処に隠しやがった。」

「そんなに鳳扇元帥に逢いたいなら、逢わせてやるっ。但し、行き先は地獄の一丁目だかな……。」

すると青龍將軍は、時空魔鏡を導節達に向け、一瞬にして鏡の中へ吸い込まれてしまったのである……。

「……ん、此処はいつたい何処なんだ。」

「何だか、薄気味悪いところですね。」

「ほんまや、今にも何かが出て来そうな雰囲気やなあ。」

「でも、いつたい我々は何処にいるのでしょうか。全く見当が付きません……。」

「俺達はこのまま元の世界に戻れないのか……。」

「冗談じゃないぜ。あの青龍將軍のせいぞろい、変な所へ飛ばされたんだからな。」

「導節様、これからどうしましょうか。」

「そうだな、先に鳳扇元帥様を捜すのが先決だな。青龍將軍を倒すのは、そのあとだ。」

と、その時だった。

「おいっ、あれを見る……。」

現八は突然上空を見上げ、無数の飛炎魔ひえんまと云う妖怪が一斉に導節達

を襲い始めたのだった。

「げっ、何か変な化け物が来てもつたで。」

「グズグズしている場合じゃあなさそうだな。」

「よっしゃ、一気にやっつけてやるぜえ。」

「みんな、気合いを入れて行くぞっ。」

導師達は一齐に飛炎魔の大群を攻撃していき、一気に蹴散らしていったのである。

「此処に居ても埒が空かないぜ。」

「ああ、急いで鳳扇元帥様を捜さないと……。何だか心配になってきたぞ。」

「せやな、何か嫌な予感がしてしゃあ無いねん……。」

「よしっ、先を急ごう。みんな、行くぞっ。」

暫くして、導師達は鳳扇元帥を探索し続けたのだが、全く見つからず仕舞いに終わってしまった。

「おいっ、いったい何処にいるんだよ。」

「私に言っても困りますよ。」

「現八、少しは落ち着いたらどうだ。」

「それより、少し休みましようよ。何だか疲れてしまいましたよ。」

「そうだな、あの辺りで一休みしよう。」

導節達は長い間歩きっぱなしだったので、大きな大木の下で休む事にしたのだ。

それから数時間後、ふと導節が目を覚ますと、目の前に白い霧もやが拡がり、その白い霧の中から妖気を漂わせた妖怪の軍団が襲来して来たのだ……。

「ちっ、こんなところまで奴等が来てしまったか……。」

導節はたった一人で妖怪軍団に戦い挑んでいくが、あまりの数の多さに苦戦を強いられていくのだった。

「これじゃ切りが無いな。仕方が無い、アイツ等には悪いが、こいつを使わせて貰うぜっ。」

すかさず導節は、懐から《天地滅殺破》の巻物を取り出し、一気に妖怪軍団を全滅していくのだった。

「ふう、何とか危機を脱した様だな。」

更に数時間後……。

休憩を終えた導節達は、再び鳳扇元帥を捜す事を続けたのである。

「あゝあ、俺達どれだけ歩けば辿り着くんだよ……。」

「私も歩き疲れましたよ……。」

「でも此処って、何だか不気味な所ですね。」

導節達が辿り着いた場所は、無数の大木たいぼくに囲まれた樹海だった。

「導節様っ、この近くから物凄い靈気を感じます……。」

「信乃、それは本当か……。」

「でも、どうやってこの樹海を通り抜けるかだよな。」

「それなら心配ありません、私にいい考えがあります。」

そう言つて、信乃は印を結んで術を唱えると、樹海の蔦や葉っぱが一瞬にして道が開けていき、導節達はその樹海の中へと入っていったのである。

「すげえな、信乃にこんな術が使えるなんて……。」

「ほんまやで、信乃はんはやっぱ天才やなあ。」

「いやあ、そんなたいした事じゃありませんよ……。」

「ところで、鳳扇元帥様は本当にこの奥にいるんだろうな。」

「ええ、間違いありません。」

暫く歩いていると、導節達の目の前に大きな岩牢が見えてきたのであった……。

「この中に、鳳扇元帥様が……。」

「でもこの岩牢……封印されているぞ。」

「いったい誰が……。こんなところに封印をしたんだ。」

と、突然導節達の前で大爆発が起こり、なんと冥獣四天王、闇の妖術師・青龍將軍がいきなり現れたのだった。

「あつ、てめえ……。なんでこんなところにいるんだ。」

『ははは……。そうはさせないぞ、天空八将神……。』

「そうか、本物の鳳扇元帥様を幽閉したのは、青龍將軍だったのか。」

『その通りだ。あの時我は、翔風殿を襲撃し、鳳扇元帥を真つ先に幽閉した後、我は鳳扇元帥に為り済まし貴様達を待ち伏せしていたのさ。』

「……てめえだけは絶対に許さないつ。」

「鳳扇元帥様を岩牢から出しやがれ。」

「せやつ、ええ加減に解放せえや。」

「あつ、その剣はまさかつ、盗まれた太極破斬剣……。」

『こいつさえあれば、例え貴様等が束になって掛かって来ようとも、我が前では無敵なのさ。』

「くつ、つまり問答無用つてな訳だな。」

「構うもんか、何が何でも鳳扇元帥様を助けてやるぜつ。」

「せやつ、貴様なんか一気にやつつけたるわ。」

『ふんつ、貴様等は分かっている様だな。我が今までの三人とは格が違うと云う事を……。』

「へんつ、そんなのやってみなきゃ分かんないだろ。」

「だったら、どっちが強いか……試しに戦ってみるか。」

『面白い……、あとで後悔する事になるが、それでも構わないか。』

「ああ、後悔はしないさ。俺達は最後まで戦い抜くぜつ。」

「我等天空八将神の底力を見せてやるつ。」

『来いつ、後で吠え面を掻くなよ。』

遂に始まった天空八将神対青龍將軍との冥獣四天王最終決戦。果たして、勝負の行方は・・・。

第貳拾參話 冥獸四天王篇 最終部 怪魔將牙神、復活を遂げる。

悪魔の樹海に出没した冥獸四天王、闇の妖術師・青龍將軍との最後の戦いを迎えた天空八將神。

しかし、圧倒的な強さを誇る青龍將軍の前に、導節達は苦戦を強いられていたのである。

『ふはは・・・、無駄だと言った筈だ。貴様等が束になっても、我を倒す事は出来ぬ。』

「くっ、あまりにも強すぎるぞ。」

「いったいどないせえっちゆうねん。」

「こうなったら、天空変身で戦うしかない。」

「ああ、みんな変身するぞっ。」

導節達は急いで印を結び、天空変身の術を唱え始めたのである。

『唸れっ、天空の力・・・。超天空変身・八將神変化っ。』

すると導節達は、金色の光に包まれながら天空八將神に変身していった。

『貴様等・・・まさか天空八將に変身したのか・・・。』

「ああ、こいつに変身してしまえば、こっちのもんだからな。」

「つまり、俺達は天下無敵の天空戦士つてな訳だ……。」

「わい等を舐めとつたら、怪我するでえ。」

『ふっ、何が言いたいんだ。まだ、私の真の恐ろしさを知らない様だな……。』

「何っ、どう言う事だ……。」

すると青龍將軍は、すかさず懐から銀色の丸薬を取り出し、そのままその丸薬を飲み込んでいったのだ。

暫くすると、青龍將軍の身体に異変が生じ、徐々にこの世の物とは思えない異形な化け物に変貌を遂げたのだ。

「な、そんな馬鹿な……。」

「青龍將軍が、なんであんな姿に……。」

「……はっ、そうか。奴はあの銀色の丸薬のせいだ。」

「導師、どう言う事だよ……。」

「奴は《妖幻丹》と言う特別な丸薬を飲んだせいで、恐ろしい魔物に変身したのだ。」

「それだけではない、今まで以上に力が増幅されていて、例えば我々の力を以てしても、勝ち目は零に等しいと考えるべきではないかと……。」

「だったら、力尽くで戦うしかないだろ。」

「ああ、やってやろうじゃないか。俺達天空八将神の実力を見せてやろつぜ。」

『ぐおぐ、貴様等に我を倒すなど不可能だ。』

「へんつ、てめえなんか一気にやっつけてやるぜ……。」

「みんな、行くぞつ。」

すると、導節達は一齐に青龍將軍に攻撃を仕掛けていくが、力が増幅した青龍將軍には全く打撃を受ける事は出来なかった……。

「な、何々だ……。」

「めっちゃ強うなってるやんか。」

「俺達の攻撃が通用しないぞ。」

『ははは……、だから言った筈だ。何度やっても我は無敵の青龍將軍だとな……。』

「くそつ、どうすりゃいいんだよ。」

「このままじゃ、奴を倒すのは困難だぜ。」

「導節様、何かいい方法はありませんか。」

すると導節は、ある一計を案じるのだった。

「かくなる上は、合体技で応戦するしかないな……。」

「よしっ、やってやるうじやないか。」

「俺達天空八将神の力を見せてやるうぜ。」

すると、導節達はそれぞれの力を集中させ、一気に青龍將軍に攻撃を仕掛けていったのだが、全く歯が立たず逆に青龍將軍は太極破斬剣で導節達を弾き飛ばしていくのだった。

「駄目だ……あの太極破斬剣で近付く事すら出来ないぜ。」

「なんとしてでも、あの剣を何とかしないと……。」

「信乃、何とかならないのか……。」

暫くして、信乃は導節にこう話していった。

「確率は少し低めですが、何とかやってみます……。」

そう言って信乃は、狙いを定めて青龍將軍の持っている太極破斬剣を得意の術で見事命中し、太極破斬剣は空中回転しながら遠くへ弾き飛ばしていったのだ。

「よしっやっ、命中したぜ。」

「これで奴は丸腰だ。新兵衛、急いで太極破斬剣を……。」

「分かりました。」

新兵衛は自慢の駿足で太極破斬剣を拾いあげ、導節の手元に渡していったのである。

「さあ、青龍將軍。これで貴様はとっておきの切り札を失った訳だ。もうどうする事も出来まい……。」

『ぐぐぐ……、おのれ貴様等あ。だが、その剣が無くとも我は無敵の將軍なり。いかなる技をも、我は最後まで戦う為るぞ……。』

「喧しい、てめえがどんな攻撃して来ようと、俺達は負けやしねえんだよ……。」

「せやつ、わい等が本気になれば、貴様なんか一発で倒したるわいっ。」

「さあて、そろそろ決着をつけようじゃないか……。」

『うぬぬ……、もう勘弁ならぬ。我が最強の妖術を喰らうがいい。』

すると青龍將軍は、導節達に妖術を繰り出し、全滅させようとしたのだが、天空八将神に変身した導節達は、ひらりと避けながら反撃を開始した。

「天空秘術・爆裂飛翔暫。」

「天空秘剣・火炎爆龍斬。」

「天空秘術・雷鳴流星破。」

「天空秘術・氷結龍神破。」

「天空秘剣・爆雷破壊斬。」

「天空秘術・虚空雷神衝。」

「天空秘術・龍神招来覇。」

「天空秘術・四神来々拳。」

導節達の必殺技が一斉に放たれ、青龍將軍は大打撃を受けたのだが、あともう少しのところまでとどめを刺す事は出来なかった。

『ま、まだ我は死なん。我は最後まで戦い抜くのみ……。それが、闇の一族の宿命だからな。』

「何が宿命だつ。そんなの俺達には関係の無い事だ。」

「その通りだ、我等は天の命令に従う者。闇の者を裁くのは我等天空八将神の使命だからさ。」

「これまでに闇の妖怪達を倒して来たが、貴様の様な奴は天の神をも恐れぬ不埒者だと言う事をな……。」

「喰らえつ、我等天空八将神の力を……。」

再び導節達は、全神経を集中させながら青龍將軍に必殺技を放っていくのであった。

「唸れつ、天空の力……。必殺・爆龍八卦陣……。」

導節達の必殺技・爆龍八卦陣が炸裂し、遂に冥獣四天王最後の一人・青龍將軍は苦悶の声を上げながら消滅していったのだった。

「やったあ、これで冥獣四天王を全員倒したぜ……。」

「ずいぶん長かったな……。」

「ああ、これで一先ず冥獣四天王は全滅した訳だ……。」

「残るは、闇の一族……幻魔城城主・悪霊玉梓と、闇の僧侶・幻斎坊だけ……。」

「それだけやないで。たった今倒した青龍將軍の魂が、もう間もなく闇の大魔獣・怪魔将牙神のところへ向かっている筈やで……。」

「ちよつとやばいんじゃないのか。」

「それより、この中に閉じ込められた鳳扇元帥様を助けないと……。」

「そうだ、うっかり忘れていたぜ。」

「おいつ、急いで助けるぞ……。」

すると現八と小文吾の二人は、岩牢の扉を開けようとしたが、封印が施されており、誰もが諦め掛けたその時、導節が岩牢の扉の前に立ち、印を結んで術を唱えると、岩牢の扉が大爆発を起こし、急い

で鳳扇元帥を救出したのであった。

「鳳扇元帥様、ご無事でしたか……。」

『そなた達は……。』

「我等は封雷元帥様からの命令により、鳳扇元帥様を助ける様命ぜられた天空八将神にございます……。」

『何つ、するとお主達が……。左様か、忝ない。我は確かに、翔風殿の主・鳳扇元帥とは我の事だ。』

「やはりそうでしたか……。」

「もう心配ありません。闇の妖術師・青龍將軍は我々が倒しました。」

『何つ、それは本当か……。』

「ええ、我々は闇の一族を討伐する為に、あまた数多の妖怪を倒してきました。無論、冥獣四天王も……。」

『だが、心配なのは……。奴等が闇の大魔獣である怪魔将牙神を復活させようとしている事だ。』

「その心配ならいりません、我々が命を賭けて怪魔将牙神の復活を阻止します。」

「この太極破斬剣がある限り、何も恐れる事ありません。」

「その通りや、わい等天空八将神が闇の一族を蹴散らしたるわい。」

「そして、闇の大魔獣である怪魔将牙神も……。」

『……天空八将神の者達よ、助けてくれた礼に、我が翔風殿に招待したそうと思つておる。』

「しかし、どうやって此処を脱出するかだよな……。」

『その心配は無用じゃ。我が術で、此処から脱出し……一気に翔風殿まで移動しようぞ。』

そう言つて、鳳扇元帥は術を唱えると一瞬にして樹海を脱出し、暫くして導節達は翔風殿に到着したのであつた。

「ふう〜、何とか脱出する事が出来たな。」

「それにしても、あんな所は二度とゴメンだぜ……。」

「せやっ、息苦しいつてもんやないで。」

「そうですね、私もあんな所は死んでも行きたくありませんよ。」

「だけど、心残りなのは……何時怪魔翔牙神が復活するかだよな。」

と、そこへ鳳扇元帥が導節達の前に現れ、遂に怪魔将牙神が復活を遂げたと導節達に告げたのだった。

『導節よ、どうやら怪魔将牙神が復活した様だ……。』

「何ですって……。」

「遂に、恐れていた事が現実になってしまったか……。」

「聖魔大戦が、いよいよ始まるのか……。」

「けど、こつちには太極破斬剣があるんだ。」

「それだけやないで、わい等には天空の力があんねん。怪魔将牙神なんか、わい等の力で倒したるで……。」

「おいつ、毛野。あまり無茶な事を言うなよ。」

「そうですね、小文吾の言う通り……。あまり無茶をすると、命を落とし兼ねますからね。」

暫くして、鳳扇元帥は導節達に『この事を元始天尊様に報告し、応援要請をする。』と告げ、更に雷界殿の封雷元帥にも助太刀して貰おうと提案するのだった。

「本当ですか、鳳扇元帥様……。」

「奴等がこれを聞いたら、きっとびっくりするだろうな。」

「せやけど、帰って逆効果とちゃうやるか。」

「そんな事は無い。これも、天の運命さだめなのかも知れないな。」

「大角の言う通りだ。俺達は人間界を護る為に奴等と戦っているんだぜ……。」

「でも本当に、これで良かったのでしょうか。」

「いいに決まってるじゃないか。俺達は天空八将神なんだぞ。そんな弱気な事を言っただうするんだよ。」

「みんな聞いてくれ……。奴等との最終決戦は、一週間後に決行する。それまでに、各自休息を摂るのだ。」

「分かったぜ、導節。」

「俺達は何時でも準備は万端だぜ。」

「導節、あまり無理をするなよ。お前だけが頼りなんだからな。」

「ああ、分かっているさ。大角も、気合い入れて行けよ。」

「ばつちり任せておけ。さあて、暫く休むとするか……。」

導節達は、最終決戦を一週間後に控え、各自休息を摂る事にした。

その日の夜、一人翔風殿の外を散歩していた導節は、天を仰ぎながら夜空を眺めていた。

「いよいよ一週間後か……。もし、この戦いが終われば、俺は仲間と別れなければならぬんだ。この事は、誰も言わないほうがよさそうだな……。」

すると、導師の前に白装束を身に纏った白髪の老人が姿を現した。

「導師よ、久しぶりじゃな……。」

「あつ、貴方様はもしや……白劉はくじゅう老師様。」

「暫くぶりじゃな。」

「老師様もお元気そうで……。」

「いよいよ一週間後じゃな、最後の戦いが……。」

「……はい。」

「お主なら出来る。自分を信じるのじゃ。」

「自分を……信じる。でも私は、これまでに仲間と戦ってきました。しかし、正直自信がありません。」

「大丈夫じゃ。わしが、お主に勇気のでる呪文を授けよう。」

そう言って、白劉老師は導師に勇気の出る呪文を唱えた。

すると、導師の身体から心の底から徐々に勇気が湧いて来たのだ。

「……老師様、何だか勇気が湧いてきました。これで、最後の戦いに挑む事が出来ます。」

「それは良かったのう。じゃが、あまり無理をするではないぞ。他の仲間と力を併せ、闇の一族を翻弄させるのじゃ。」

「分かりました、老師様……。」

「ではっ、そろそろ帰るとするかのう。導師よ、武運を祈っておるぞ。」

「ありがとうございます、老師様……。」

それから一週間後、いよいよ闇の一族との最終決戦の時を迎えた。

導師達は、いつも以上に気合いを入れ、最後の戦いに挑むのであった。

「みんな、準備はいいか……。」

「ああ、こっちは何時でも準備は万端だぜ。」

「目指すは、宿敵・悪霊玉梓のいる幻魔城。」

「ではっ、皆の者……行くぞ。」

遂に始まった闇の一族との最終決戦。

果たして、導師達は闇の一族を討ち滅ぼす事が出来るのか。

最終話 光と闇の戦い、天空八将神対怪魔将牙神。

その頃、幻魔城では玉梓が闇の大魔獣・怪魔将牙神の復活の儀式を行っていると、遂に怪魔将牙神が完全復活を遂げたのであった。

『おお、遂に復活しおったぞ。闇の大魔獣・怪魔将牙神が……』

『おめでとうございます、玉梓様。これで、我等闇の一族も万々歳でございます。』

『怪魔将牙神さえ復活してしまえば、天空八将神であろうと敵うものか。それに、我等には最後の切り札があるからのう……』

『玉梓様、冥獣四天王が滅びた今、こうやって四つの魂が集結し、怪魔将牙神として新たな命を手に入れたのですから、さぞかし満足でありますよな。』

『ところで幻斎坊よ、何か変わった事は起きなかつたかのう。』

『さあ、今のところ変わった事はございませんが、遂七日程前に天空八将神らしき気配が、新たな力を手に入れたとの事でございますが……それが何か……』

『いやっ、何でも無い……』

と、そこへ玉梓の手下が間もなく天空八将神が幻魔城に接近していると報告していったのであった……。

『申し上げます、北西の方角より天空八将神がこちらに向かっております……』

『何っ……、遂に来たか。』

『どうなさいますか、玉梓様……』

『決まっておろう、全兵士を総動員させ、戦闘体制を整えるのじゃ。』

『御意、早速兵士を集め天空八将神を迎え討ちましょう。さあ、闇の兵士どもよ、配置に就くのだっ……』

闇の僧侶・幻斎坊の命令に因り、城の全方位を囲む様な形で、天空

八将神を迎え討つのであった。

一方、幻魔城に向かっていた導師達は、八頭の飛龍に跨がって一直線に急降下していき、幻魔城の城門近くまで着陸していったのである。

「此処が、幻魔城か……。」

「悪霊・玉梓は、この城の天守閣にいるんだな……。」

「あと、闇の僧侶・幻斎坊もいるしな。」

「なんやあ、わい緊張して来たで。」

「私も、毛野殿と同じです。本当に、我々だけで奴等を倒す事が出来るのでしょうか。」

「心配するな、自信を持って戦えば、必ず勝つ事が出来る。自分を信じる……。」

「分かりました。」

「さて、一丁暴れるかあ……。」

「腕が鳴るぜつ。」

「いいか、誰一人命を落とすんじゃないぞ。」

「万事任せておけ。俺達は絶対に死なん。」

「ではっ、行くぞつ。」

導師達は幻魔城の城門を打ち破り、迫り来る幻魔城の兵士を蹴散らしながら城の中へと攻めていった。

「邪魔をする者は切り捨てても構わぬ。」

「うおおっつ、退けえっ……。」

死にとうなかつたら、此処を退きなはれや。」

次々とやって来る幻魔城の兵士を倒し、遂に幻魔城の城内へと攻め入ったのだった。

「導師様っ、この城の中はとんでもない妖気を感じます。」

「気をつけるっ、何かが来るぞつ。」

と、城の天井から素早く動く巨大な黒い影が導師達を襲撃し、さすが大角が術を施すと、その巨大な黒い影が落下していったのだ。

「こいつは、妖怪・紅蜘蛛だ。」

「何てデカい化け物なんだ……。」

「油断するなよ、どんな攻撃をするか分からないぞ。」

すると、いきなり妖怪・紅蜘蛛が口から糸を吐き、莊助の身体をぐるぐる巻きにしながらか天井へ攀じ登っていくのだが、間一髪のとこで信乃が術で紅蜘蛛の糸を焼き切り、莊助を助けたのである……。

「大丈夫か。」

「ええ、助かりました……。」

「それより、あの紅蜘蛛をやっつけないとヤバイんじゃないか。」

「導節、ここは一つ俺に任せてくれないか。」

「大角、お前一人で大丈夫か……。」

「心配するな、必ずあの化け物を退治してやるぜ……。」

「頼むぞっ。」

すると大角は、妖怪・紅蜘蛛の前に立ち塞がり、攻撃を仕掛けていくが、妖怪・紅蜘蛛も素早い攻撃で大角を翻弄させていったのだ。

「畜生、これじゃ狙いが定まらないじゃないか……。」

だが、大角は最後まで諦める事はなかった。

狙いを定めて術を放ち、妖怪・紅蜘蛛は見事倒されていくのであった。

「これで、先に進む事が出来るぞ。」

「いいか、玉梓は必ず天守閣にいる筈だ。隈なく隅々捜すんだ。」

そして、遂に導節達は天守閣に辿り着き、此処で初めて悪霊・玉梓と幻斎坊と対峙する事となったのだ。

『よくぞ此処まで辿り着いたな、天空八将神。』

「悪霊・玉梓、闇の僧侶・幻斎坊。貴様等の野望もこれまでだっ。」

「我等天空八将神が、貴様等を成敗にやってきた……。」

「潔く天の裁きを受けるがいい……。」

『ほほほ……、お主等たった八人で我等を倒すと申すか……。』

『所詮我等は無敵の軍団。たかが貴様等人間如きに、敵う筈もあるまい……。』

「喧しいつ、てめえ等の悪事なんか先刻承知なんだよ。」

「せやでつ、あんさん等の野望なんか、わい等でキツチリ形をつけさせて貰いまっせ。」

「てめえ等が闇の大魔獣を復活させていた事ぐらい、分かっていたんだよ……。」

「いい加減に諦めたらどうなんだ。」

「さあ、さつさと返答するんだ。」

『お、おのれ小賢しい連中め……。数々の無礼雑言、断じて許さぬ。』

『来いつ、天空八将神。この場で決着をつけようぞ……。』

「望むところだつ。貴様等を再び封印してやるから覚悟しろ。」

遂に始まった天空八将神対悪霊・玉梓、闇の僧侶・幻斎坊との決戦が幕を開けようとしていた……。

導師達は悪霊・玉梓と闇の僧侶・幻斎坊の攻撃を避けながら術を繰り出し、果敢に挑むのだが、強靱な力を誇る悪霊・玉梓と幻斎坊には全く歯が立たず、苦戦を強いられていくのであった。

『ほほほ……。さつきの勢いはどうしたの。全然本気を出していないじゃない。』

「煩え、まだまだこれからだぜ。」

「こんなの、ほんの序ノ口に過ぎないんだからな……。」

『ふつ、負け惜しみを言いおつて……。所詮人間つてのは、その程度の力しか發揮出来ぬ生き物なのだからな。』

「喧しいつ、てめえ等なんかに好き勝手な真似はさせないぜ。」

「わい等が本気になれば、貴様等を倒す事なんか出来るんやで。」

「こうなったら、一気に決着をつけようぜ。」

再び導師達は、悪霊・玉梓と幻斎坊に術を施し、一進一退の攻防が続いたのだが、遂に打撃を与える事が出来たのである。

『お、おのれ……。よくもやってくれたな。』

『かくなる上は、貴様等を纏めて始末してやるつ……。』

そう言つて、幻斎坊は闇の妖術を施し、導師達に打撃を与え弾き飛

ばしていったのである。

「駄目だっ、近付くどころか奴等に打撃を与えられないや。」

「もはや、万事休すか……。」

「まだ諦めるんじゃない、最後まで戦うんだ。」

「そんなの分かっている。しかし、俺達はもう全ての力を出し切ったんだ……。」

「せやけど、わいも殆ど残ってへんで。」

「残る手立てはないのか……。」

「導節、こうなったら奥の手を使うしかないな……。」

「ああ、あの手があつたか……。」

『な、何をするつもりじゃ……。』

「悪霊・玉梓、闇の僧侶・幻斎坊。これで貴様等の最後だっ。」

すると導節達は、最後の必殺技・天空爆裂八卦陣を放ち、遂に玉梓と幻斎坊は苦悶の声を上げながら滅び去ったのであった……。

「遂に、悪霊・玉梓と闇の僧侶・幻斎坊を倒したぞ。」

「けど、まだ戦いは続いているぞ。」

「最後の敵・怪魔将牙神がな……。」

と、その時だ。

城全体が激しい揺れを起こし、いきなり天守閣が一瞬に崩れ、導節達の目の前に巨大な黒い影が現れ始めた。

「あ、あれは……。」

「まさか……怪魔将牙神。」

「とうとう復活しやがったか……。」

「マジでちよつとやばいんじゃないのか。」

「こんなデカい化け物だなんて聞いていないぞ……。」

「物凄い邪気を感じるで……。」

「おいっ、導節。このままじゃ俺達遣られてしまっぞ。」

「慌てるな、俺達には天空の力があるんだ。力を合わせて戦えば、必ず勝てる……。」

「よっしやっ、みんな導節の言葉を信じようぜ……。」

『おおっつ。』

いよいよ、最終決戦を迎えた天空八将神対闇の大魔獣・怪魔将牙神の戦い……。

強力な攻撃技を繰り出す怪魔将牙神を相手に、導節達天空八将神の連続技が冴え渡る。

「こいつ、めっちゃ強いぞ。」

「こんなに強いとは思わなかったぜ。」

「いいか、何としてでも怪魔将牙神に打撃を与えるんだ。」

激しい攻防が続く中、怪魔将牙神が口から灼熱の炎を吐き、導節達を焼き殺そうとしていた。

しかし、導節達も負けじとそれぞれの得意な術で応戦するも、強靱な身体が全ての術を跳ね除けてしまうのであった。

「駄目だっ、あの頑丈な身体では俺達の術が通用しないぞ。」

「……仕方があるまい。こうなったら、最後の手段だ……。」

「最後の手段って、何をするつもりだ。」

すると導節は、八大童子の宝玉を使って怪魔将牙神の魔力を封印しようと考えていた。

「そんなの無理に決まっているだろう。」

「大丈夫だ、俺を信じろ……。」

「導節がそこまで言うのなら、やるしかないだろう。」

「せやっ、わいも導節はんを信じまっせ。」

「俺も……。」

「私も……。」

「みんな……。」

「よし、八大童子の宝玉を一斉に怪魔将牙神に向けるんだ。」

導節達は、八大童子の宝玉を一斉に怪魔将牙神に向けた。

すると、八大童子の宝玉が金色の光を放ち、怪魔将牙神の魔力を一瞬にして封じる事が出来たのだ……。

「やったあ、遂に怪魔将牙神の魔力を封じる事が出来たぞ。」

「あとは一気に攻めるのみ……。」

「勝負はこれからだぜ……。」
導節達が怪魔将牙神にとどめを刺そうとしたその時、怪魔将牙神の身体から紫色の煙を放出し始めた。
何と、その紫色の煙の正体は……身を隠す為の煙幕だったのである。

「畜生、あともう少しで怪魔将牙神にとどめを刺す事が出来たのに……。」

「これじゃ、手も足も出ないじゃないか。」

「……よしつ、俺に任せておけ。」

「小文吾、お前大丈夫なのか……。」

「ああ、俺の身体の中に眠る獣人の血が流れているんだ。こんな煙幕ぐらい、俺の力で吹き飛ばしてやるぜ。」

「頼むぞ、小文吾……。」

すると小文吾は、全神経を集中させ、徐々に獣人に変身していくのである……。

『うおおっ。』

獣人に変身した小文吾は、力を込めて風を起こしながら怪魔将牙神の身体を包み込まれている紫色の煙を一気に吹き飛ばしていったのだった。

「でかしたぞ、小文吾……。」

「今度こそ、怪魔将牙神を倒してやるぜ。」

「いいか、みんな力を合わせて一気に決めるぞ……。」

そう言つて、導節達は全神経を集中させ、怪魔将牙神に究極の必殺技を繰り出していったのであった。

『天空秘伝究極奥義・爆雷烈火八卦陣。』

導節達の放った究極奥義である爆雷烈火八卦陣が見事怪魔将牙神に命中し、遂に怪魔将牙神は大爆発を起こしながら消滅していったのであった。

と、同時に幻魔城は崩れ去っていき、導節達は急いで幻魔城から脱出していったのである。

「漸く、戦いは終わったんだな。」
「もう二度と、復活する事はあるまい……。」
「まあ、それにしても長かったよなあ。」
「本当ですよ。もう、こんな戦いは懲り懲りです……。」
「あつ、わいも今同じ考えをしとったんですわ……。」
「えっ、毛野もそんな事を考えていたのか。」
「あれっ、導師殿の姿が見えませんが……。」
「そう言えば、さつきから見当たらないんだけど、何処へ行ったんだろうな。」
すると、大角が他の仲間にごう告げたのだった。
「みんな聞いてくれ。導師は誰にも話すなと言っていたが、導師は旅に出ると言ってさつき出発したそうだ。」
「本当か……。」
「嘘だろ……。」
「何で言ってくれなかったんだよ。」
「導師も、相当悩んでいたらしいからな。」
「ほんまやで。だったら、導師はんの後を追い掛けようやないか。」
「それは無理だ。導師は修行の旅に出たんだ。そつとしておいてやるうじゃないか。」
「そうだな、その方が導師らしくていいんじゃないのかな。」
「じゃ、此処でお別れだ。また逢おうぜ。」
「ああ、達者でな……。」
「ほな、さいなら……。」
「皆さん、さようなら……。」
「みんな、あばよ……。」
「では、失礼します。」

こうして、伝説の八犬士の戦いは幕を降ろした。
犬山導師、大江新兵衛、犬飼現八、犬塚信乃、

犬坂毛乃、犬田小文吾

犬川莊助、犬村大角。

八人の犬士達は、それぞれの道を歩いていき、いつか再会出来る日を楽しみにしていた。

時は戦国時代中期に起きた、幻想的かつ壮大な物語である。

魔界八犬伝《光に導かれし八玉の犬士》 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0499c/>

魔界八犬伝《光に導かれし八玉の犬士》

2010年11月5日00時55分発行